

カシバ植外運動

—工藤町(小井畠)にまつわる中批撃録並—

1979

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

カンバ垣外遺跡

—工藤氏・(小井豆)にまつわる中世城館址—

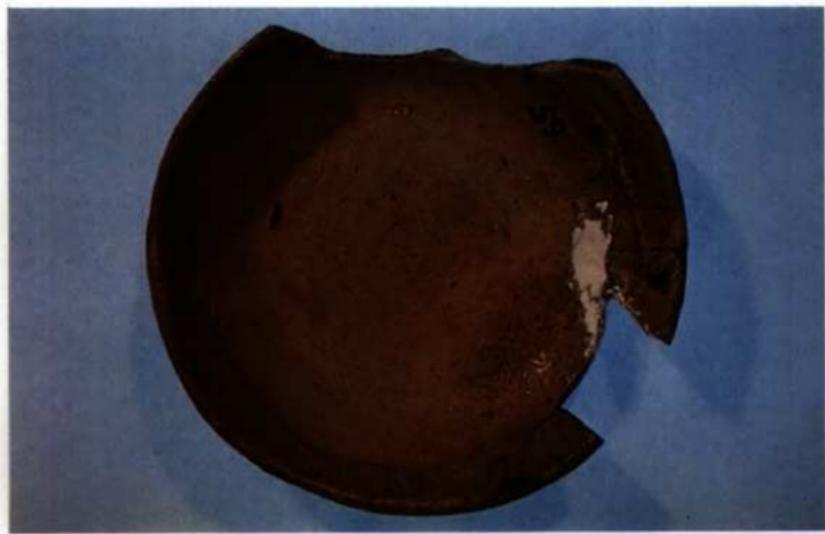


井戸址内部の壁面の状態（大きな穴は水口、小さな凹凸はノミの跡）

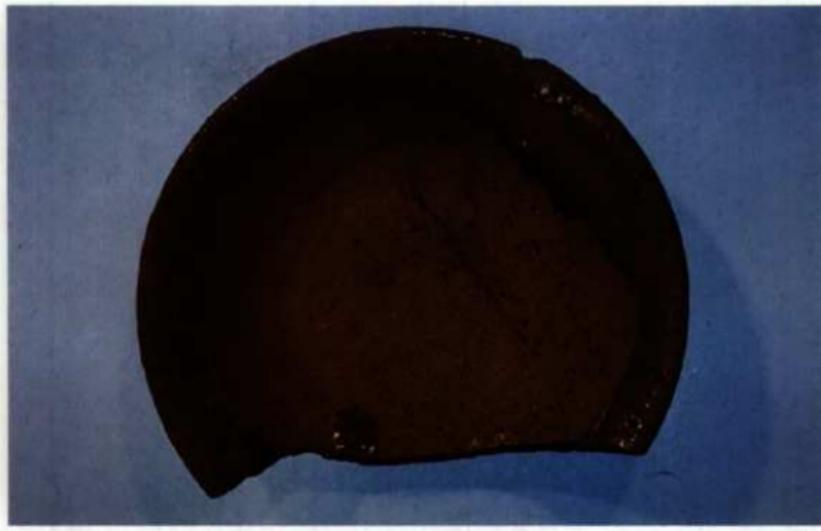
1979

伊那市教育委員会

南信土地改良事務所



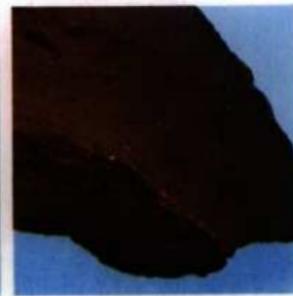
1



2



1



2



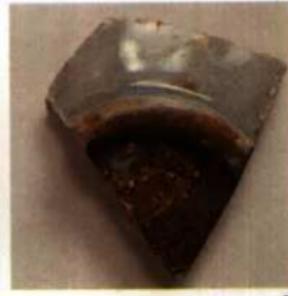
3



4



5



6



7



8



9



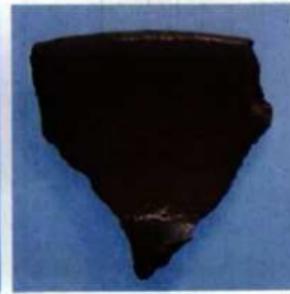
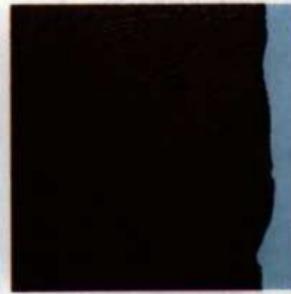
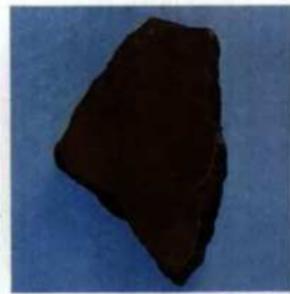
10



11



12





1

2

3

4

5

6

7

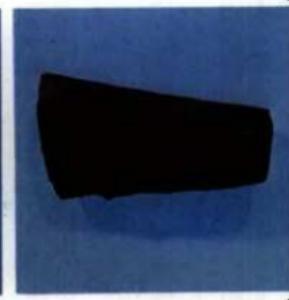
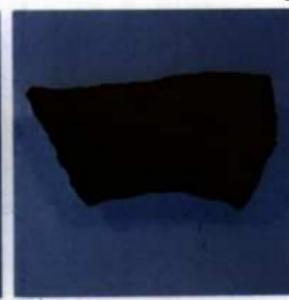
8

9

10

11

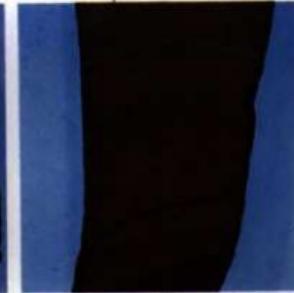
12





1

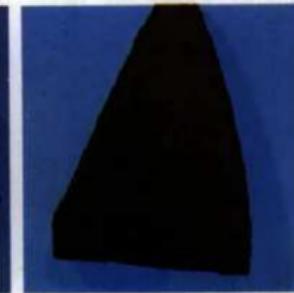
2



3



4



6



7



9



10



11



1



2



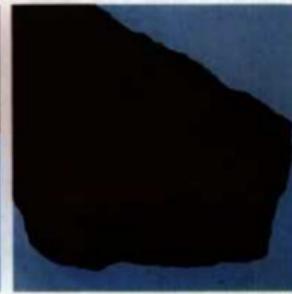
3



4



5



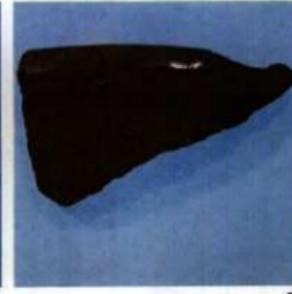
6



7



8



9



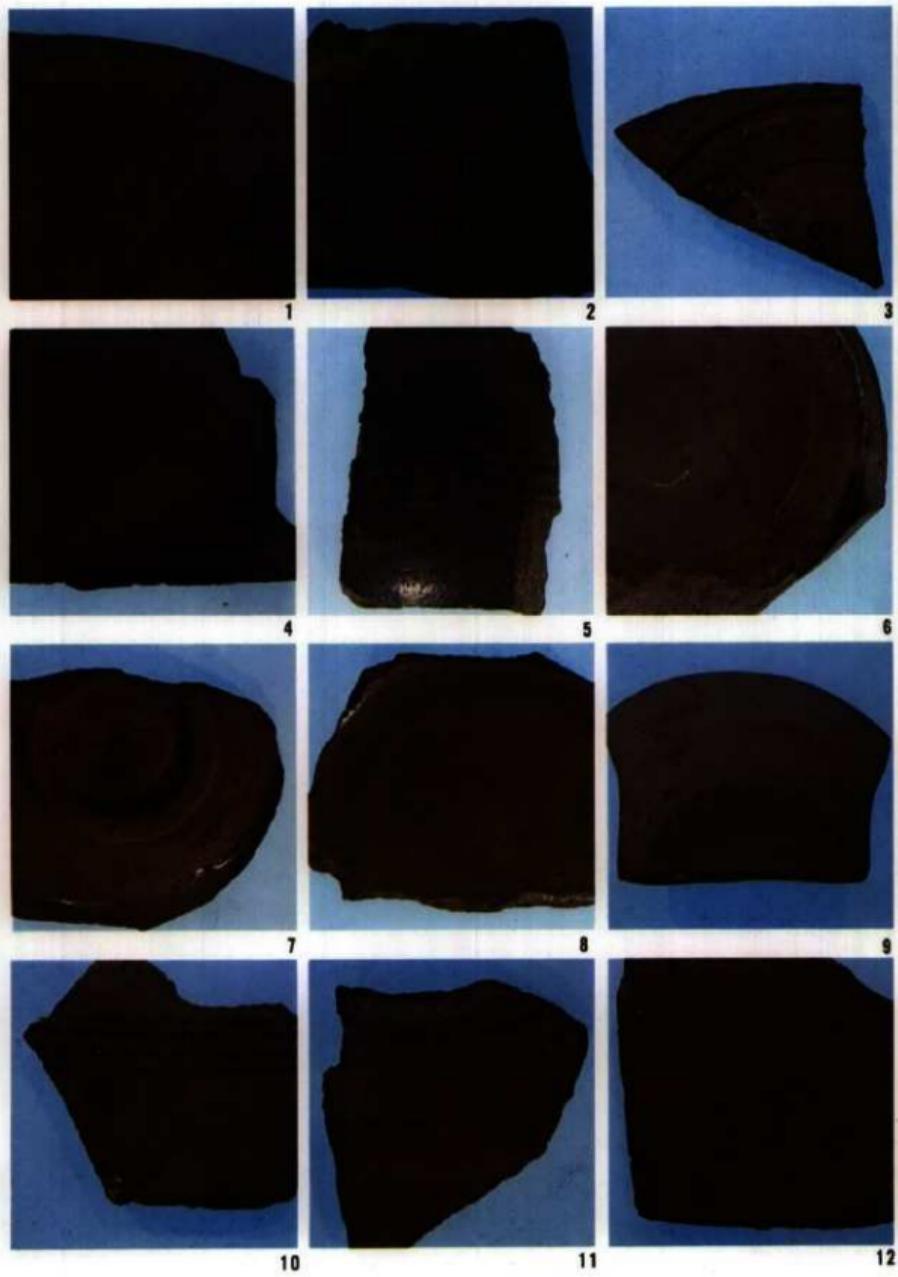
10



11



12



序

カンバ垣外遺跡附近は地元の人は内城という小字名で呼んでおり、小出に現存している諸城のなかでも、規模と言い、その形態といい、注目すべき点が多かった。この附近一帯は水田地帯が多いために、西部開発事業地区に該当しました。遺跡本来から考えてみるならば、現状保存が最ものぞましい姿ではあったが、世間の動きからして、それは不可能なために、発掘調査を実施して、記録保存という形をとって、後世に伝えることになったわけであります。

この調査は昭和53年12月から昭和54年1月にかけて、団長に日本考古学协会会员の友野良一氏をお願いして調査團を編成し、測量調査と発掘調査の二本立てで行ないました。

測量調査は、調査員を中心にして、遺跡の全域にわたり、測量図を完成いたしました。

調査は城郭の中心部附近を発掘しました。その成果についてはこの報告書の通りであります。この調査は平山城の研究としては県下でも類を見ない調査となり、初期の目的を完成することができたことは誠に喜こばしい限りであります。

なお、この調査にあたり、御協力をいただきました土地改良区の地元役員の方々、南信土地改良事務所職員一同、長野県教育委員会、地元作業員の方々に対し厚く御礼申し上げます。出土した遺物について鑑定していただいた瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗広氏、常滑市教育委員会社会教育課赤羽一郎氏、信州大学農学部氏原輝男助教授の方々に厚く御礼申し上げます。

最後に、永い間、遺跡の地主であり、古くより遺跡地に关心を示し、この発掘の成果を見ずに他界された故辰野伝衛氏の御冥福を祈ります。

昭和54年3月8日

伊那市教育委員会

教育長 伊 沢 一 雄

凡　　例

1. 今回の発掘調査は西部開発事業に伴なう、土地改良事業で、第6次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で、国・県・市の補助金のもとに、事業は長野県南信土地改良事業所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和53年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塙政美、友野良一

○図版作製者

○造構及び地形

友野良一、飯塙政美

○写真撮影

○発掘及び造構

友野良一、飯塙政美

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。
6. 出土陶磁器の判別については、瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗広先生、常滑市教育委員会社会教育課赤羽一郎先生に、出土穀類については信州大学農学部氏原暉男助教授に御教示をいただいた。
7. 出土陶磁器、穀類は伊那市考古資料館に保管されている。

目 次

口 統(1~8)

序

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 環 境	(1~4)
第1節 位 置	(1)
第2節 地形・地質	(2)
第3節 歴史的環境	(2~4)
第Ⅱ章 発掘調査の経過	(5~8)
第1節 発掘調査の経緯	(5)
第2節 調査の組織	(5)
第3節 発掘日誌	(6~8)
第Ⅲ章 造 構	(9~48)
第1節 住 居 址	(9~15)
第2節 竪 穴	(15~26)
第3節 土 坂	(27~29)
第4節 柱 穴 群	(29~33)
第5節 寄 址	(34)
第6節 井 筋	(35~36)
第7節 溝 状 造 構	(37~39)
第8節 堀 坐	(38~40~46)
第9節 井 戸 坐	(46~47)
第10節 集 石	(48)

第IV章 遺 物	(49~58)
第1節 土 器	(49~50)
第2節 石 器	(50)
第3節 陶磁器, 内耳土器	(51~54)
第4節 砧 石	(54~55)
第5節 古 錢	(55~56)
第6節 金 属 製 品	(56~57)
第7節 自然遺物 (出土穀類)	(57~58)
第V章 所 見	(59~69)

挿図目次

第1図 位置及び遺跡分布図	(1)
第2図 伊那市内の城塞址分布図	(3)
第3図 小出氏の系図	(4)
第4図 地形及び遺構配置図	(10)
第5図 第1・3号住居址実測図	(9)
第6図 第2・7号住居址実測図	(12)
第7図 第4号住居址実測図	(13)
第8図 第4号住居址埋葬炉断面図	(13)
第9図 第5号住居址実測図	(14)
第10図 第6号住居址実測図	(15)
第11図 第1号竪穴実測図	(16)
第12図 第2号竪穴実測図	(17)
第13図 第3・4号竪穴実測図	(18)
第14図 第5・6・7・8号竪穴実測図	(19)
第15図 第9号竪穴実測図	(20)
第16図 第10号竪穴実測図	(20)
第17図 第11号竪穴実測図	(21)
第18図 第12号竪穴実測図	(22)
第19図 第13号竪穴実測図	(22)
第20図 第14号竪穴実測図	(23)
第21図 第15・16号竪穴実測図	(23)
第22図 第17号竪穴、第4号柱穴群実測図	(24)
第23図 第18号竪穴実測図	(25)
第24図 第19号竪穴実測図	(25)
第25図 第20号竪穴実測図	(26)
第26図 第21号竪穴実測図	(26)
第27図 第22号竪穴実測図	(26)
第28図 第1号土塙実測図	(27)
第29図 第2号土塙実測図	(27)
第30図 第3号土塙実測図	(28)
第31図 第4号土塙実測図	(28)
第32図 第5・6号土塙実測図	(29)
第33図 第1号柱穴群実測図	(31)
第34図 第2号柱穴群実測図	(32)

第35図	第3号柱穴群実測図	(33)
第36図	第1号窖址実測図	(34)
第37図	第2号窖址実測図	(34)
第38図	第1号井筋実測図	(36)
第39図	第1号溝状造構実測図	(39)
第40図	中堀実測図	(40)
第41図	中堀断面図	(41)
第42図	中堀断面図	(41)
第43図	中堀の南側の堀実測図	(43)
第44図	中堀の南側の堀断面図	(44)
第45図	外堀実測図	(45)
第46図	外堀断面図	(46)
第47図	外堀断面図	(46)
第48図	井戸址実測図	(47)
第49図	第1号集石実測図	(48)
第50図	土器拓影	(49)
第51図	石器（ノミ状工具）実測図	(50)
第52図	砥石実測図	(55)
第53図	古錢拓影	(56)
第54図	金属器実測図	(57)
第55図	出土穀類の形状（第1号窖址）実測図	(58)
第56図	工藤氏の系図（信濃勤皇史取より）	(67)

表 目 次

第1表 出土陶磁器及び内耳土器一覧表 (51~54)

図版目次

- 図版1 遺跡全景
- 図版2 遺構
- 図版3 遺構
- 図版4 遺構
- 図版5 遺構
- 図版6 遺構構
- 図版7 遺構構
- 図版8 遺構構
- 図版9 遺構構
- 図版10 遺構構
- 図版11 遺構構
- 図版12 遺構構
- 図版13 遺構構
- 図版14 遺構構
- 図版15 遺構構
- 図版16 遺構構
- 図版17 遺構構
- 図版18 遺構構
- 図版19 遺構構
- 図版20 遺構構
- 図版21 遺構構
- 図版22 遺構構
- 図版23 遺構構
- 図版24 遺構構
- 図版25 遺物出土状況
- 図版26 遺物出土状況
- 図版27 遺物出土状況
- 図版28 出土穀類の拡大写真及び比較

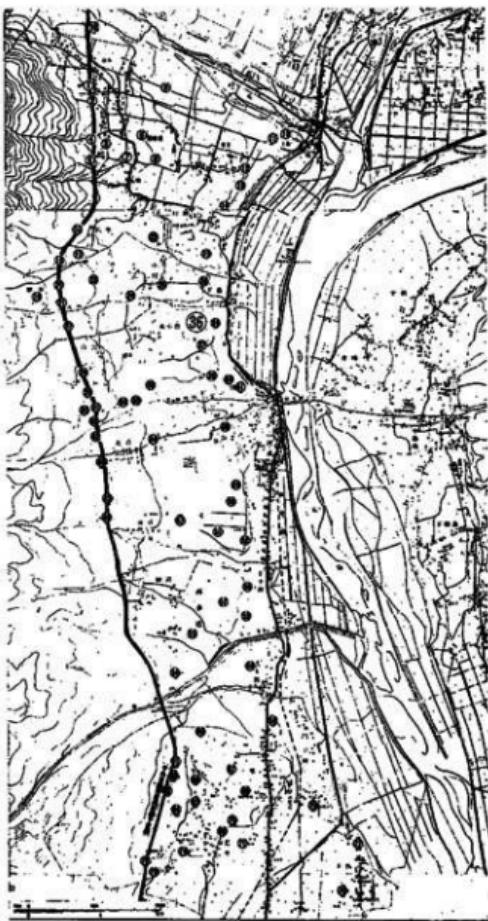
第Ⅰ章 環 境

第1節 位 置

カンバ垣外遺跡は、長野県伊那市西春近南小出部落に所在しています。遺跡地までの道順は、飯田線下島駅で下車して、細窪といわれている洞を西へ約10分程登りつめると信盛寺に着く、その寺の北西の一帯が遺跡で、地元の人々は一般的に内城と呼んでいる場所が遺跡地の中心部である。

遺跡の名称

1 城平上	41 唐木古墳
2 城 平	42 北丘B
3 常輪寺址	43 北丘A
4 宮 林	44 北丘C
5 山の根	45 南丘B
6 山 本	46 南丘A
7 常輪寺下	47 南丘C
8 上 村	48 眼子田原
9 北 桑	49 山の神
10 上島下	50 上の塚
11 上 島	51 浜渡南原
12 東方B	52 下小出原
13 東方A	53 天伯原
14 村岡北	54 南 村
15 村岡南	55 東 田
16 大 塚	56 天 伯
17 中 原	57 下小出原
18 百駄刈	58 井の久保
19 西垣外	59 長木原
20 細ヶ谷A	60 山の下
21 細ヶ谷B	61 富浦沢
22 小出城	62 富士山下
23 宮ノ原	63 富士塚
24 浜射場	64 広垣外1
25 中 村	65 広垣外2
26 中村東	66 鳥井田
27 山寺垣外	67 高速道
28 白沢原	68 西春近南小
29 名 題	学校附近
30 名題西古墳	69 安岡城
31 名題東古墳	70 城の腰
32 名題南	71 横 吹
33 児 塚	72 和 手
34 鶴見西古墳	73 上手南
35 鶴見東古墳	74 宮入口
36 カンバ垣外	75 寺 村
37 丸 山	76 下 牧
38 南小出南原	77 下牧絆坂
39 薬師堂	78 山本田代
40 唐木原	



第1図 位置及び遺跡分布図

第2節 地形・地質

今まで西春近地区についての地形、地質について述べられているのを参考にして述べてみることにする。『伊那谷に一般的に通ずる地形は西に、中央アルプス、東に南アルプス、その前山である伊那山脈とにはさまれた南北に細長い盆地状地形を呈している。中央の最低部に源を諏訪湖に持つ天竜川が流れ、一般的によばれている縱谷状地形を成している。さらに本流である天竜川の両岸には数多くの小河川があり、それらによって形造された大小の扇状地、河岸段丘、渓谷が展開している。伊那市附近では小沢川・三峰川・小黒川が主たる河川であり、これらは同様に大きな段丘や扇状地を形成した要因となっている。』(眼子田原遺跡報告書による)

カンバ垣外は小戸沢川右岸段丘、天竜川右岸段丘、山麓扇状地の末端という3要素の重なった地点に存在し、標高は670m～680m前後に位置している。現在は水田や桑畑に利用されている。現在の水田耕作面より40～50cm位でソフトローム層が、それから約1m位でハードローム層に達し、礫の検出はまれであった。この地点はいわゆる解析地形の典型的なところである。

第3節 歴史的環境

西春近の諸城をあげてみると、北から城平（註1）、小出城（註11）荒城（新城）（註2）、村岡の唐木弥七宅の東側（註3）、フブキ垣外の城（註4）、内城（註5）、丸山（註6）、細窪（註7）、物見や城、表木城、中村の城（安岡城）（註8）があげられる。これらの城を形態的に考えてみると山城、平山城に分類でき、山城は物見や城、城平、他は平山城に属している。平山城のうちでも大部分は天竜川とその支流である小河川の解析地形が最も発達した地点に築城されている。ただ安岡城だけはこのケースには属しない。

西春近地区的武士の発生は定かではないが、最初は工藤氏の系統から始まるとして考えてよからう。犬房丸伝説によると『曾我兄弟の仇討事件で、この兄弟の父祐泰が同族の工藤祐経に討たれ、幼い兄弟は母につられて再縁、曾我祐信に養われた。弟の箱王丸5才のとき出家にされんとして箱根権現の別当にあずけられたが、独り山野をかけめぐって武技を練り、出家をきらって鍛錬これつめていた。北条時政これを聞きあわれに思い、引きとて鳥帽子兜とし自分の名一字をあたえて、五郎時致と名のらした。建久4年5月、頼朝、諸将をひきいて富士の裾野に巻狩をもよおした。この時五郎時致は兄の十郎祐成と共に獵場にしのび入り、この月の28日の夜、工藤祐経の仮屋に侵入、遂に父の仇をうつ。更に頼朝は祖父祐親の仇である。これにも一太刀に及ばんとして兄弟共に本陣に斬りこんだが、兄は、仁田四郎に討たれ、弟時致は、大あばれにあばれて手に負えぬを、五郎丸という大刀無双なるもの女の被服をかぶって油断させ、遂に時致をひつとらまえてしまった。頼朝の前に引きえられて、訊問されている時、祐経の子大房丸、たまりかえて五郎時致の面を鉄扇にて打ちええた。頼朝これをみて、捕えられ縛についた者を打つとは、誠に武士道に反する者だとて大いにいかった。(註9)『犬房丸は小数の重臣を伴い、伊那（孤島地籍）へ配流されたが、其の後、小出に居城を構いた。然し末だ幼少であり幕府から養育のために、孤島、大島、殿島、青島、牧島、

- A 燐火台～砕しい山城の址
 □ 城址
 □ 遺址
- ① 中村の城（安岡城）
 - ② 表木城
 - ③ 物見ヶ城
 - ④ 砲座
 - ⑤ 丸山
 - ⑥ 内城
 - ⑦ 荒城（新城）
 - ⑧ 本城（小出城）
 - ⑨ 城平
 - ⑩ 小黒城
 - ⑪ 春日城
 - ⑫ 義信の城
 - ⑬ 埋吹城
 - ⑭ 狐林
 - ⑮ 郡園古城
 - ⑯ 小沢の古城
 - ⑰ 經塚林
 - ⑱ 黒ン城
 - ⑲ 古町古城
 - ⑳ 城林
 - ㉑ 乾の古城
 - ㉒ 千寿院
 - ㉓ 城山（春日城）
 - ㉔ 浅間社
 - ㉕ 丸山
 - ㉖ 登内の城
 - ㉗ 向山の城
 - ㉘ 織塚城（中ノ城）
 - ㉙ 天神山城
 - ㉚ 春日城
 - ㉛ 物見ヶ城
 - ㉜ 古城
 - ㉝ 北城
 - ㉞ 一夜城
 - ㉟ 黒河内の城
 - ㉟ 池田城
 - ㉟ あら城
 - ㉟ 遊戯の城
 - ㉟ 中島の城
 - ㉟ 桥場城（竹松城）
 - ㉟ おヶ城
 - ㉟ 佐賀沼の城
 - ㉟ 本城（船島城）
 - ㉟ 城
 - ㉟ フブキ垣外の城
 - ㉟ 西春近村岡唐木弥七宅東側



第2図 伊那市内の城塞址分布図（上伊那郡歴史纂修田徳登氏の調査による）

福島、小出島の七島を賜った。その故、近郷一帯の開田等の農事を振興させた。当時、小出東形の地に大通院と称した古寺であって、これを再建し大通院常輪寺と名づけて、これに守本尊の華嚴教迦如来を安置し開基となった。』^{註10}

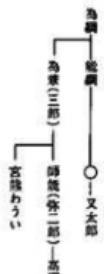
工藤氏と小出 『工藤氏は藤原南家の系統の一つで藤原姓を名のっていたが、為憲というのが、遠江守となり木工介についたので世間ではこれを木工(もく)と藤を合せて工藤と呼んだのが工藤氏の始めであるといわれている。工藤氏は伊豆の東海岸、伊東を中心に関ん日本全国的に繁栄した氏族で、藤原の荘園の荘司となったりして、この伊那にも平安時代から荘官などの役で土地に定着するようになったものだろう。小出に長くいた地頭の工藤氏も、鎌倉時代の末になると、北条氏と足利の争いが続々、南北朝の全国的争乱が起きると旧領をそのまま保持することが不可能になり、小出出身だから小出氏と名のって諱訪藩に身を寄せることになった。工藤氏の譲状は、鎌倉初期の建長年間の文書で小出郷の分割について極めて細かく書きのこしてある。諱訪の史家伊藤富雄氏の解説によれば、工藤為憲この人は小井弓二吉の地頭であって、頼朝とほとんど同時代の人であった。頼朝が正月死ぬとこの人もその年の六月に死んでいる。その子の能綱が小井弓二吉の北郷をついでいる。北郷とは、小黒川から藤沢川、井の宿まで、南郷という言葉は出てこないが、現在の諱訪形は小出島諱訪形と書いた古文書があるから、諱訪形中心の地が小井弓二吉の南郷にあたり、しかもここ総領地頭たる忠綱の領土となり、本家となっている。北郷の能綱は一分地頭の分家となっている。』^{註9}

カンバ垣外遺跡は古くより城郭地形を成していたと、伝えられていた。現在は、内堀とその内郭部、外堀、小戸沢川に面した北側の段丘崖に構築された帶曲輪等、城郭に関連した遺構が残っており、昔の面影を留めている。附近的水田、畠の小字名を記してみると次のようになる。第4図参照
内城、カンバ垣外、墨敷畠、久根添、堀端、大手町、湯田、小宮、前田、中曾根、西畠、畠田、南原である。

(飯塚政美)

参考文献

- (註1) 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 — 伊那市西春近 — 昭和47年度
日本道路公団名古屋支所・長野県教育委員会 刊
- (註2) 西部開拓事業 (畑地帯総合土地改良事業) 緊急発掘調査報告 東方A・村岡北・村岡南・常輪寺下・北条遺跡
1975年 伊那市教育委員会・南信土地改良事務所 刊
報告書のなかでは村岡南遺跡として取り扱っている。
- (註3) 註2と同じ報告書に記載してある。村岡北遺跡として取り扱われている。
- (註4) 西部開拓事業 (畑地帯総合土地改良事業) — 緊急発掘調査報告 — 中村遺跡
1978年 伊那市教育委員会・南信土地改良事務所 刊
- (註5) カンバ垣外遺跡のなかに含まれており、本報告書がこれに該当する。
- (註6) 昭和54年実施する予定である。内城遺跡の南側に位置している。
- (註7) 南小出原遺跡 — 緊急発掘調査報告書 —
1978年 伊那市教育委員会・タカノ株式会社 刊
- (註8) 上伊那郡誌歴史編のなかで古城の章で篠田徳登氏が著述してある。
- (註9) 伊那の古城 篠田徳登著 伊那毎日新聞社刊
- (註10) 伊那市寺院跡
伊那市教育委員会・伊那市文化財審議委員会 刊
- (註11) 小出城 (城南)・浜坂場遺跡 (緊急発掘調査報告書)
1975年 伊那市教育委員会・南信土地改良事務所 刊



第3図 小出氏の系図

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西春近地区の西部開発事業（県営畠地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島、東方部落、昭和49年度の東方、村岡、城、山本部落にわたって行なわれてきました。昭和51年度は沢渡の上段（眼子田原）地区が該当しました。昭和52年度は南小出、宮の原、中村部落にかけて行なわれました。本年度は柳沢地区と白沢、南小出地区が該当し、特に南小出地区のカンバ垣外遺跡は水田が多いため、また、工事の都合からして発掘調査は12月上旬から着手いたしました。

発掘着手以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では、その件について承諾しましたので、市教育委員会を中心に、カンバ垣外遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を行うことにしました。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節 調査の組織

カンバ垣外遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢 一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢続一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽 映士	伊那市教育委員長
・	向山 述雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	石倉 俊彦	伊那市教育委員会社会教育課長
・	有賀 武	・ 講師補佐
・	米山 博章	・ 係長
・	三沢真知子	・ 主事

発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会員
・	御子柴泰正	・
調査員	飯塙 政美	・
・	田畠 長雄	・
・	福沢 幸一	・

第3節 発掘日誌

昭和53年12月6日 本日よりカンバ垣外遺跡へ入る。現況が水田であるために、ローム層までの深さが判明しないので、ところどころにグリット掘りを実施して、その深さを調べる。深さがわかったので、ブルトーザーを入れて、耕土剥ぎを実施する。ブルトーザーの耕土剥ぎを実施した個所のうちで、最も南西の寄った地点より掘り始める。掘り進んでいくと、各所に点々と黒土の落ち込みがみられ。これを第1号柱穴群とする。同遺構の南東の一角。それから北東の一角にそれぞれ落ち込みがみられ。これを前より第1号住居址、第2号住居址とした。二つの住居址を掘り下げていくと、切り合い関係になっている模様で新たに第3号住居址、第7号住居址とした。

昭和53年12月7日 第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址、第7号住居址の掘り下げを、昨日に続いて進めていく。また、下の東側の水田の掘り下げに手をつける。第1号住居址は第3号住居址に切られているのが判明した。それによると、第1号住居址は円形で、床面上より平出3A式の土器が出土した。第3号住居址は東壁にカマドを有する竪穴住居址となった。第2号住居址は第7号住居址を切っており、床面上より薄手指痕細線文式土器、最近、注目されだした塙屋式土器の出土をみた。第1号柱穴群と前述した四つの住居址の完掘をする。東側の水田からは各所に柱穴の跡がみつかり、第2号柱穴群とする。この柱穴群の南東の一角に方形状の黒い落ち込みが、さらにその東側に小さな落ち込みがみられた。それぞれ、第1号竪穴、第22号竪穴と命名した。水田の最南部に西から東へ川が流れたと思われる砂層の堆積がみられたので、これを井筋と考えた最北部に方形状の落ち込みがみられ、第5号住居址とした。同住居址の東側に円形状の黒い落ち込みがあり、これを第1号窖址とする。

昭和53年12月8日 さらに東側の水田の掘り下げを開始する。掘り下げていくと、柱穴群が発見され、第3号柱穴群とする。この柱穴群はその大きさや間隔が整然としていた。柱穴群の東側に落ち込みが発見され、これを第4号住居址とする。北側に同様に黒土の落ち込みがみられ、第1号土塙とする。南側には昨日同様に井筋の跡が明瞭としていた。

昭和53年12月9日 第2号柱穴群を掘り下げていくと、柱穴群の間に土塙状の落ち込みがみられ、これらをそれぞれ第2号土塙、第3号土塙、第4号土塙、第5号土塙、第6号土塙と命名し、夕方までに柱穴群とともに、ほぼ完掘する。

昭和53年12月11日 第1号竪穴と第5号住居址及び第1号窖址の掘り下げを開始する。第1号竪穴を掘り下げていくと北西の一角から古錢が出土した。主なものは開元通宝、元祐通宝、熙寧



何が出るかな興味シンシン

元宝、洪武通宝、永樂通宝等全て中國錢であった。床面より浮いて無数の右が割合に整然と配列してあったが、何を意味するかはわからず。四角に柱穴が発見され屋根があったものと思われる。第5号住居址をほぼ完掘しあえる。なかから中世の陶器片の出土をみた。第1号窯址は、ほぼ、その完掘を終了する。形は断面袋状を成し、なかから古瀬戸灰釉おろし皿の出土をみた。

昭和53年12月12日 第3号柱穴群と第1号土塙、第4号住居址、及び井筋の掘り下げを実施する。

第3号住居穴群は南北1

間、東西4尺5寸の等

間隔に配列してあり、

しかも柱は角柱となっ

ていた。

第1号土塙内からは現在でははっきりしないが何か炭化状のものが検出された。第4号住居址は繩文中期初頭の住居址で埋甕炉をもっていた。以上前述した遺構を本日一杯では



滑車を利用しての井戸掘り

ば完掘となった。井筋の掘り下げを続けていくと、かなりの量の砂が堆積しており、長期間にわたって流れたあとが究明できた。

昭和53年12月13日 本日は井筋の掘り下げを完了する。井筋のなかからは古瀬戸、常滑等の陶器片の出土をみた。

昭和53年12月14日 本日は北側の方の水田のグリット掘りを開始する。一日中かかる。名遺構の検出につとめる。それぞれの遺構名は第2号竪穴、第3号竪穴、第4号竪穴、第5号竪穴、第6号竪穴、第7号竪穴、第8号竪穴、第9号竪穴、第10号竪穴、第11号竪穴、第12号竪穴、第13号竪穴、第14号竪穴、第15号竪穴、第16号竪穴、第17号竪穴、第18号竪穴、第19号竪穴、第20号竪穴、第6号住居址、第1号溝状遺構、第2号窯址、第1号集石と命名する。

昭和53年12月15日 第2号竪穴から第13号竪穴までの掘り下げを実施する。第2号竪穴は深くて切り込み面から床面まで1mを越え、なかから炭の附着した数多くの石がみられた。また、その石の下は、おそらく一時的に埋めたものと思われるような、攪乱層が入っていた。遺物としては古銭、鐵器、磁石、古瀬戸・常滑陶器器片の出土がみられた。

昭和53年12月16日 各竪穴を掘り下げていくと、どの竪穴からも時代決定をするような遺物が出土した。第2号竪穴から第13号竪穴までの完掘をする。新らに第6号住居址、第1号溝状遺構、第1号集石の掘り下げを実施する。本日は新らに井戸の検出をみた。この発見は極めてまれで、中世城郭址を語るのに活気的であった。夕方まで、かかって、第6号住居址、第1号溝状遺構、第1号集石の完掘をみた。遺物としては第1号溝状遺構は相当量の中世陶磁器片の出土をみた。

昭和53年12月18日 以前に遺構名のついた第14号竪穴、第15号竪穴、第16号竪穴、第17号竪穴、第18号竪穴、第19号竪穴、第20号竪穴、第1号窖址の掘り下げを実施し、夕方までにはほぼ完掘してしまう。さらに、昨日、検出された井戸に三叉を組んで、滑車を使用して掘り下げていく。本日、夕方までかかっても、まだ底まで達しなかった。だが、なかより遺物の出土をみたので、大般の時代決定はなされた。掘



井戸址の危険性を考えて縄を張る

址の存在しそうな場所にブルトーザーを入れて耕土剥ぎを実施してみると、堀は鍵の手にまわっていた。あまりにも大きな堀なので、全面的に掘るのは不可能と考え、重点的にセクションを残して掘ることにし、それは夕方までにはほぼ完了する。第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址、第5号住居址、第7号住居址、第1号柱穴群、第2号柱穴群、第3号柱穴群、第1～第6号土塁、第1号窖址、第1号竪穴、第21号竪穴、第22号竪穴、井筋の清掃をして写真撮影をする。

昭和53年12月19日 第2号竪穴から第20号竪穴、第2号窖址の清掃及び写真撮影をする。井戸址は本日夕方までかかってその終了をみた。堀はそのセクションを清掃して写真撮影をする。この堀の外側にもう一本、堀が存在するのではないかと考えてグリットを入れてみると外堀が発見され、その掘り下げを実施する。昨日、写真撮影をした遺構の実測をする。

昭和53年12月20日 井戸址の清掃をして、写真撮影をする。昨日、写真撮影をした遺構の実測をする。作業員達を総動員して外堀を大般掘り尽す。夕方までに、その遺構のセクションを清掃して写真撮影を終了する。井戸のなかには10数カ所にわたって水の出た穴が検出された。



寒いなかごくろうさんでした

昭和53年12月22日～昭和54年1月9日 遺跡の残務整理をする。

昭和53年12月21日 井戸址の実測、外堀の実測、さらに全測図の作製、さらに今まで掘りたりなかった個所にところどころグリットを入れてみる。もう少し予算があったならば、もっと全面的に調査できたのになあと、思わずためいきが出た。各新聞紙上に井戸の発見を大きくかげてあった。できることならば、この井戸を保存してもらいたいが、いろいろの状勢からみて、なかなか困難な問題となろう。

(飯塚政美)

第III章 遺構

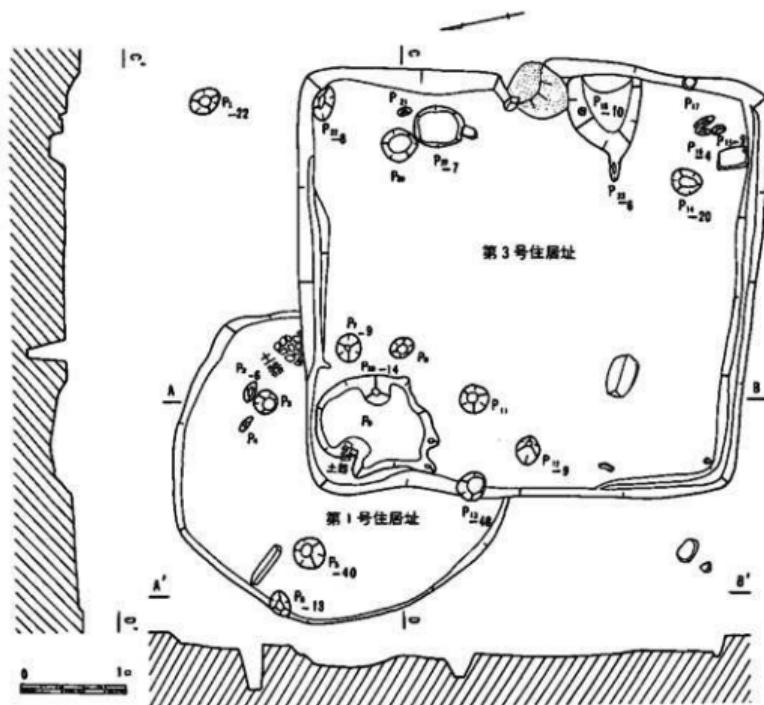
第1節 住居址

第1号住居址（第5図、図版3）

本址は調査地区の南端に検出された遺構である。ローム層を掘り込んだ円形の竪穴住居址で、その規模は南北3m20cm、東西は（東側は第3号住居址に切られている）推定3mである。壁はやや傾斜し、壁面にわずかに凹凸が認められ、軟弱である。壁の高さは10cm前後で低い部類に属している。

床面は小さな凹凸はあるが、全般的には水平で、軟弱となっていた。柱穴は第3号住居址との切り合い関係のために不明な点があるが、他の配列状況からして主柱穴となり得るのはP₃、P₅、P₈、P₁₃の4本と思われる。炉は現存していないかったが、P₉のすぐ西側に存在している土器の出土状態からして埋葬炉の形態をとっている可能性が強い。

遺物は平出3A式土器、及び埋葬炉に使用したと思われる土器（勝坂期）からして、本址は縄文中期中葉に位置づけられると思われる。



第5図 第1・3号住居址実測図



第2号住居址（第6図、図版3）

本址は発掘地区の中央部附近に発見されたものであり、地表下約40cmと割合に浅い面に存したために、擾乱がかなり浸透していた。ローム層を掘り込み、南北4m 75cm、東西4m 35cmに及び、やや南北に長い不整方形を呈する竪穴住居址である。壁は第7号住居址との切り合い関係が成されている一部を除いて、他は残存している。本址は第7号住居址を切っている。壁高は10cm前後で極めて浅かった。壁面は凹凸があり、やや傾斜気味で、軟弱であった。

ビットは数多く発見されたが、主柱穴と考えられるのは、そのうちの深いものと思われる。床面は、割合に凹凸が顕著で、軟弱気味であった。炉らしきものと考えられるもの、また、焼土らしき痕跡は発見されなかった。

遺物は薄手指痕細線文土器の出土があり、したがって、本址は縄文早期末葉から縄文前期初頭に位置づけられると思われる。

第3号住居址（第5図、図版3・5）

本址は第1号住居址を北西の一隅で切っている。ローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は南北4m 32cm、東西4m 12cmである。壁は全周し、概して10~20cm前後を測り、やや傾斜し、壁面の凹凸が目立ち、軟弱気味であった。床面は凹凸がはげしく、軟弱気味であった。

カマドは東壁中央部にあり、石組粘土カマドであるが、大部分、こわされてしまっている。ただカマドの跡を留めるかのように赤々と焼けた跡が、認められ、また、石芯に利用したと思われる石が発見された。ビットはかなりの数、発見されたが、そのうち、主柱穴となり得るのはP₂₀, P₁₁, P₁₄の3本と、現在は何か擾乱によって破壊されてしまったと思われるが、南西の一角に構築時には、おそらくあったと思われる柱穴を含めた4本と思われる。

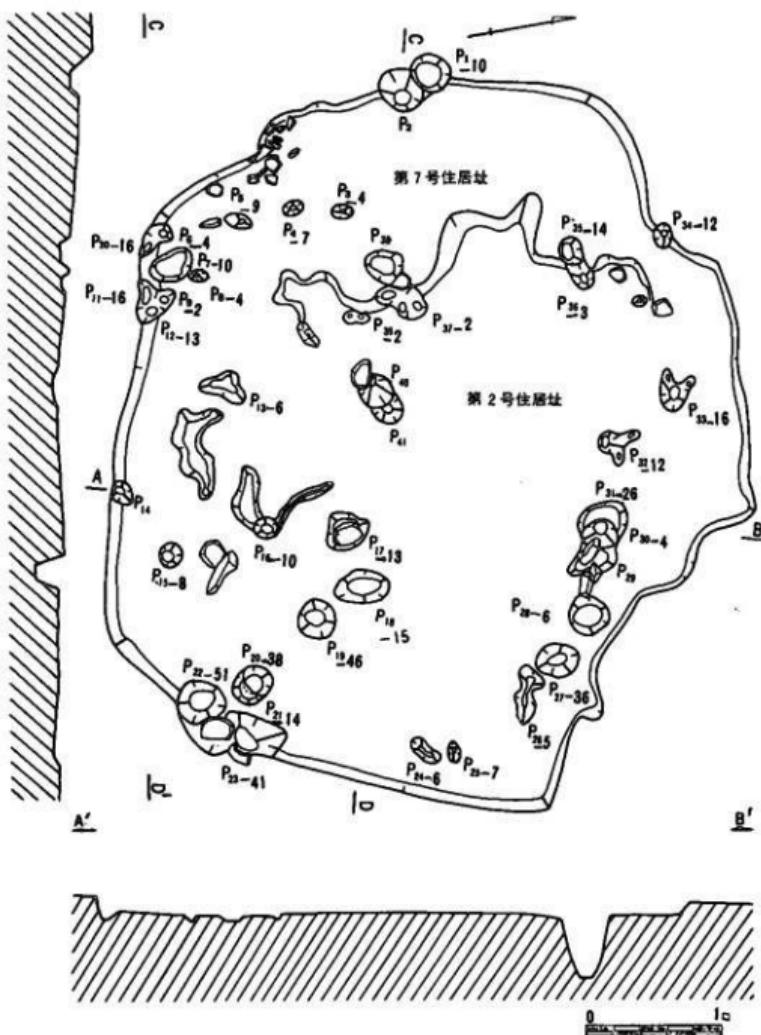
遺物は、カマド周辺に相当量密集して、土師器、須恵器の出土がみられ、したがって本址は奈良時代の住居址と思われる。

第4号住居址（第7～8図、図版5）

本址は発掘地区の最東端に発見され、ローム層を掘り込んで構築された竪穴住居址である。平面プランは東壁が残存していないので、明確ではないが推定するに不整円形になると思われる。規模は南北2m 80cm、東西は不明である。

壁高は数cmで、外傾気味で、軟弱である。壁面は凹凸がわずかに認められた。柱穴は不明確であった。床面は大般水平で、軟弱であった。炉は埋甕炉の形態を持ち、正位の状態でみられ、土器 자체は下半部が欠損していた。この土器上部には黒色混じりの褐色土、下半分は褐色土となっていた。これはいわゆる平出3A式の土器であった。

北側の床面上よりわざかに浮いて集中した土器が発見された。この土器は3個体分あり、全て勝坂式の古い方に含まれる一群であった。よって本址は縄文中期中葉の初頭に位置づけられると思われる。



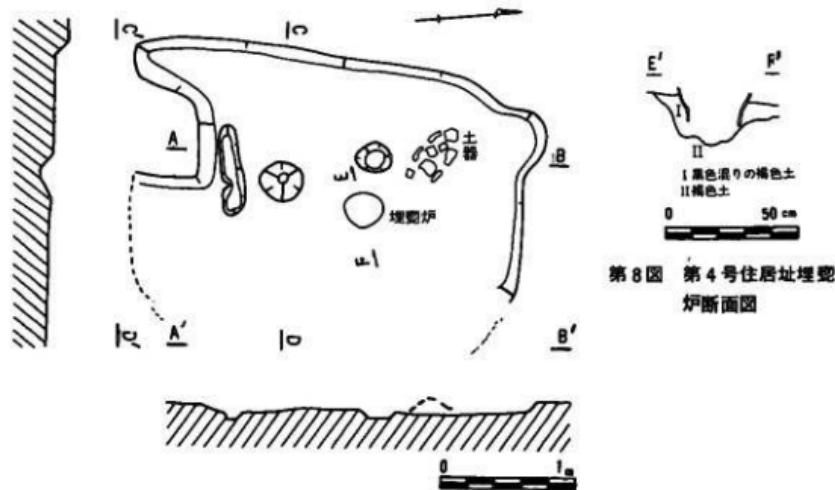
第6図 第2・7号住居址実測図

第5号住居址（第9図、図版4）

本址は発掘地域内では、ほぼ中央部に位置して発見され、ローム層を掘り込み、南北2m70cm、東西5m42cmの規模を有している。プランは隅丸方形の竪穴住居址である。壁高は西側が高く、北東は低くなっていた。その高さは40数cmから20数cmの範囲に属している。状態は西は内湾気味、軟

弱、壁面にわずかに凹凸がみられる。南は大般外傾し、壁面に凹凸が多い。北壁は外傾し、軟弱である。東壁は外寄り、軟弱で、壁面は大般フラットになっていた。床面は大般水平で、かたくたたいてあった。柱穴は35個所にわたって、大小雑々であったが、主柱穴は深いものが、該当し、他は部屋の間切り的なピットではないかと思われる。焼土および、何か焼いた痕跡は発見されなかつた。

遺物は中国の宋時代の青磁片、鎌倉末期から南北朝にかけての古瀬戸灰釉平茶碗の出土があつた。その他用途の不明な鉄器1点が出土している。したがつて本址は14世紀前半から14世紀後半にかけての住居址と思われる。



第8図 第4号住居址埋葬
炉断面図

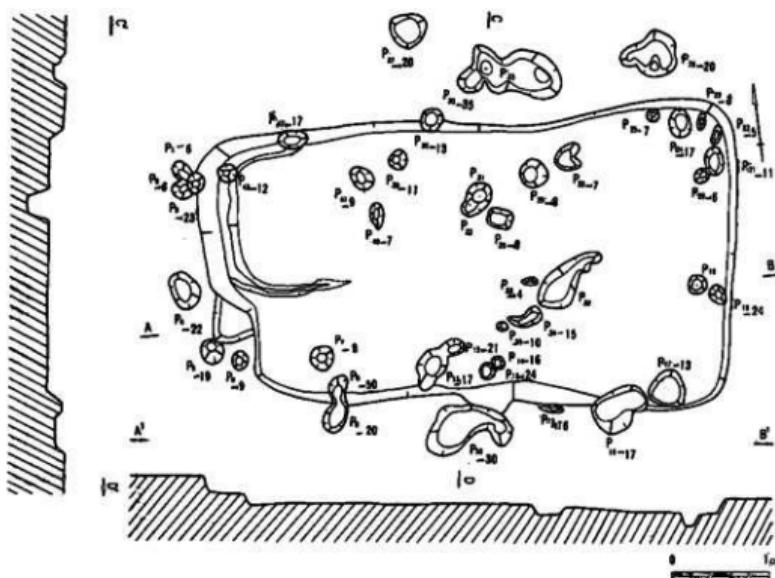
第7図 第4号住居址実測図

第6号住居址（第10図、図版4）

本址は発掘地区のうちでは北側の位置に発見され、ローム層を掘り込み、南北4m60cm、東西4m55cmの不整円形プランの竪穴住居址である。プランにはところどころ角張り気味の箇所がみられた。壁高は10cm～20cm前後を計り、外傾や外寄り気味で、軟弱であり、壁面は大般平坦であった。床面はかたくたたかれており、凹凸が顕著であった。また、同面より10～20cm位浮いて拳大程から人頭大程の石が、住居址全体にわたって敷かれていた。これらの石は花崗岩や枯板岩が主体となっていた。

ピットは全部で41個所に発見されたが、そのうち主柱穴となりそうのは、深さが、かなりあるのが、該当すると思われる。本址の北東の一辺は第1号溝状通構によって切られている。覆土は黒色土が充満しており、そのなかに多量の焼土や木炭が含まれていた。遺物は鎌倉時代前期の古瀬戸灰釉平茶碗、古瀬戸大形短頸壺、古瀬戸大形四耳壺、鎌倉後期の古瀬戸灰釉印花文瓶子、古瀬戸灰釉平茶碗、古瀬戸灰釉皿、中国の元時代の白磁片が出土している。その他としては鉄製の鎌の出土

がみられた。したがって本址は鎌倉後期（14世紀前半）の住居址と思われる。



第9図 第5号住居址実測図

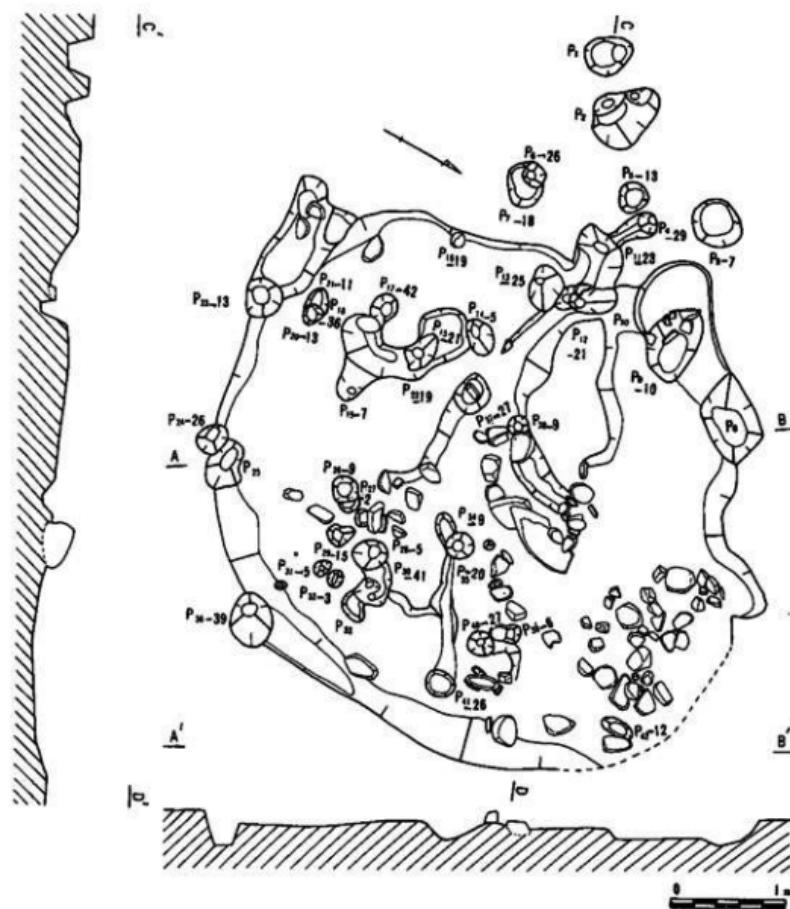
第7号住居址（第6図、図版3）

本址は東側で第2号住居址によって切られている。住居址の形態はローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。その規模は南北3m30cm、東西は不明である。プランは推定するに円形状のものとなると思われる。

壁高は数cmとなっており、大般外傾気味で、壁面の凹凸は顕著で、軟弱となっていた。床面は大般、水平で、軟弱気味であった。ピットは各所に検出されたが、主柱穴となりそうのはP2、P7の2個所であろう。他の柱穴は不明である。覆土は黒色土が充満しており、そのなかに、焼土と木炭の検出がみられた。

遺物の出土は何もなかった。ただ、本址は第2号住居址よりも古いことははっきりしている。

（飯塚政美）



第10図 第6号住居址実測図

第2節 竪 穴

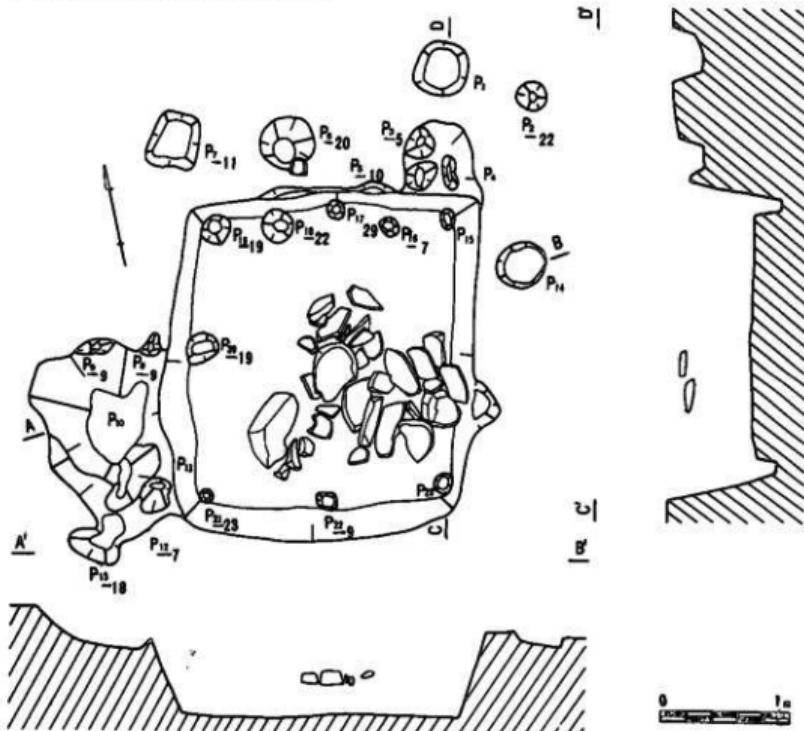
今回の発掘で検出された竪穴は全部で22カ所あり、一種のグループ的に存在した位置が、明瞭であった。それは第1号竪穴と第22号竪穴、第2号竪穴から第13号竪穴、第14号竪穴から第20号竪穴、第21号竪穴の四つのグループに分類できよう。

第1号竪穴（第11図、図版6）

本遺構は南北2m75cm、東西2m35cmの方形状の竪穴である。壁は、わずかに外傾気味で、ローム層を50cm前後掘り込んで構築してある。壁面はかたいタタキになっており、わずかに凹凸がみられた。床面は大般水平であった。壁面の上部はソフトローム層、下部及び床面はハードローム層となっていた。覆土は黒色土が充満しており、そのなかに炭化物や焼土の含みがみられた。

柱穴は床面にそって、規則正しく配列しており、そのなかにはP₂₂の角張ったものもみられた。用するに墨根がかけてあったことを察知できよう。床面より25cm位浮いて人頭大程のホルンヘルスや花崗岩が大般一定レベルに敷いてあり、その集中地区は南東の隅に該当していた。南西の隅に一段高くなった中段が見られた。これはおそらく出入口に使用したものと思われる。

遺物は古錢の出土があり、出土地点は北東の一隅に集中しており、主たるものは開元通宝、祥符通宝、天禧通宝、天聖通宝、熙寧元宝、元豐通宝、聖宋元宝、洪武通宝、永樂通宝である。陶磁器片としては室町中期の古瀬戸天目茶碗、古瀬戸灰釉香炉、古瀬戸灰釉三足盤が出土した。したがって本遺構は室町中期のものと思われる。

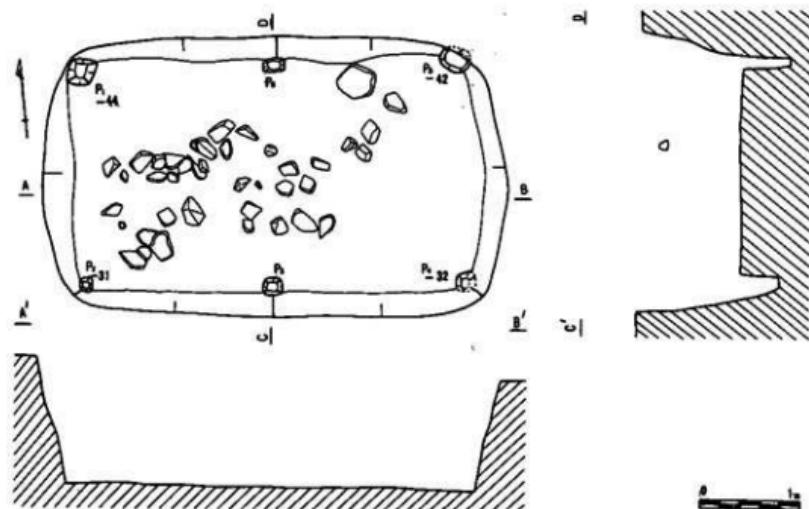


第11図 第1号竪穴実測図

第2号竪穴（第12図、図版6）

発掘地区の北側に検出された竪穴であり、南北2m75cm、東西4m65cmの長方形を呈する。ローム層を1m10cm前後掘り込んで造られている。壁面はやや外傾気味で、中腹部が若干ふくらみをもつ。さらに壁面に若干の凹凸が認められた。壁面の上部はソフトローム層、下部はハードローム層よりなり立っていた。床面はハードローム層面につくられ、大體水平となっていた。床面から75cm前後浮いて小兒頭大程の石が無数にみられ、それらの石は焼けて赤く変色したものや、炭化物の附着したものもみられた。これらの石は大部分、ホルンヘルスや花崗岩であった。本竪穴内の土層は全部搅乱土によって埋っており、人為的に埋められた傾向が強いものと思われる。

柱穴は6本等間隔に配列しており、これらは角柱状になっていた。東西の柱間は約1間間隔であった。遺物は古錢が出土した。古錢は元豊通宝、永泰通宝、陶磁器とし鎌倉後期の古瀬戸灰釉合子、古瀬戸灰釉平茶碗、古瀬戸灰釉四耳壺、古瀬戸灰釉小皿、内耳鍋、古瀬戸鉄釉瓶子、室町中期としては、常滑大壺、古瀬戸灰釉四耳壺、古瀬戸灰釉草式仏花瓶、古瀬戸灰釉平茶碗、古瀬戸灰釉皿片が出土している。したがって妥当的に考えて、室町中期の遺構と思われる。さらに漆の出土があった。



第12図 第2号竪穴実測図

第3号竪穴（第13図、図版7）

本遺構は南側で第4号竪穴に切られている。ローム層を10cm前後掘り込んで造ってあり、その平面プランは方形と思われる。規模は南北（切り合いのため不明）東西1m65cm程を測る。壁は外傾で、低いために軟弱であった。床面は大體水平で、軟弱となっていた。ピットは本遺構の東側一帯に集中しており、構造上問題を投げかけてくれると思われる。遺物は何も出土しなかった。覆土中より、少量の炭化物と焼土の検出をみた。本遺構は中世のものと思われ、第4号竪穴より古い。

第4号竪穴（第13図、図版7）

北側で第3号竪穴を切っている位置に検出された竪穴である。平面プランは南側に若干ふくらみを持つが、全般的には方形状を成している。規模は南北不明、東西は1m 15cmであって、ローム層を20cm前後で掘り込んで構築してある。壁面は外傾気味で、軟弱である。

床面は大般水平で、軟弱である。柱穴はP₁、P₂、P₃、P₄、P₅等のものである。遺物は鎌倉後期の古漬戸灰釉片口壁の破片が出土、本遺構は鎌倉後期と思われる。

第5号竪穴（第14図、図版7）

東側で第6号竪穴に切られている。平面プランは東側で切られてしまつてはいるが、全般的には方形と思われる。規模は南北1m 37cm、東西は切り合いのため不明を測り、ローム層を10数cm前後掘り込んで構築してある。壁の状態は外傾気味で、軟弱である。床面は大般水平で、軟弱となっている。ピットは5カ所発見されたが、配列状態は漠然としている。

遺物は何も出土しなかった。覆土中に少量の炭化物と焼土の検出をみた。切り合い関係からして第6号竪穴より古い。

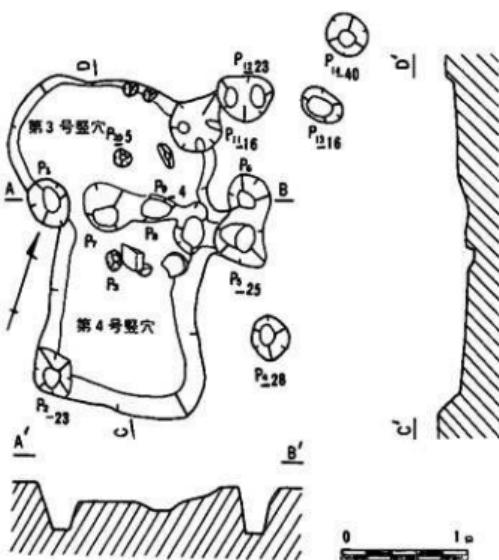
第6号竪穴（第14図、図版7）

西側で第5号竪穴を、東側で第7号竪穴を切っている。平面プランは、東、西壁は切られてしまつてはいるが、残った部分から推測して方形状を呈すると思われる。規模は南北2m、東西は不明、ローム層を10cm前後掘り込んで構築してある。壁の状態は外傾気味で、軟弱を成している。床面は大般水平で、軟弱気味である。ピットは数本発見され、床面を取り囲くより配列してある。

遺物は、中国の宋青磁が出土している。切り合い関係からして第5号竪穴、第7号竪穴よりも新しい。第7号竪穴の出土遺物より室町後期の遺構と思われる。

第7号竪穴（第14図、図版7）

西側で第6号竪穴に、南側で第8号竪穴に切られている。平面プランは東西、南北ともに切り合い関係のために明確ではないが、想像するに方形状を呈すると思われる。したがって規模も不



第13図 第3・4号竪穴実測図

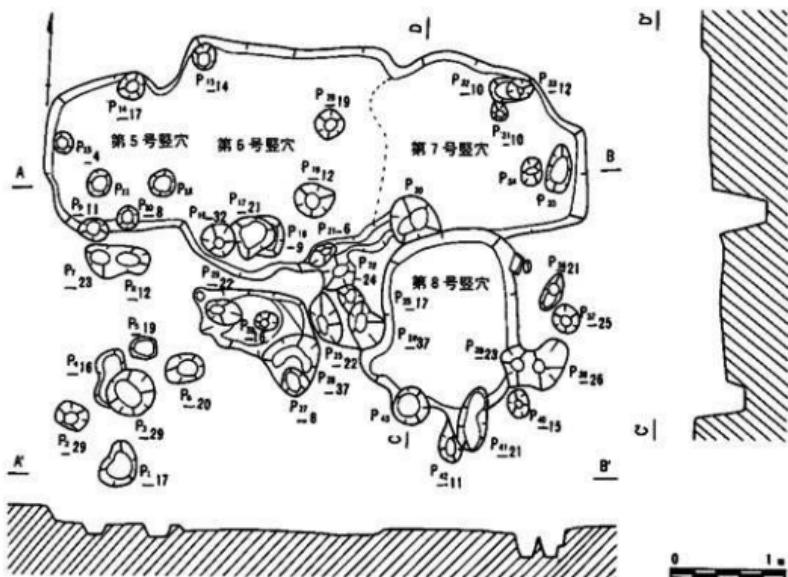
明である。ローム層を10数cm掘り込んで構築し、覆土は黒色土であった。北壁は外傾気味、東壁は垂直を成し、軟弱であった。床面は大般水平で、軟弱となっていた。ピットは4カ所発見され、東壁附近に集中している。遺物は室町後期の古瀬戸灰釉皿の出土がみられた。したがって、本遺構は室町後期と思われる。

第8号竪穴（第14図、図版7）

北側で第7号竪穴を切って構築してある。平面プランは隅丸方形状に近く、規模は南北1m55cm東西1m15cm程を測定できる。構築状態はローム層を15~20cm程掘り込んで、造ってあり、そのなかに黒色土が充満していた。壁は南、西、東は垂直に近く、北側は内湾気味で、全般的に軟弱であった。床面は大般水平で、軟弱気味であった。

ピットは本竪穴の東から南側の壁に接して、あるいは壁の近くに8カ所発見され、その大きさは大小さまざまであった。西側に点在するピットは切り合い間連が複雑なために本竪穴に関係があるかどうかは疑問が残るところである。

遺物は何も出土しなかつたが、覆土中より少量の木炭と焼土の検出をみた。時代としては第7号竪穴を切っている事実より第7号竪穴より新しい。時代的には室町時代後期あたりと思われる。



第14図 第5・6・7・8号竪穴実測図

第9号竪穴 (第15図、図版7)

本竪穴は切り合い関係がなく、単独に検出された。規模は南北1m 2cm、東西1m 40cm程を測り、平面プランは隅丸方形を呈する。掘り込み面はローム層で、深さは10cm前後と極めて浅い。壁の状態は外傾気味で、軟弱である。床面は中央部が若干凹むが、他は平坦であり、軟弱気味となっている。ピットは15個所検出されたが、主柱穴となりそうなのは、壁近くのものと思われる。遺物は何も出土しなかった。ただ覆土中より少量の炭化物と焼土の検出をみた。中世に属すると思われる。

第10号竪穴 (第16図、図版7)

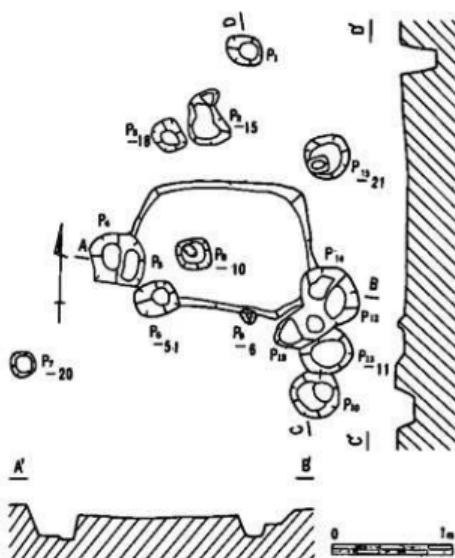
本竪穴は第9号竪穴の北側に、また切り合い関係がなく単独に検出された。規模は南北1m 37cm、東西1m 67cm程を測り、平面プランは隅丸方形を呈する。ローム層面を掘り込み、深さは30cm前後と普通程度であった。

壁の状態は外傾気味で、軟弱であった。床面は大般水平で、軟弱である。ピットは東壁に2カ所、その近くに1カ所確認された。

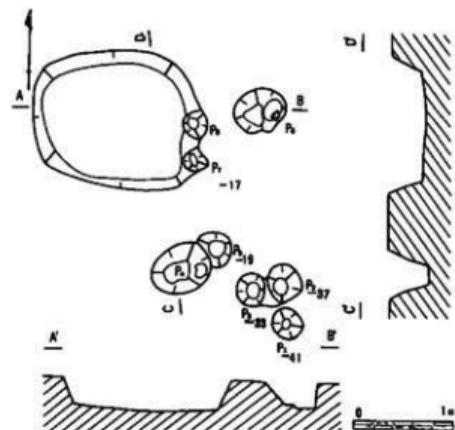
遺物は何も出土しなかった。ただ、覆土中より少量の炭化物と焼土の検出をみた。中世に位置すると思われる。

第11号竪穴 (第17図、図版8)

本竪穴は第10号竪穴と第6号住居址に、はさまれた位置に、また、単独な形で検出された。規模は北東の一角に壁は残存していないが、推定するに南北1m 75cm、東西1m 85cm程を測定で

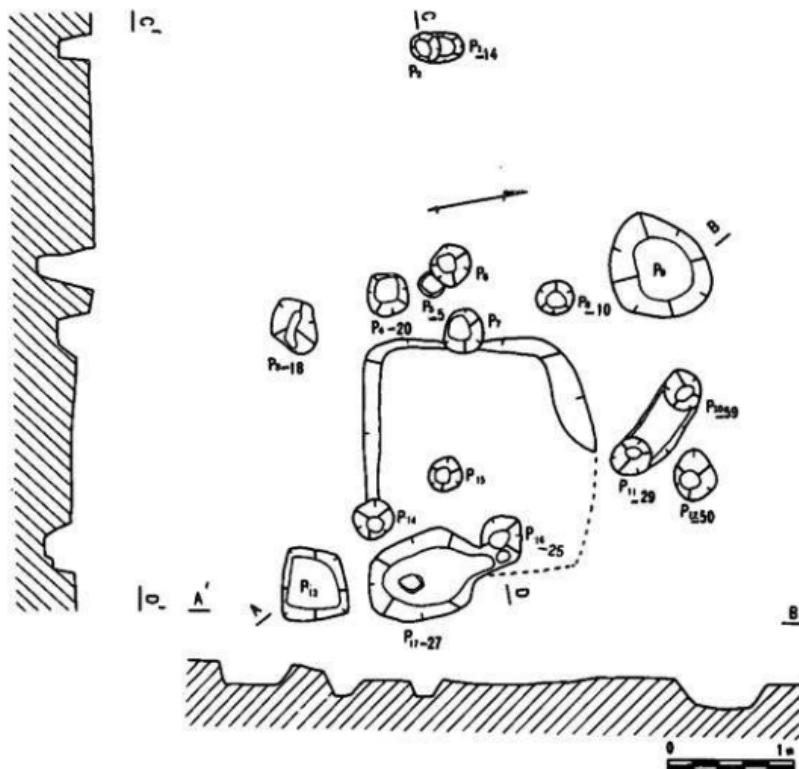


第15図 第9号竪穴実測図



第16図 第10号竪穴実測図

きる。平面プランは隅丸方形を呈し、ローム層面を数cm程、掘り込んで構築してある。壁の状態は外傾気味で、軟弱であった。床面は大般水平で軟弱であった。ピットは10数カ所検出されたが、柱穴として考えられるのは、壁の近くに存在するものと思われる。遺物は何も出土しなかったが、覆土中より少量の炭化物と焼土の検出をみた。中世に属すると思われる。



第17図 第11号竪穴実測図

第12号竪穴（第18図、図版8）

本遺構は北側で第13号竪穴と接した位置に発見され、ローム層を25cm前後掘り込んで構築された竪穴である。平面プランは隅丸方形を成し、その規模は南北2m65cm、東西1m98cm程を測定できる。壁の状態は全般的に外傾気味で、軟弱であった。床面はわずかに凹凸が認められ、かたくたたかれていた。また、同面の南東の隅に点在する石はホルンヘルスや花崗岩であった。ピットは4カ所検出されたが、配列という程ではなかった。中世に属すると思われる。

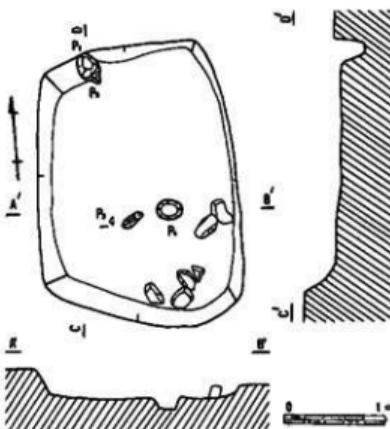
遺物は、中国元時代の白磁碗、及び室町中期の古瀬戸天目茶碗の出土がみられた。よって、本竪穴は室町中期と思われる。

第13号竪穴（第19図、図版8）

本遺構は南側で第12号竪穴と接した位置に発見され、ローム層を30cm前後掘り込んで構築された竪穴である。平面プランは円形状を呈し、その規模は南北1m98cm、東西2m63cm程を測定できる。

壁の状態は内寄気味で、軟弱、床面は大般水平で硬い。ピットは4カ所発見され、配列は三角形状を成している。床面上に散在する石は花崗岩やホルンヘルスであった。

遺物は中国元時代の白磁碗、宋時代の青磁碗、室町中期の古瀬戸灰釉こね鉢、室町後期の常滑甕が出土、時代は室町後期と思われる。



第18図 第12号竪穴実測図

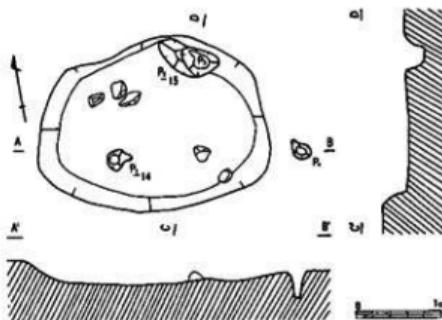
第14号竪穴（第20図、図版9）

本遺構は北側の段丘近くの位置に発見され、ローム層を20cm前後掘り込んで構築された竪穴である。平面プランは隅丸方形状を呈し、その規模は南北2m78cm、東西2m43cm程を測定できる。東壁の中央部附近で東側へ方形状にとび出した個所がみられた。これは何か入口的な要素と思われる。壁は全般的に外傾気味で、軟弱である。床面は大般水平で、硬いタタキとなっている。ピットは壁の四隅に集中して配列してあった。

遺物は室町後期の古瀬戸灰釉平茶碗、古瀬戸天目茶碗、内耳土器片が出土した。本竪穴は室町後期と思われる。

第15号竪穴（第21図、図版9）

本遺構は北側で第16号竪穴を切った状態で発見され、ローム層を10数cm前後掘り込んで構築された竪穴である。平面プランは隅丸方形状を成し、その規模は南北1m38cm、東西1m20cm程を測定できる。壁は外傾及び外寄気味で軟弱、床面は大般水平、軟弱であった。ピットの存在はなかった。遺物は何も出土しなかったが、覆土中より少



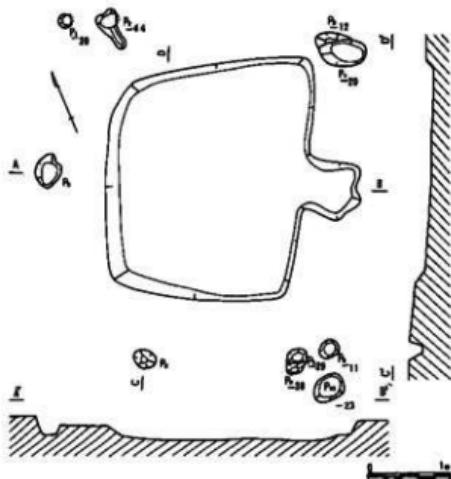
第19図 第13号竪穴実測図

量の炭化物と焼土の検出をみた。中世に位置すると思われる。

第16号竪穴（第21図、図版9）

本造構は南側で第15号竪穴で切られた状態で発見され、ローム層を10cm前後掘り込んで構築された竪穴である。平面プランは隅丸方形状を呈し、その規模は南北1m50cm、東西1m60cm程度を測定できる。壁は外傾気味で軟弱であった。床面は大般水平、軟弱であった。ピットは存在しなかった。

遺物は何も出土しなかったが、ただ覆土中より少量の炭化物と焼土の検出をみた。中世に属すると思われる。



第20図 第14号竪穴実測図

第17号竪穴（第22図、図版10）

本造構は発掘地区の東側、第4号柱

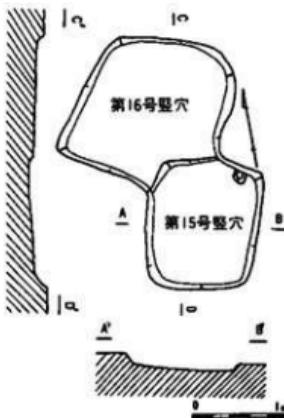
穴群にはさまれた状況で発見され、ローム層を30cm前後掘り込んで構築された竪穴である。平面プランは隅丸長方形状を成し、その規模は南北2m、東西1m10cm程度を測りえる。壁は外傾気味で、軟弱である。床面は凹凸があり、中央部が若干低くなり、軟弱気味。竪穴近くに存在するピットは全て別造構（第4号柱穴群）に含まれるものであろう。したがって本竪穴にはピットの存在はないと考えてよかろう。

遺物は何も出土しなかったが、ただ、覆土中より少量の炭化物と焼土の検出をみた。中世に属すると思われる。

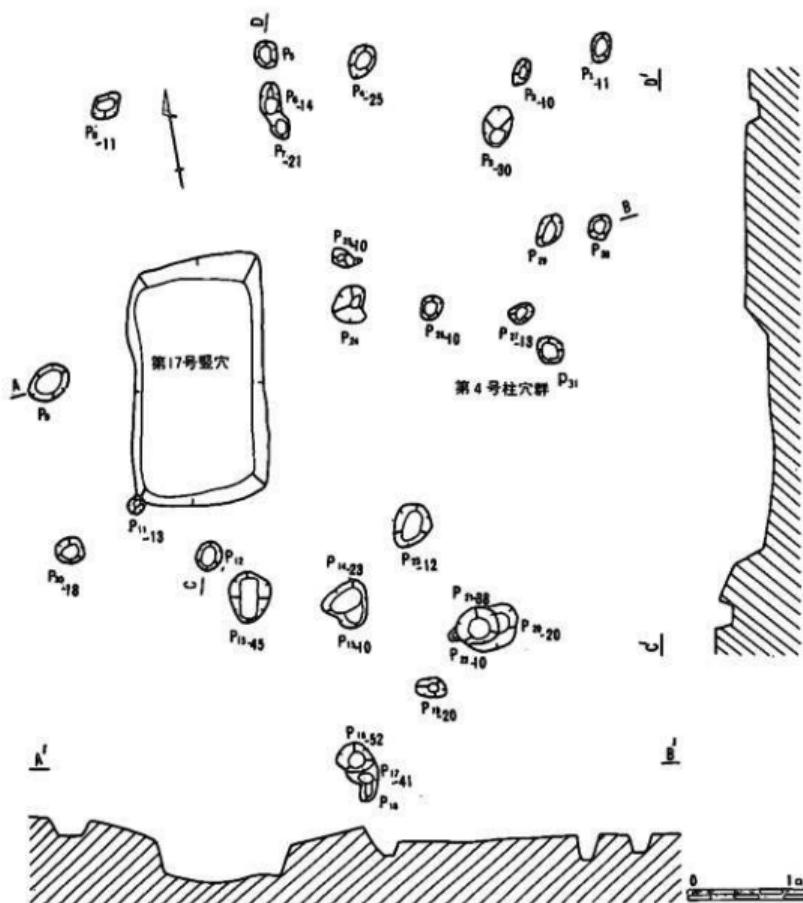
第18号竪穴（第23図、図版10）

本竪穴は発掘地区の大般中央部に発見され、ローム層を10cm前後掘り込んで構築してある。平面プランは隅丸方形を呈し、その規模は南北98cm、東西1m90cm程度を測定でき得る。壁は外傾及び外弯気味で、軟弱になっている。床面は西から東へわずかな傾斜を成し、軟弱気味であった。

ピットは東側と、西側に2ヵ所だけ検出されただけであった。遺物は何も出土しなかったが、ただ、覆土中より少量の炭化物と焼土の検出をみた。遺物の出土がなかったために、確定なる時代決定は不規則ではあるが、中世に属することはまちがいのない考えであろう。



第21図 第15・16号竪穴実測図



第22図 第17号竪穴、第4号柱穴群実測図

第19号竪穴 (第24図、図版10)

本遺構は発掘地区の中心部附近に発見され、ローム層を50cm前後掘り込んで構築してある。平面プランは楕円形状を呈し、その規模は南北2m75cm、東西82cm程を測定できる。壁の状態は西、北は外傾気味、南側は外弯気味であり、全壁面は凹凸が顕著で、軟弱であった。床面は軟弱で、凹凸は極めて顕著であった。ピットの存在は2ヵ所あったが、配列状態は不明であった。

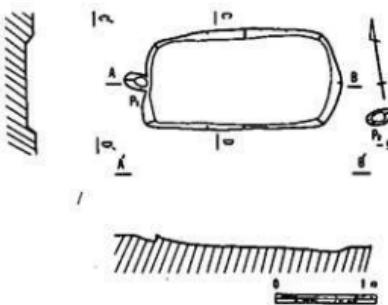
遺物は何も出土しなかったが、覆土中より少量の炭化物と焼土の検出をみた。この竪穴は遺物の出土がないために、細かな時代判別はできないが、大般的に考えてみると、中世に属していることは確実と思われる。

第20号竪穴 (第25図、図版10)

本遺構は発掘地区の中心部附近、第19号竪穴の西側の位置に発見され、表土面より50cm位下ったローム層面を約15cm程掘り込んで構築してある。平面プランは東西に長い隅丸方形状を呈し、その規模は南北1m 39cm、東西3m 5cmを測る。ピットの存在はなかった。

壁は西側はなだらかな傾斜、他は外傾気味を呈しており、軟弱であった。床面は部分的に小さな起伏が認められ、軟弱であった。

遺物は何も出土しなかったが、覆土中より少量の炭化物と焼土の検出をみた。時代は中世と思われる。



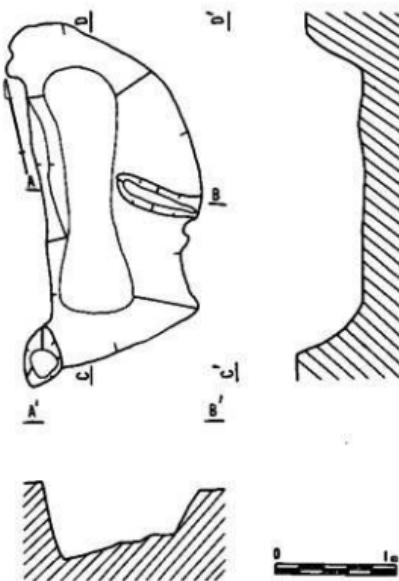
第23図 第18号竪穴実測図

第21号竪穴 (第26図、図版13)

本遺構は発掘地区の東側に、第4号住居址の南側、第3号柱穴群のなかのそれぞれに面した位置に発見され、ローム層面を約30cm程掘り込んで構築してある竪穴であった。平面プランは隅丸方形状を成しており、規模は南北1m 32cm、東西1m 8cmを測定できる。

壁は全般的に外傾が、やや強く、軟弱であった。壁高はならだかであり、整然としていた。床面はわずかな傾斜をもって中央部がくぼんでいた。ピットの存在はなかった。

遺物は何も出土しなかったが、覆土中より少量の炭化物と焼土の検出をみた。時代は中世と思われる。



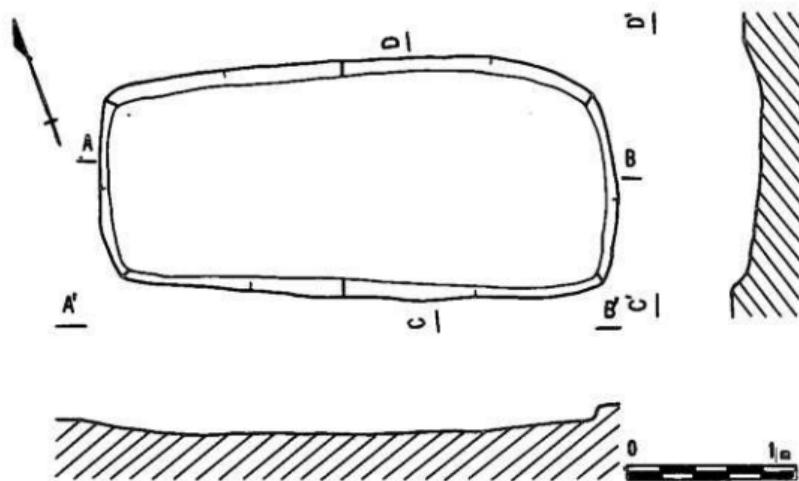
第24図 第19号竪穴実測図

第22号竪穴 (第27図、図版6)

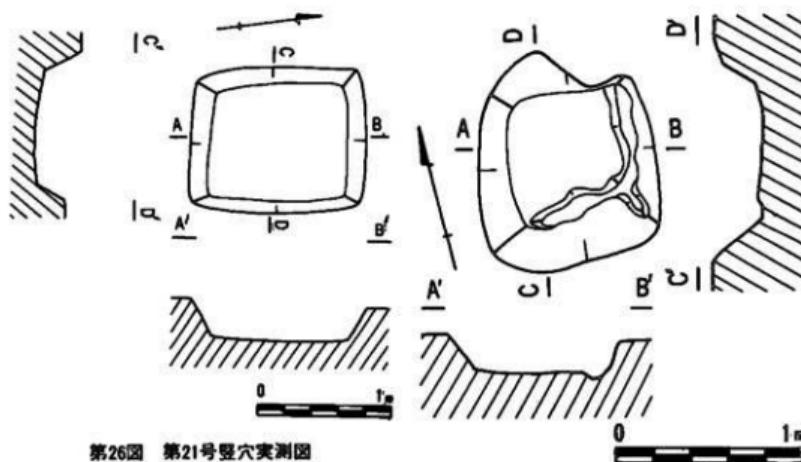
本竪穴は第1号竪穴の東側に位置し、ローム層面を20cm程掘り込んで構築してある。規模は南北1m 15cm、東西96cm程で、平面プランは隅丸方形を呈している。壁面は外傾や外弯気味で、軟弱、床面は一部的に凹凸が認められ、軟弱、ピットの存在はなかった。

遺物は何も出土しなかったが、覆土中より少量の炭化物と焼土の検出をみた。時代は中世と思われる。

(飯塚政美)



第25図 第20号竪穴実測図



第26図 第21号竪穴実測図

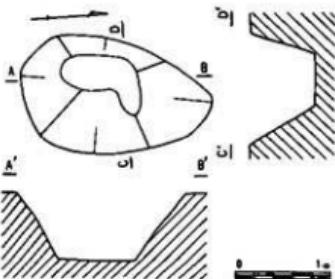
第27図 第22号竪穴実測図

第3節 土 塚

第1号土塚 (第28図、図版11)

第3号柱穴群のなかで、北西の位置に発見された土塚であって、平面プランは橢円形を呈している。規模は南北に長軸を持ち、 $2\text{m} \times 1\text{m} 20\text{cm}$ 、深さは71cmを計る。掘り込み面はローム層で、覆土は黒色土が充満していた。壁面の状態は北壁にはわずかな凹凸がみられ、他は外傾気味であり、全般的にかたい。

床面は大般水平で、かたくたたかれていた。遺物は何も出土しなかったが、覆土中より少量の炭化物の検出をみた。時代は縄文時代と思われる。



第2号土塚 (第29図、図版11)

本造構は第2号柱穴群の東端、第1号窓址の南側の位置に発見された土塚である。表土面より40cm程下ったソフトローム層面を掘り込んで、構築してあり、その平面プランは壁面に各所にわたり張り出し部分がみられるが、全般的にはひょうたん形を成している。規模は東側の部分が南北2m、東西1m 30cm程、西側の部分が東西1m 25cm、南北94cm程を測る。壁の掘り込みは西側は10cm前後、東側は25cm前後を測定でき、その状態は外傾気味で、凹凸があったり、段も認められた。

床面は大般水平で、軟弱であった。遺物は何も出土しなかったが、覆土中より少量の炭化物の検出をみた。時代は縄文時代と思われる。

第3号土塚 (第30図、図版12)

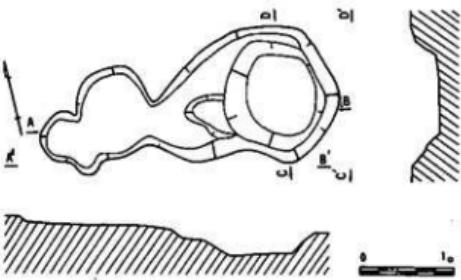
本造構は第2号柱穴群の東端、北側で第2号土塚と近隣した位置に発見された土塚である。ローム表面を25cm程掘り込んで構築してある。

その平面形プランは北側がややつぼまるが、全般的に橢円形状を呈している。

壁は外傾し、凹凸は平坦で軟弱であった。床面は大般水平で、軟弱であった。規模は南北1m 52cm、東西1m 5cm。

土塚を埋めていた土層は黒色土で、そのなかにわずかに炭化物の検出をみたが、焼土は発見されなかった。

遺物は、縄文中期中葉の土器片が出土し、時代は縄文中期中葉であろう。



第29図 第2号土塚実測図

第4号土塙（第31図、図版12）

本遺構は第2号柱穴群のなかに発見された土塙である。表土面より40cm位下ったローム層面を掘り込んで構築してあり、その深さは20cm前後である。平面プランは北東の隅はこぶ状になつてはいるが、全般的には円形状を成している。また北壁の一角にピット状の落ち込みがみられたが、何を意味しているかは不明である。規模は南北1m15cm、東西1m10cm程であった。

壁はやや外傾気味で、軟弱であり、さらに壁面は平坦であった。床面はやや凹凸気味で、軟弱であった。遺物は何も出土しなかつた。時代は縄文時代と思われる。

第5号土塙（第32図、図版12）

本遺構は第2号柱穴群のなかに発見された土塙であり、さらに東側で第6号土塙に切られている。表土面より40cm位下ったローム層面を掘り込んで構築してあり、その深さは15~20cm前後である。平面プランは部分的に角張り気味のところもみえるが、全般的には円形状と考えてよからう。

壁は西壁では外傾が強く、軟弱気味であって、壁面の凹凸は極めて少なかつた。床面は大般水平で軟弱気味であった。

規模は南北90cm、東西は不明であった。遺物は何も出土しなかつた。覆土中より少量の炭化物の検出をみた。縄文時代の土塙と思われる。

第6号土塙（第32図、図版12）

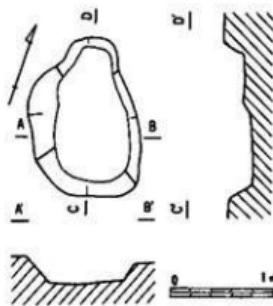
本遺構は第2号柱穴群のなかに発見され、さらに西側で第5号土塙を切っている状況で検出された土塙である。表土面より40cm位下ったローム層面を掘り込んで構築してあり、その深さは10cm前後と割合に浅かつた。平面形プランはところどころで角張った部分も認められたが、全般的には長円形状と考えられる。その規模は南北2m30cm、東西は切り合いのため不明ではあるが、推定するに1m50cm前後を測定できると思われる。

壁は全般的に外傾気味で、軟弱である。壁面は割合にフラットになっており、割合にかたかった。

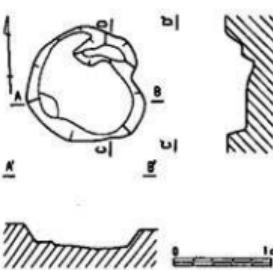
床面は大般水平で、軟弱気味であった。ピットが2個所発見され、そのうちの1つは南壁の近くに、もう1つは北西の隅に密接して、それぞれ検出されたが、何か意識的なものか否かは判然としない。ただ、現在考えられるのは第2号柱穴群のピットとの関係ではないか。

遺物は何も出土しなかつた。覆土中より少量の炭化物の出土をみた。本土塙は時代を考えてみると、縄文時代のものであろう。

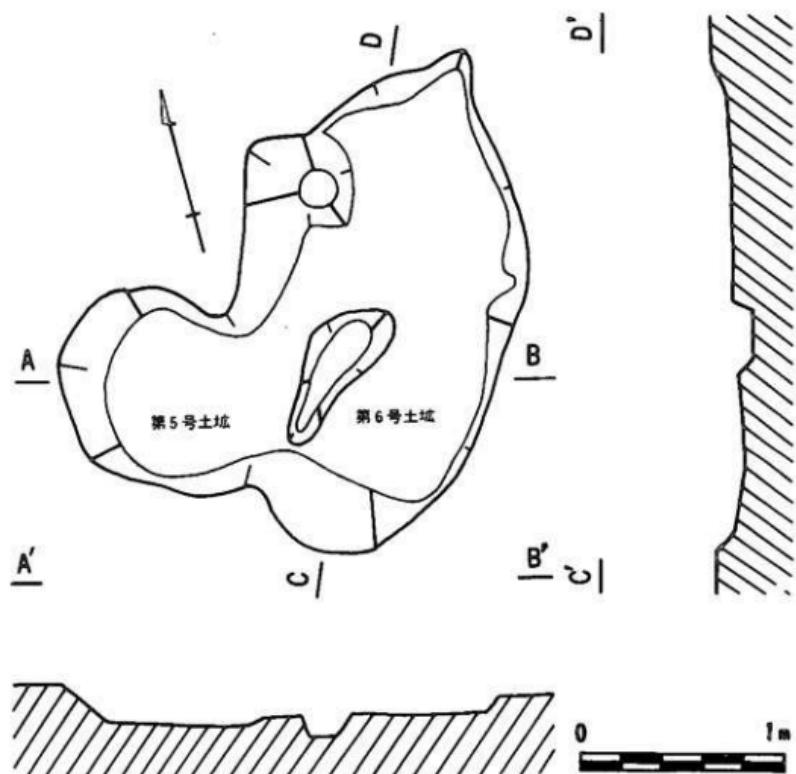
（飯塚政美）



第30図 第3号土塙実測図



第31図 第4号土塙実測図



第32図 第5・6号土塙実測図

第4節 柱穴群

第1号柱穴群（第33図、図版13）

調査地区の南西より検出された。ピットは60に近い数に達している。ピットは15cm～50cm位の大きさに含まれていたが、厳密には大きさはまちまちであった。またP₁, P₆のように極めて大きくて1mに近いものもあった。形状は円形や橢円形が大部分を占め、P₁, P₃のP₁₂のように角状のものもみられた。ピットの掘り込み面はローム層で、その深さは、10cm前後から30cm前後と思われる。

掘り込み面及びピットの周囲には硬い部分は認められなかった。ピットは大きくわけて二つのグループに分類できる。1つはP₁～P₁₃もう1つはP₁₅～P₅₆であった。ピット間及び二つのグループには規則性を認められなかった。ローム層上面に炭化物と焼土の検出をみた。

遺物は何も出土しなかったが、中世の遺構と思われる。

第2号柱穴群（第34図、図版13）

調査地区の中央よりやや南側に検出され、第5号住居址、第1号竪穴、第23号竪穴、第1～6号土塙に隣接する。掘り込み面はローム層上面で、ピットのなかに黒褐色土がつまっていた。その広がる範囲は南北8m、東西15m程度で、そのなかに50個のピットが確認できた。形状は円形や楕円形で占められ、P₂₁のように壁沿いの石を規則的に配列してあるような特殊な例もみられた。

大きさは小さいので20cm径、大きいので1m径と大小さまざまであった。柱穴群、あるいは、その周囲には硬い部分は認められなかったが、炭化物や焼土の検出があった。柱穴で最も問題にされる配列は不規則であった。

遺物は何も出土しなかったが、中世の遺構と思われる。

第3号柱穴群（第35図、図版14）

調査地区的南東よりに検出され、第1号土塙、第4号住居址、第1号土塙に隣接する。南北10m東西9mの範囲に40個のピットが確認された。掘り込み面はローム層で、ピットのなかに黒褐色土がつまっていた。ピットの大きさは30cmから50cm前後の方形状で、また、深さは浅いのは数cm、深いのは35cm前後あった。この柱穴群で最も重要視する配列について述べてみたいと思う。P₁とP₁₁の間のピット、P₆とP₁の間のピット、P₁₇とP₁₈の間のピット、P₁₇からP₂₀の間P₁₈とP₃₂の間のピットはそれぞれ現在はなかったが、以前はあったものと思われる。南北の配列ではP₁～P₆、P₇～P₁₀、P₁₁～P₁₆、P₁₇～P₂₆、P₁₉～P₃₀、P₁₈～P₃₄は等間隔に、しかも直線状になっている。これらのピットとピットの間は約1間をなしている。東西の配列ではP₁～P₁₈、P₂～P₁₉、P₃～P₂₂、P₄～P₃₂、P₅～P₃₃、P₆～P₃₄は等間隔に、しかも直線状になっている。これらのピットとピットの間は4尺5寸をなしている。以上述べてきたことをみると、本遺構は南北5間、東西22尺5寸の建造物があったことが推測できる。

遺物は何も出土しなかったが、中世の遺構と思われる。

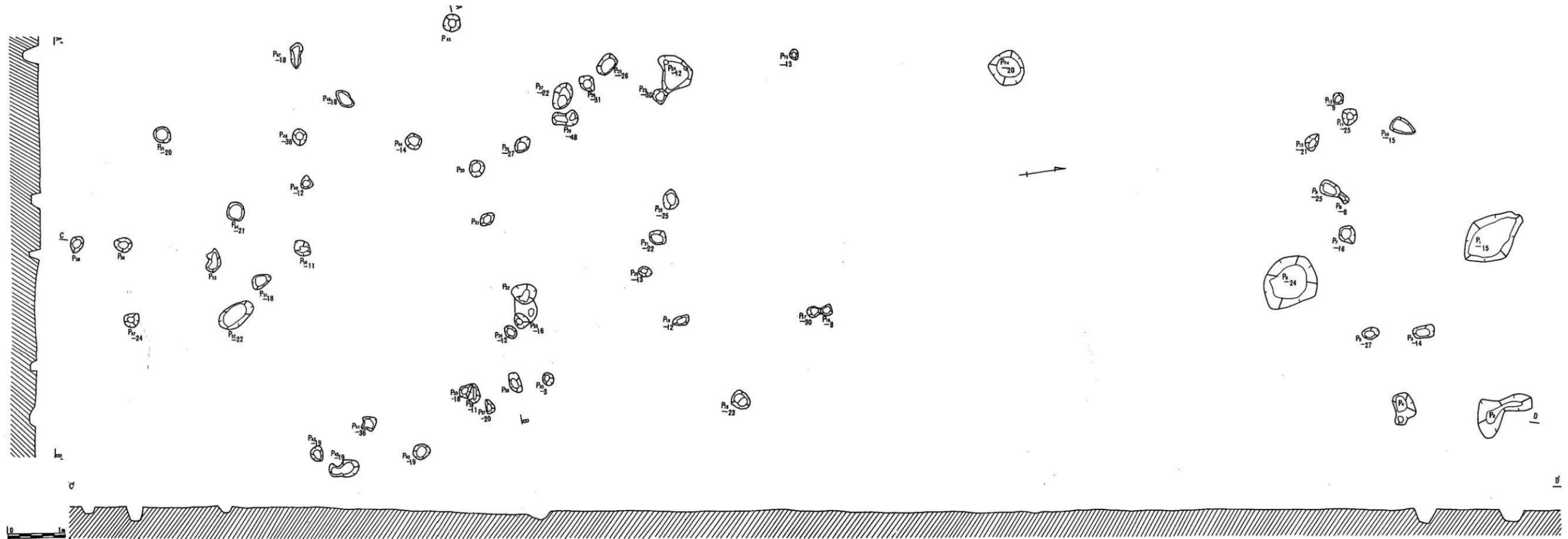
第4号柱穴群（第22図、図版10）

調査地区的北東よりに検出され、第17号竪穴と隣接する。南北6m、東西5mの範囲に30個のピットが確認された。掘り込み面はローム層で、ピットのなかには黒褐色土がつまっていた。形状は円形や楕円形のもので占められている。大きさは小さいので20cm前後、大きいので40cm前後と多種多様であり、また深さも10cmから30cm位の範囲内であった。

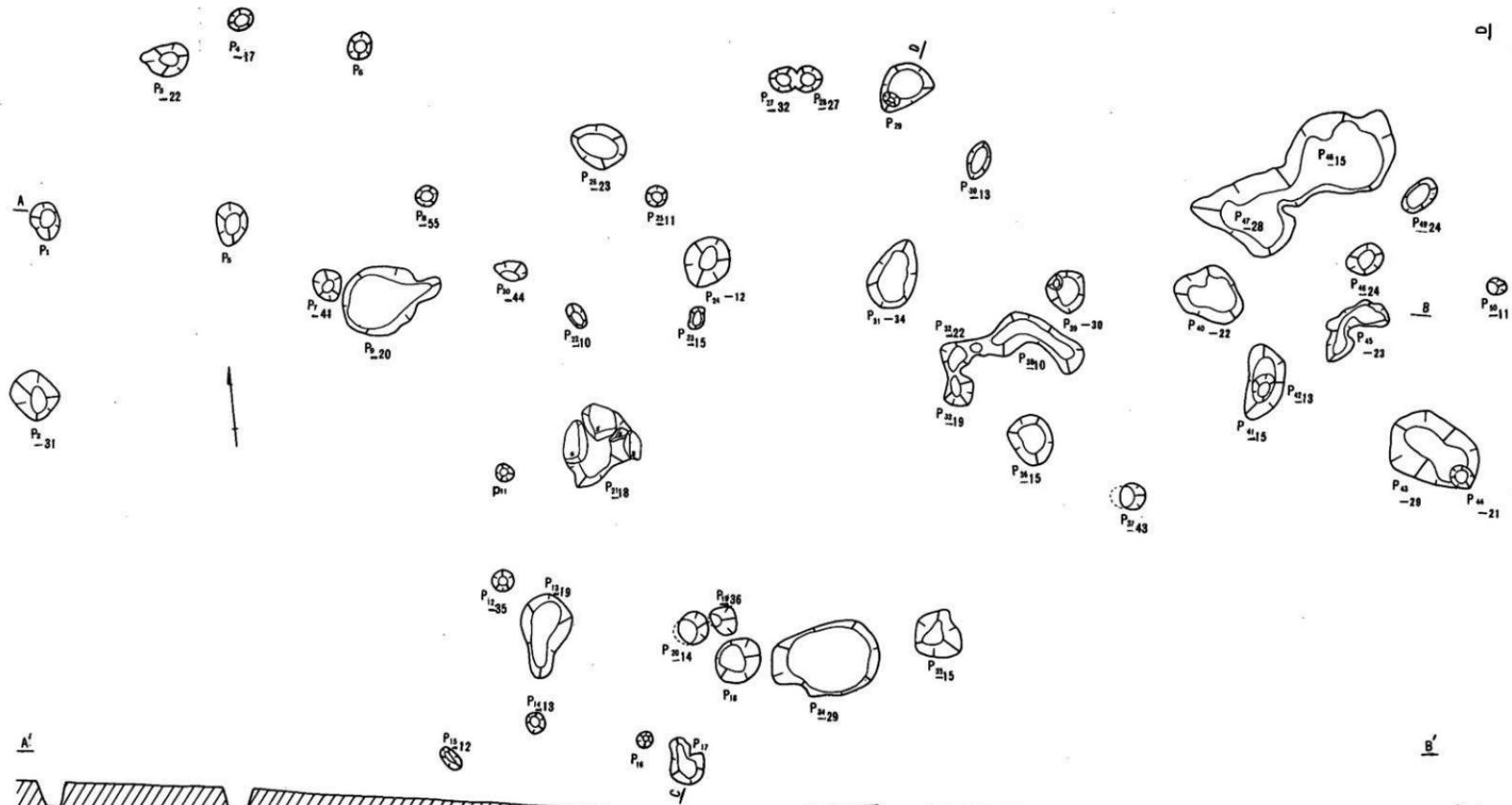
配列状態は不規則であって、その実態は把握できなかった。だが、ピットの点在する場所、及びそのあつまり具合からして、二つに分類できると思われる。その一つはP₁～P₈、P₂₄～P₃₁のグループもう一つはP₉～P₂₃のグループであろう。一つ、一つのグループは同時代のものか、否かは、遺物の出土がないために不明である。さらに、本遺構の時代も細分できない。ただ、中世と考えるだけにとどめておくに過ぎない。

ピットの周辺及びピット内は軟弱であった。黒褐色土のなかに多量の焼土や炭化物の検出をみた。中世の遺構と思われる。

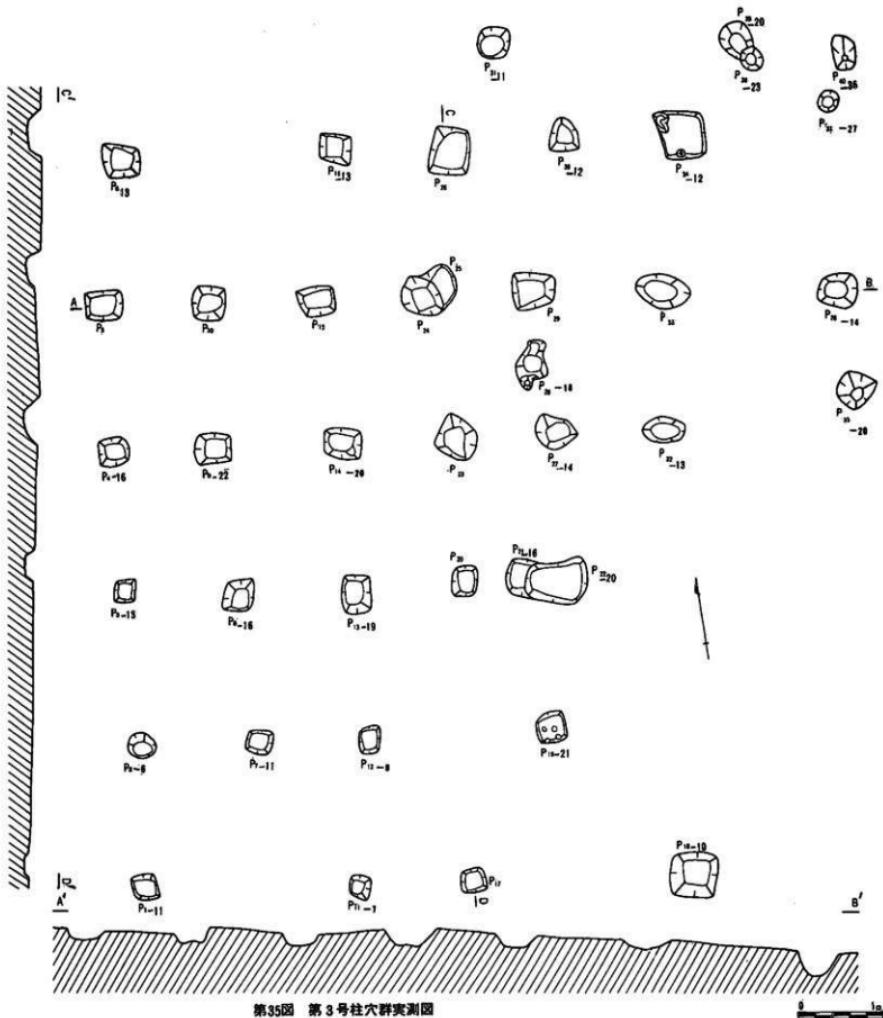
（飯塚政美）



第33図 第1号柱穴群実測図



第34図 第2号柱穴群実測図



第35图 第3号柱穴群实测图

第5節 客 址

第1号客址 (第36、図版14)

本造構は調査地区の東側に位置する。地形は西より東へ傾斜している。近隣の造構は東に第1号土塙、第4号柱穴群、西に第5号住居址、南に第2号土塙、第2号柱穴群がある。平面プランは上面で、南北1m29cm、東西1m23cmのほぼ円形で、ローム層内へ1m50cm程掘り込んだ竪穴状のものである。上部はソフトローム層、下部、あるいは底部はハードローム層になっていた。

上部は上開きで、中間部より袋状になっており、全般的には、いわゆるフラスコ状を形成していた。壁面はかたく、良好であり、大般平坦となっていた。

床面は平坦で、ハードローム層のために、カンカンする程、極めて良好であった。床面に密接して、あるいはわずかに浮いて10数個のホルンヘルムや花崗岩が配列してあった。特に、東壁の石は壁面によせかけてあった。覆土内より、多量の焼土や炭化物がみられた。また、この土層は搅乱土の様子が明瞭であり、一時期に人为的に埋めたものと思われる。本造構の用途は貯藏的な機能が強いものと思われる。

遺物は室町前期の古瀬戸灰釉おろし皿片が出土している。したがって室町前期の造構と思われる

第2号客址 (第37図、図版9)

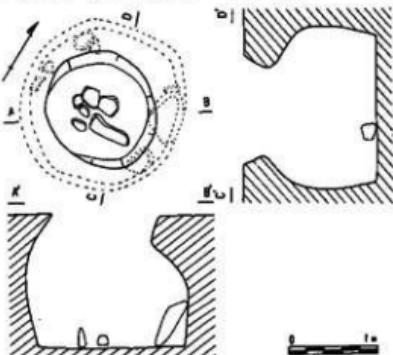
本造構は調査地区の北側に位置する。近隣の造構は南に第15号竪穴、第16号竪穴、西側に第14号竪穴がある。ローム層を掘り込んだ竪穴造構で、平面プランは円形状を呈する。規模は南北89cm、東西80cm程を測り、深さは44cmを成している。

断面は円筒形状を呈し、壁面は外傾気味、起伏が多く、軟弱となっている。床面は大般水平で、かたいタタキになっている。本造構の近くにはピットの存在はなかった。したがって、屋根のかかった可能性は全く無い、用途は貯藏穴的色彩が強いように思われる。

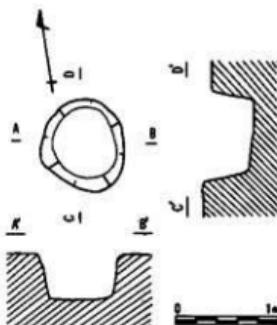
覆土は黒色土が混入しており、そのなかに混じって、少量の炭化物と焼土の検出をみた。

遺物の出土は何もなかったが、周辺状況、及び造構状況からして中世と思われる。

(飯塚政美)



第36図 第1号客址実測図



第37図 第2号客址実測図

第6節 井筋

第1号井筋（第38図、図版15～16）

本遺構は発掘地区の南側に発見され、その状態は西から東へと続き、最後は城郭の堀へと抜けていた。本遺構の名称、検討についてあるが、今回発掘されたこの遺構は一部の搅乱によって破壊された個所を除いて、西側の現在水田の引水をしている井筋へと続いているために井筋と言う遺構名をつけた。

今回発掘された井筋の状態についてできるだけ詳細に述べることにする。本遺構はローム層を掘り込んで、構築され、東西に細長い姿をなしている。東西の規模については前述した通りであろう。南北の規模（すなわち幅）はまちまちで狭いところで60cm、広いところで2m 60cm程度を測定できる。

壁の上部の状況はいたるところで蛇行状を成していた。この様子は構築時に水流を弱めるために意図的に工夫したものか、あるいは長い間に自然的にできたものかは不明であった。

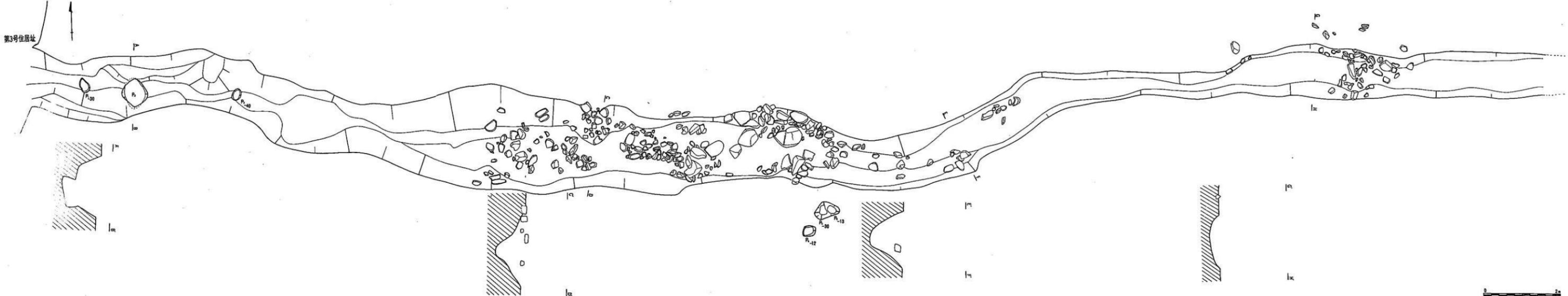
壁面の起伏は極めて変化に富み、外寄が著しい。壁面の状態を詳細にみてみると、西側のは中段があり、中央部は上部で緩傾斜、下部で外弯を呈している。東側では外寄が著しい。

床面も起伏が多く、状態は変化に富んでいた。レベルは水が流れるように西から東へ傾斜していた。壁面の上部はソフトローム層、下部及び底面はハードローム層であった。

井筋の中央部附近と東側の位置に、拳大程から一抱え程する石が無数に、しかも、なんの規則性もなく、無雑作に配列しており、ただレベルだけは大体一定を成していた。これらの石の集められていた位置は全般的にすると蛇行の大きな場所と思われる。したがって、その役目はおそらく底部が著しく深くならないこと、また、水流の速度を弱めるために考え出された姿の表われであろう。現在は石の下には多量の砂層の堆積がみられたが、おそらく構築時にはこの石は底部に密着して、あるいは、くいこむくらいにして配列してあったものであろう。それが、長時間にわたって山麓より押し出される土砂のために上に浮いてきたものと思われる。砂の堆積は自然現象が物語るよう凹地状のところに多く埋っていた。石質はこの西方の山麓線上によく露出しているホルンヘルスが大部分であった。この井筋の用途であるが、これは、現在と違つて水も澄んで、また清潔であったために飲料水の一部を成していたと思われる。

遺物は、陶磁器片としては、鎌倉時代前期の古瀬戸灰釉鉢、古瀬戸灰釉大形四耳壺、常滑焼大甕、古瀬戸灰釉こね鉢、古瀬戸灰釉片口鉢、室町前期の古瀬戸灰釉皿、古瀬戸灰釉大型こね鉢、古瀬戸灰釉盤、内耳鍋、室町中期の古瀬戸灰釉皿、古瀬戸灰釉平茶碗が出土している。したがって本井筋はどうして、このように時代的な差があると考えてみると、元来、川及び井というものは、こわれた物々を捨てる風習がある。いわばゴミ捨場のようなものであろう。現在でもちよいちよいみられる看板に「川にゴミを捨てないでください」という表示がある。この事実は前述した事柄を如実に実証してくれている。時代的に考えてみると、本遺構は鎌倉時代前期につくられ、その後、室町中期まで続いたものと考えられる。室町後期及び戦国時代以降のものが出土していないことは、室町中期の終り頃に前述したように砂の堆積が厚くなってきて、使用されなくなってきたものと考えられる。

（飯塚政美）



第38図 第1号井筋実測図

第7節 溝状造構

第1号溝状造構 (第39図、図版8)

本造構は発掘地区的最北端の位置に、また南側で第6号住居址を切るような状況で、西側には第12号竪穴、第13号竪穴が近隣していた。今回の発掘で検出されたこの手の造構としては唯一のものであった。

溝の広がりは、南側は第6号住居址に接し、北側は小戸沢川の段丘へと続いている。要するに南北に細長くなっている。南北の規模は推定で、12m程、東西の幅は狭いところで、1m15cm、広いところで2m45cm程を測定できる。壁面の状況は至るところで起伏に富んでいる。西壁は外傾気味、東壁は垂直に近い。掘り込み面はソフトローム層で、下部はハードローム層である。その深さは50~60cm程度であった。

床面は極めてかたい層（ハードローム層）より成り立ち、凹凸が顕著であった。さらに床面の全般的なレベルは南から北へと傾斜していた。これらの傾斜は何のためだか不詳である。その理由としては覆土は黒色土で、砂の混じりではなく、また、流れた形跡も全くない。

床面上に密着あるいは、同面より20~50cm位浮いて、拳大程から一抱大程の石が無数に不規則に敷いてあった。これらの石はグループ的に集められていた。石質はホルンヘルスや花崗岩で、その下には黒色土が充満していた。石のなかには焼けているのもみられ、赤くなったり、炭化物の附着していたのも随所にみられた。

遺物は、内耳鍋、鎌倉前期の古瀬戸灰釉壺、鎌倉後期の古瀬戸灰釉四耳壺、古瀬戸大型こね鉢、室町前期の古瀬戸灰釉三足盤、古瀬戸灰釉平茶碗、古瀬戸灰釉鉢、室町後期の常滑の壺、江戸時代の陶器片がみられた。江戸時代のはあとからの飛び込みと思われ、本造構の時代決定には何にも關係ないと考へてよかろう。

前節で触れた井筋と同様、本造構のなかへゴミ捨場的に遺物を投げ込んだものと思われるしたがって、時代的には鎌倉前期、室町前期、室町後期とバラバラであったが、一般的に考えてみると、鎌倉前期に構築され、室町後期に廃絶したものと考えられる。それを裏付けできる好資料としては、近隣にある造構の時代決定の必要性が生じてくる。これらの造構としては南側の第6号住居址、西側の第12号竪穴、第13号竪穴、第1号集石である。第6号住居址は鎌倉後期と、第12号竪穴は室町中期頃、第13号竪穴は室町後期、第1号集石は鎌倉中期頃と思われる。各造構の時代から考えてみて、前述したうりと一致する。溝状造構のなかの石は第1号集石の廃絶したあとにとびこんだものとも考えられる。

遺物の出土数は第1号井筋を除いて、他の造構と比較検討してみると数多いものであった。したがって、ゴミ捨場的要素が強いものと考えられる。最後に本造構出土の遺物は城郭の成立時から滅亡時までの変遷を如実に物語っていると思われる。

(飯塚政美)

第8節 堀 址

内堀 (第 図、図版17)

本堀は現在もその造構の形が歴然として、直線上に南北に掘られており、南側は自然を利用した堀へ、北側は小戸沢川へと続いている。北側は段丘崖にその跡がくっきりとみえている。その規模 幅は 8 m 程、深さは 5 m 程、である。この地区は園場整備地区外なので、現況のままで後世に残る。入口らしきものは確認できなかったおそらく橋をかけていたものと思われる。

中堀 (第40~44図、図版17~19)

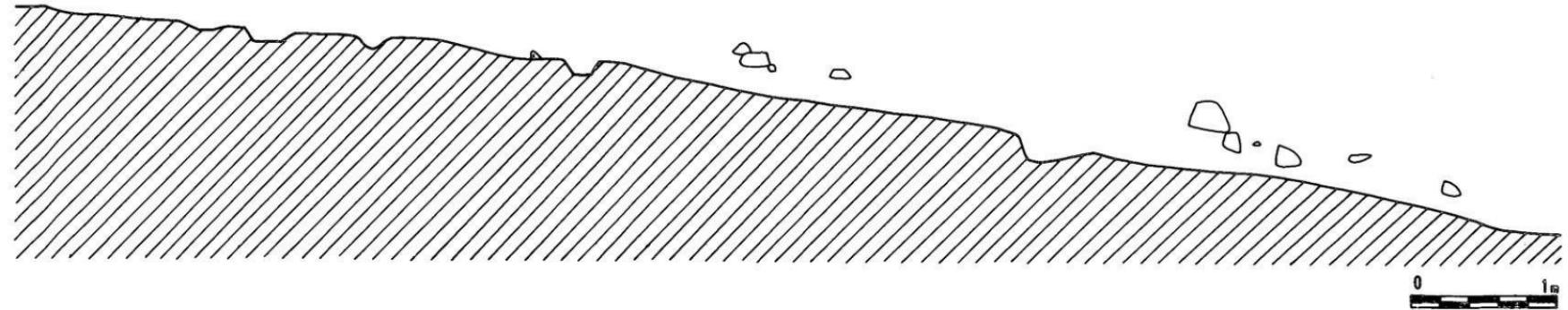
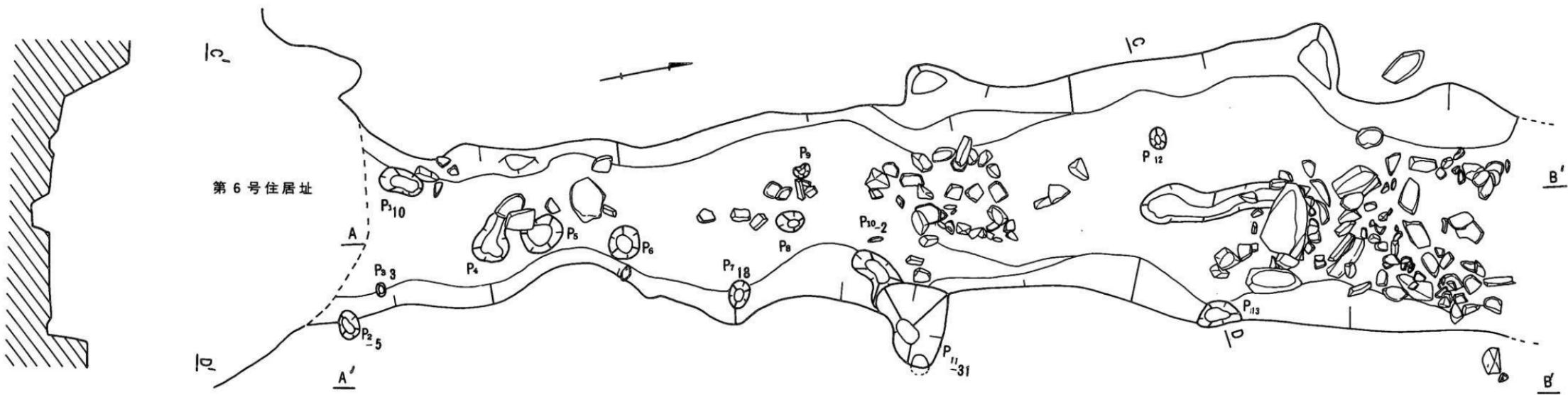
本堀付近の開田は明治後半で、鍵の手に曲る附近から東側附近は埋めて水田にしたという言い伝えが現在残っていた。堀の北側は現在は川となっており、その段丘面に手の加えられた形跡がみられたので、当初から堀に利用されたことは疑う余地のないところであった。全般的な堀の形態をみてみると、北側は小戸沢川の段丘崖へ抜け、その続きは南へ伸び、方形状に鍵の手を成して、東へ屈曲して、東側の外堀の一部へと抜けている。今回調査した部分は南側半分から東側への部分である。大きな堀だったので、断面図は 2 カ所測量した。断面の E', F' は発掘地区的鍵の手の曲った部分に位置しており、上面幅は約 6 m 20 cm、深さは約 2 m 70 cm、底面幅は約 1 m 50 cm である。西壁の傾斜面はならだかな傾斜、東壁は凹凸がはげしく、途中に段状のものを有する。

C', H' の断面は東側の外堀へ抜けする段丘崖の近くに位置し、上面幅 8 m 50 cm 程、深さは 3 m 90 cm 程、底面幅は 1 m 程である。壁面の状態は南はならだかな傾斜、北側は壁面中途に段状のものを有していた。土層の堆積順位のなかで、木炭層の堆積は注目に値する。底面にはわずかに石がみられた。全般的に北側と東側の出口へ行くに従って幅も広がり、深さも深くなっている。この形態は一般的通用するつくり方と思われる。堀の切れた部分はなくて、おそらく日常は橋をかけて出入りしていたものと思われる。

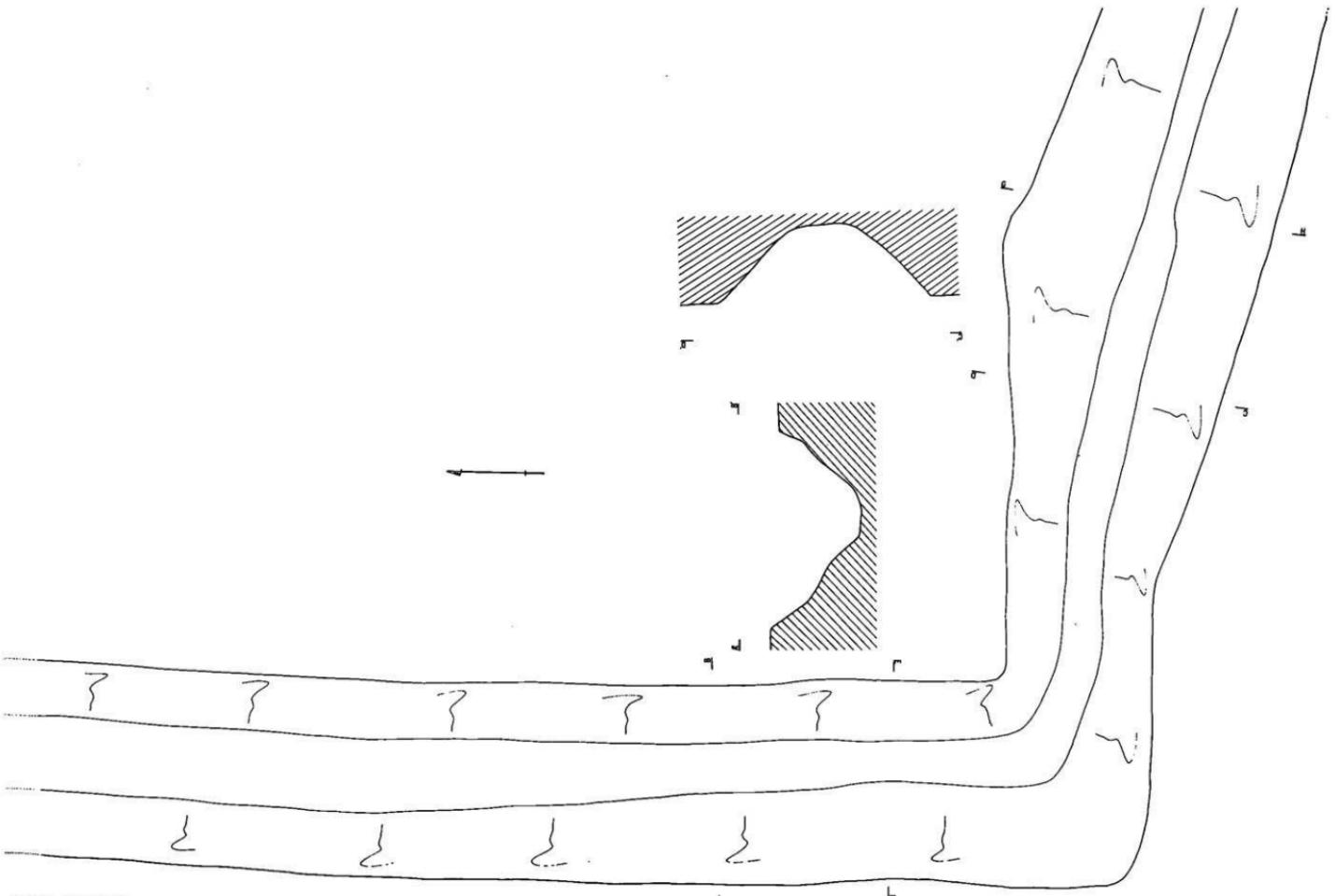
中堀の南側に外堀と接する地点に堀状の造構がみられ、規模は南から北へ約 30 m 程で終わっている。時間の都合で全掘はできなかったが、南側の外堀と接する地点で、上面幅で約 5 m 40 cm、底面幅は 50 cm 程、深さは 3 m 20 cm 程を測る。形態は北から南へとやや幅が広がり、レベルも外堀附近的接する地点へ行くに従って深くなっている。

南側の断面について述べてみると次のようになる。層位関係のなかで、VI 黒褐色土 2、VII 砂層のように砂の堆積が多くみられた。この事実はこの造構内に幾の時代かに水が流れたものと思われる。壁面は西壁、東壁ともに急斜傾している。この堀と北側の中堀とは如何なる関係にあるかは判然としない。

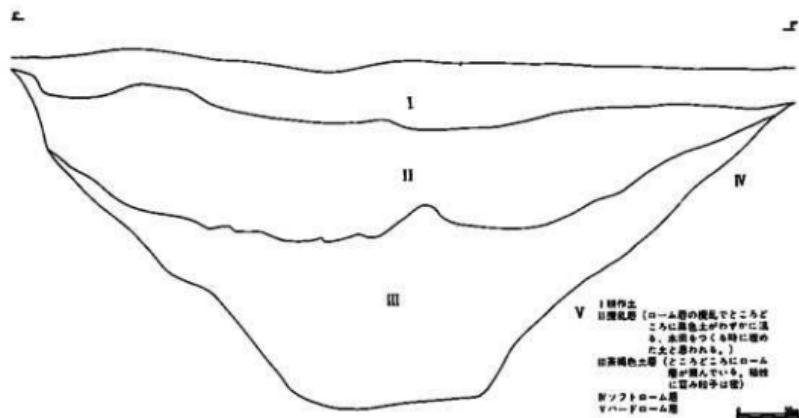
遺物は鎌倉前期の古瀬戸系山茶碗、古瀬戸灰釉小壺、江戸時代の陶器片の出土がみられた。自然遺物としては焼米、大豆の出土もみられた。時代決定は出土遺物を参考にするとともに、堀の構築方法と両面から考えてみる必要性が極めて大なものと思われる。



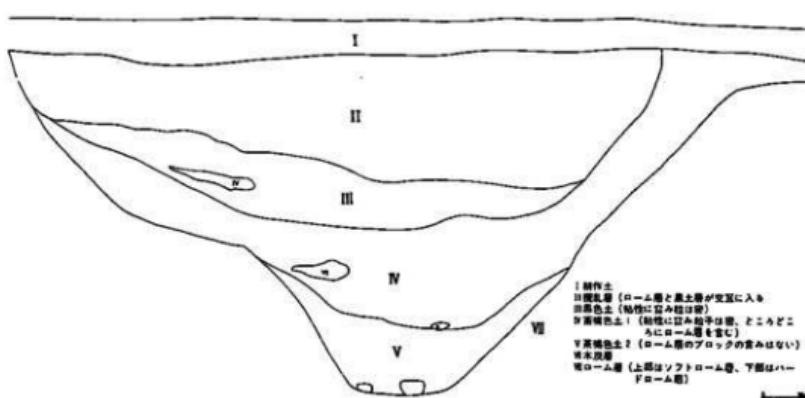
第39图 第1号房状造構実測図



第40圖 中壠實測圖



第41図 中堀断面図



第42図 中堀断面図

外堀（第45～47図、図版21～23）

外堀附近は現在は水田になつてはいたが、その開田は古い為に水田下に外堀の存在は知る人はだれもいなかった。しかし、北側の小戸沢川右岸段丘崖には一部分掘り込んだ痕跡が残っていたために、外堀のおおよその位置は推察できた。

調査により外壁の上面のプランが確認された。それによると堀は南北に細長く走っており、途中で、一部分切れている箇所がみられた。この切れた部分より南側はわずかにプランはみられた。これは、おそらく以前はきちんとした堀が存在していたが、水田造成の際に破壊されたものと思われる。北側方面のそれは見事な状態で残存していた。

北側の部分について説明をしてみるとことにしておこう。表土面より40～50cm位下ったソフトローム層面を掘り込んで構築され、壁の下半分部及び底面はハードローム層になっている。規模は28m程度を成し、幅は段丘崖の広い所で6m、南側では丸味状をもつて、密着してしまっている。

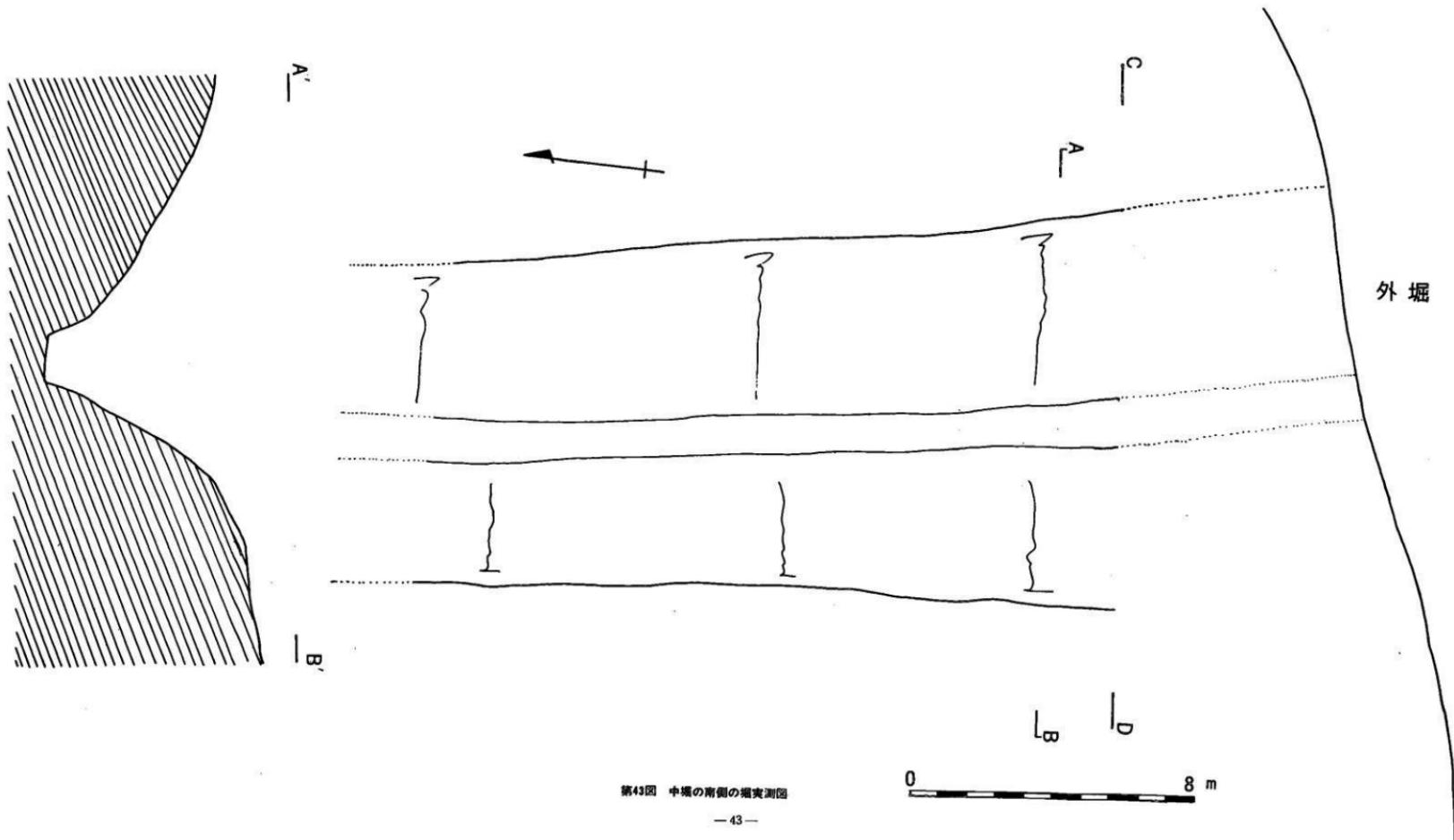
壁面は断面図で見る限りでは、北側の方は中段に段状を有し、下部から底面にかけて薙研堀りになっていた。中央部附近はならだかな傾斜で、割合に規則性をもつた弯曲状を成していた。底面は北側では大般水平に、中央部附近では中央部が若干低くなっていた。レベルは一般的にみられるよう段丘崖へ向けて低くなっていた。実測図のなかでの破線部分は土量が多かったので未発掘部分である。底面最も低い面にはほんの少量の砂層がみられた。堀の切れた南側の部分に、また堀のすぐ東側に点在するピット群は堀に関係するものであろうと思われる。用途的に考えてみるとP₁、P₂は大手門の門柱の跡；P₇～P₉は大手門に附隨する塀の一種ではないかと思われるが、確たる証明がないためにはっきりとは断言できない。壁の上面及び底面の棱はところどころに凹凸がみられた。

土層の堆積順位は北側では上から耕作土、茶褐色土（粘性に富み、粒子が密）、黒褐色土1（粘性に富み粒子が密）、黒褐色土2（ローム層がブロック状に混入）、搅乱層（ローム層の混りが多い）、黒色土（粘性に富み、粒子が密）、ソフトローム層、ハードローム層の順であった。北側では耕作土、黒土層（若干ロームがブロック状に飛んでいる）。搅乱土層（ソフトローム層と茶褐色土の混入）、茶褐色土層1（ソフトローム層の粒子の飛びが多い）、茶褐色土層2（ほとんどローム層の飛びがない）の順であった。

遺物は西壁の底部近くに古瀬戸片口鉢の陶器破片が出土した。この鉢の機能はこね鉢、名称は片口鉢、一般的には大平鉢と言われている。時代は鎌倉前期に位置づけられる。

本遺構の時代決定は前述した中堀と同様、出土遺物及び堀の構築状況の両面から考えてみなければならぬ。

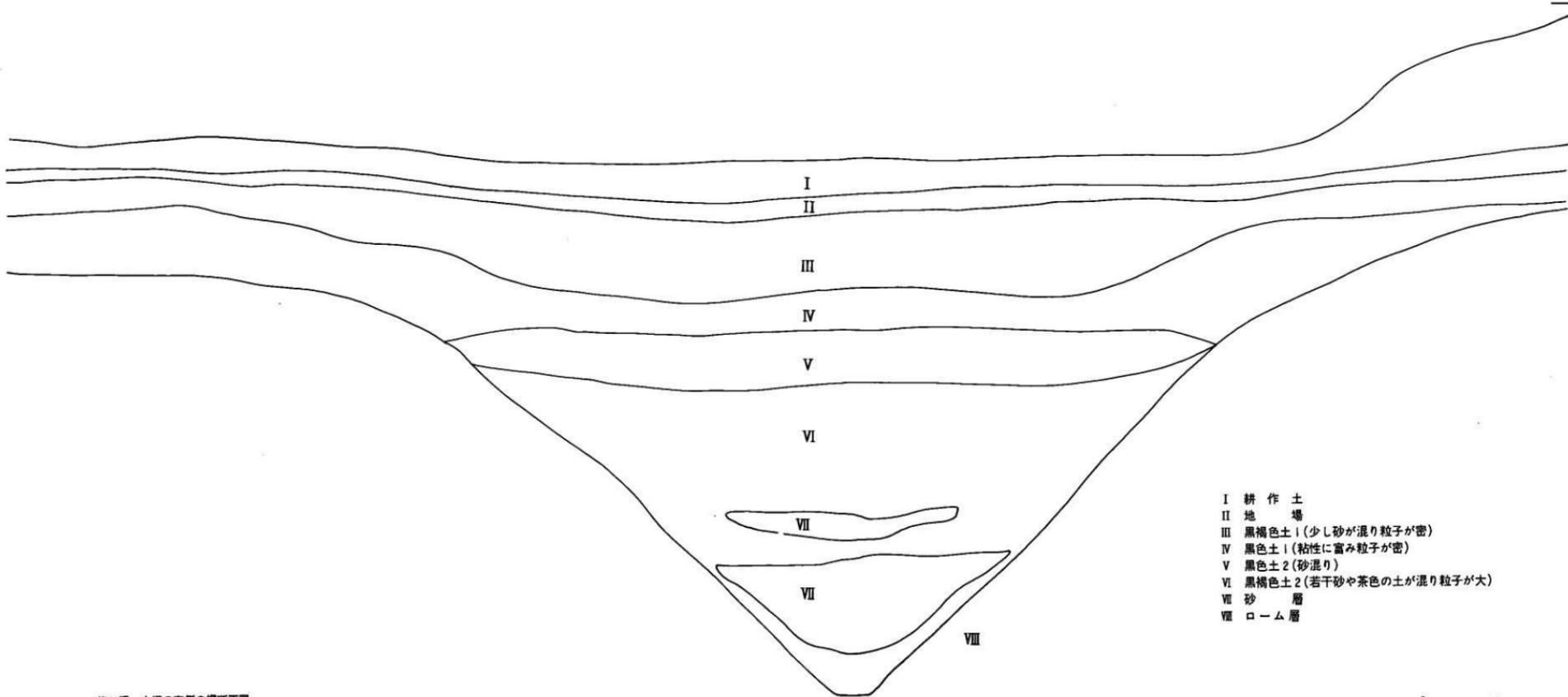
（飯塚政美）



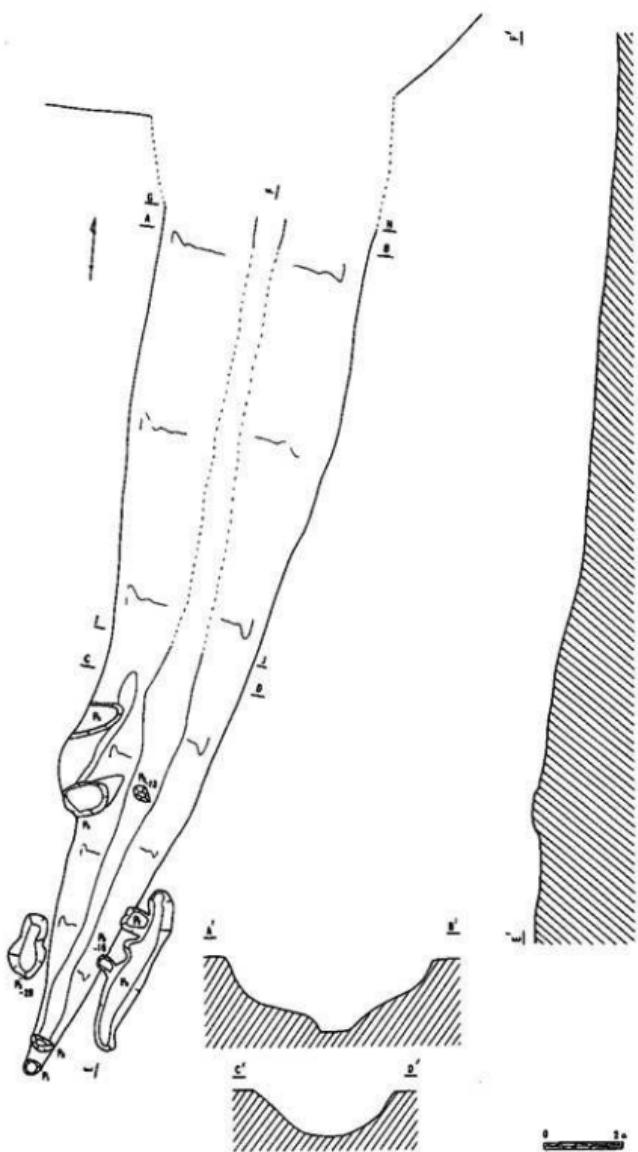
第43図 中堤の南側の堀実測図

C'

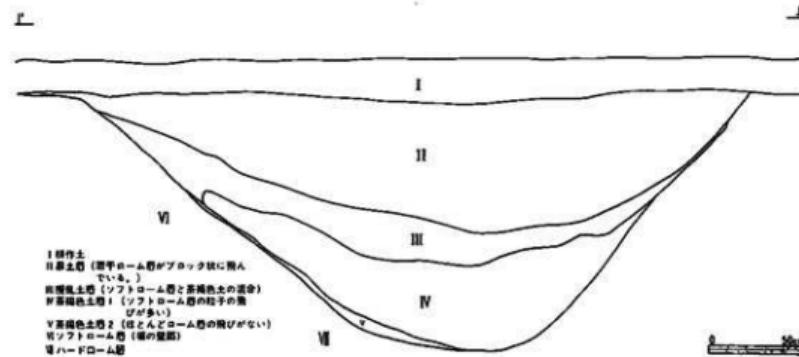
D



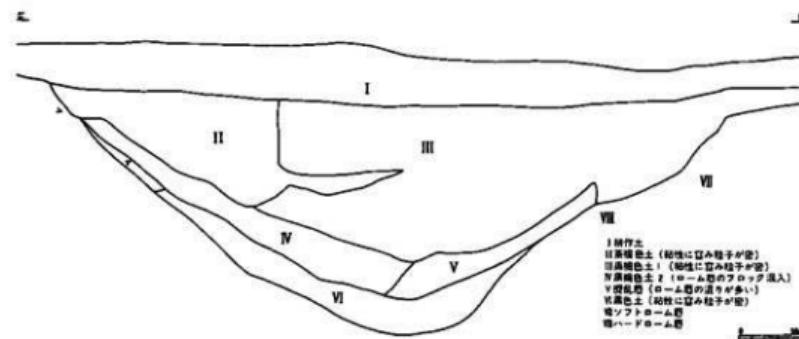
第44図 中堤の南側の堤断面図



第45図 外堀実測図



第46図 外堀断面図



第47図 外堀断面図

第9節 井戸址

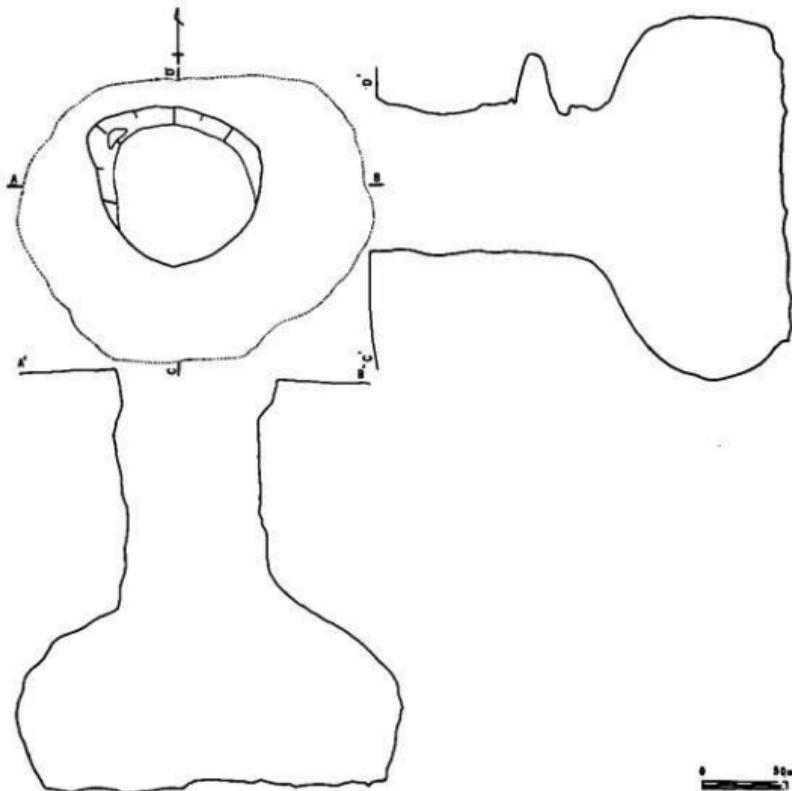
本造構は(第48図、図版23-24)に記載されている。本井戸址は発掘地区の北側に位置して発見され、表土面より40cm位下ったソフトローム層面を掘り込んで構築してある。そのプランは不整円形状を成し、上面の規模は南北93cm、東西は95cm、底面の規模は南北1m 65cm、東西2mを、深さは2m 50cm前後を測定できる。断面をみると、上部の1m 50cm位は円筒形を呈し、その組成土はソフトローム層、下部の1m前後は袋状を呈し、その組成土はハードローム層であった。ソフトローム層及びハードローム層の壁面、ハードローム層の底面は凹凸が頗著であり、さらに本井戸址を掘る際に使用されたと思われるノミ状工具の跡が目にもあざやかに描き出されていた。袋状を呈している場所は別名(水袋、あるいは水溜)と呼ばれ、飲料水を貯蔵したところと考えられる。円筒形の下部壁面、水袋の壁面には10数カ所の水口(水の出てくる)場所がみられ、そのうち深いのは奥へ

1m程も達していた。この口は構築時にあけたものではなくて、水が湧き出ることによって、自然にあいたものと思われる。水袋の上面に人頭大程の花崗岩や粘板岩製の石が100個程発見された。これは位置からして水を澄ませるための一つの工夫だと思う。床面近くに一抱え程もある花崗岩製の大きな石が検出された。この石は前述したのとは異っており、おそらく水神様的な信仰の対象に利用されたものと思われる。覆土は上層面では水分の多い黒色土、底面近くでは粒子の細かな砂の堆積があった。現在でも水口からわずかに水のしづくがたれていた。古くは現在の水の流れている面よりもずいぶん高い所に水脈があったものと考えられる。

遺物は、鎌倉前期時代の古瀬戸灰釉大壺、内耳、江戸時代の陶器の出土があった。江戸時代のものはあとでの落ち込みと考えてよからう。漆塗りと思われる器の破片もみられた。

鎌倉時代前半の遺構と思われる。

(飯塚政美)



第48図 井戸跡実測図

第10節 集石

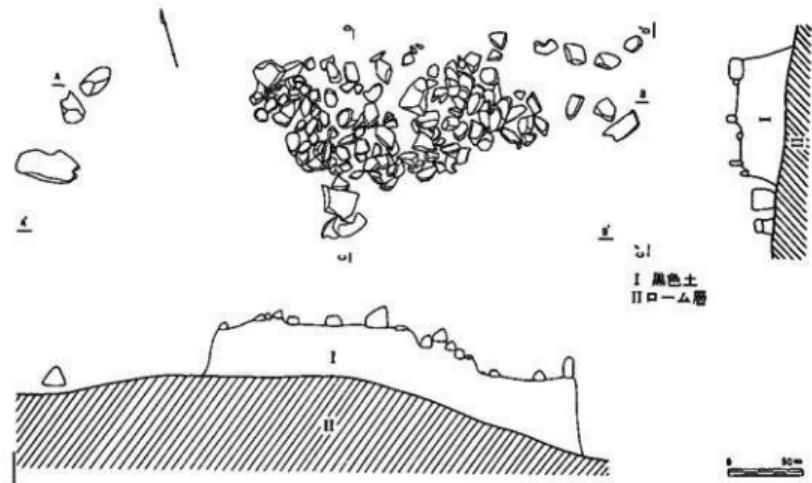
第1号集石 (第49図、図版24)

本遺構は発掘地区の最北端、第1号溝状遺構に隣接して発見された。南北1m40cm程、東西2m70cm程の範囲内に約130の自然石からなっている。石は約50cmから1m20cm程の幅で東西に走っている。石の配列のなかで西側の3個の石は別のものと考えて良いと思われる。その理由としては集中している石よりは大部離れているためである。石は拳大程から人頭大程の大きさで、人為的に使用されたものではなくて、その辺に散在している河原石や山石を集めて並べたものであった。石質はホルンヘルスが大部分で、なかに混じってわずかに花崗岩もみられた。石のなかには焼けた赤く変色したり、炭化物の附着していたのもみられた。配列には規則性はなく漠然としていた。

石のレベルも一定ではなくてまちまちであった。詳細に調査してみると、ローム層面より上に30~40cm位の厚さで、黒土層があり、その上に石が並んでいた。石は黒土層の密着しているもの、あるいは埋っているもの等いろいろであった。石のレベルを全般的みてみると西半分は大体一定、東半分は途中に段状の部分を有して、低くなっている。北側は一定、南側の一部分は急激に低くなっている。

これらの状況から本遺構は何を意味するかは不明であるが、人為的なものには相違ない事實を証明できる。遺物は鎌倉中期頃の常滑焼の甕の破片が1点だけ出土した。本遺構は鎌倉中期頃と考えられよう。ただ、本遺構は第1号溝状遺構内にみられる石との関連性を考えてみる必要性があると思われる。

(飯塚政美)



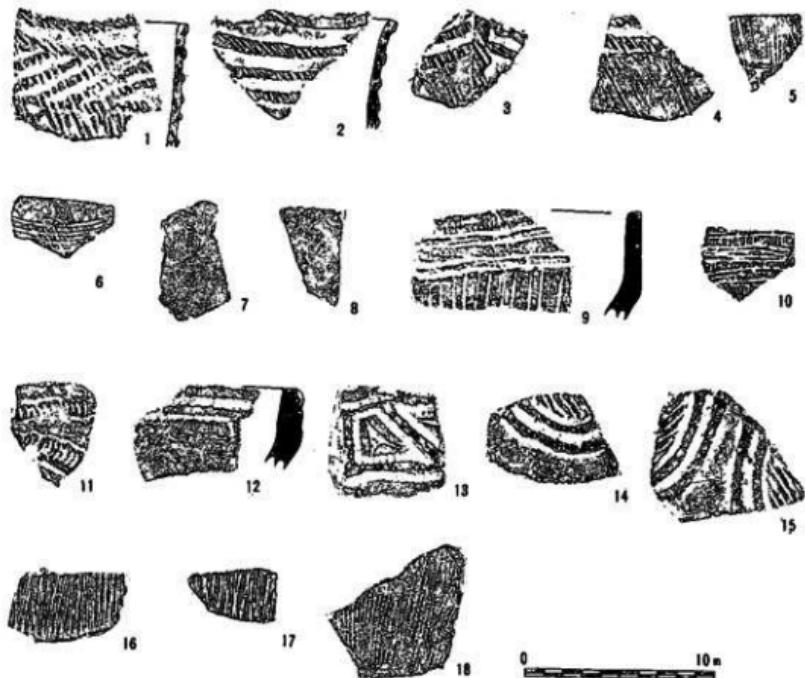
第49図 第1号集石実測図

第IV章 遺物

第1節 土器 (第50図)

今回出土した土器類は相当量の数になったが、そのうちでも代表的なものをとりあげて、ここに拓影の姿で記載した。1は表面採集、(2~8)は第2号住居址よりそれぞれ出土した。(1~8)は薄手細線指痕文土器、通称おせんべい式土器と呼ばれている一群である。(1~5)は薄い粘土紐を隆帯状に貼り付けたもの。粘土紐の貼り付け方法は各種あり、複雑多岐(1)、横位に数条(4~5)山形状、縦位状(3)である。いずれにしろ、これらは隆帯の上にさらに、貝殻腹縁による条痕を斜方向、あるいは垂直方向に付けてある。(1~2)は若干波状口縁気味である。1は外面には炭化物の附着が顕著であった。色調は黒褐色(1, 4~5)、明白褐色(2~3)である。焼成は全般的に良好であった。

(6)は貝殻腹縁による条線を不規則に配してあるもの。色調は明黄褐色を呈し、焼成は良好で



第50図 土器拓影

ある。(7~8)は薄手細線指痕文土器のうち、無文を成しているもの。黒褐色を呈し、焼成は良好である。(9)は表面採集による、破片の上部は地文に縦文を、さらにその上に沈線を横位に、下部は無文地に沈線を縦位にそれぞれ配してある。多量の長石を含み、明茶褐色を呈し、焼成は良好である。(10)は第3号土塙より出土、無文地に無雜作に細沈線を横位に付け、沈線間に縦位に刻目を工夫してつけてある。黒褐色を呈し、焼成は普通である。(9~10)は縄文中期初頭と思われる。(11)は表面採集、(13)は井筋の出土、ともに抽象文の表現が著しいもの、(13)は隣帯を附け、その文様効果を一層強化している。(11)は赤褐色、(13)は明茶褐色を呈し、焼成は双方とも普通である。

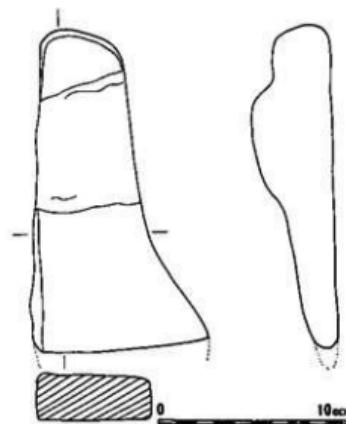
(12)は第1号住居址出土、口縁部破片であって、口唇直下に幅広3の沈線を横位に二条配し、そのなかに爪形文の文様をつけてあり、下部は無文となっている。雲母を多量に含み、赤褐色を呈し、焼成は普通である。(14~15)は外堀より出土、櫛形文の構成がなされているもの、双方とも赤褐色を呈し、多量の長石を含み、焼成は普通である。(11~15)は縄文中期中葉に位置づけられるよう。(16~17)は第3号住居址出土、18は井筋出土、土師器であって、カキ目の跡が顕著である
(飯塚政美)

第2節 石器

今回出土した石器は縄文時代のものが全てであって、極だった特徴はなく、また注目すべきものはなかったので割愛させていただいた。ただ、注目すべきものとしては第51図を考えてみなければならない。

本ノミ状工具は井筋の底面よりわずかに浮いた砂層のなかに混合して出土したものである。石質は粘板岩を利用してあり、上部は丸味を成している。下端は第51図のように刃部になると思われる個所は欠損している。上部よりわずかにさがった位置に方形状の突起のようなものをつけてあった。これはこのところに木の柄を附着して、使用に便利性を考えた跡と思われる。大きさは上部幅44cm、下部幅90cm、厚さは突起部分で、43mmを測る。この工具の使用用途であるで、前章の第9箇井戸址のなかで説明したように壁面にはノミの跡が顕著であった。そのノミの跡を残したのが、この工具ではないかと思われる。ただ、刃部が欠損してしまっているために、刃先が実測できないのは誠に残念であった。

ただ、このような資料の出土は中世を研究するうえで、極めて特殊なだけに、今後、大きな問題提起をしてくれるだろうと思われる。
(飯塚政美)



第51図 石器(ノミ状工具)実測図

第3節 陶磁器・内耳土器

今回の調査で出土した陶磁器、内耳土器は、約170点で、数点を除いて他は断欠品である。陶磁器の種別をみると、古瀬戸系約78%、常滑系約7%、美濃系約1%、青磁・白磁系約8%、内耳土器類約6%であり、古瀬戸系が全体の約8割近くをしめている。時代的にみると、鎌倉前期時代約22%、鎌倉中期約2%、鎌倉後期約16%、鎌倉末期～南北朝約3%、室町前期約9%、室町中期約18%、室町後期約9%、室町末期～戦国時代約2%、江戸時代約6%、中国の宋、元時代約8%，時代不明6%である。器形からみると、日常食器類(雑器類)が大部分であり、一部祭器と思われるのがある。その他の説明については下の第1表を口絵のカラー写真と照合して下さい。(飯塚政美)

第1表 出土陶磁器及び内耳土器一覧表

口絵	番号	名称・器型	部分	厚さ (mm)	出土場所	製作時代	備 考
2	1	常滑片口鉢	底部	12	第1号住居址	室町後期	
△	2	常滑片口鉢	△	△	△	△	
△	3	古瀬戸灰釉	胴部	8	第2号住居址	鎌倉末～南北朝	器形不明
△	4	古瀬戸灰釉おろし皿	口縁部	5	△	△	
		内耳鍋	胴部	6	第4号住居址		
2	5	中國青磁	口縁部	5	△	宋	
△	6	中國青磁	底部	8	第5号住居址	△	
△	7	古瀬戸灰釉平茶碗	口縁部	5	△	鎌倉末～南北朝	
△	8	古瀬戸灰釉片口鉢	△	13	第6号住居址	鎌倉前期	
△	9	古瀬戸短頸壺	胴部	9	△	△	
△	10	古瀬戸大形四耳壺	△	7	△	鎌倉前期	
△	11	古瀬戸灰釉印花文瓶	△	10	△	鎌倉後期	
△	12	古瀬戸灰釉平茶碗	口縁部	5	△	△	
		古瀬戸大形四耳壺	胴部	8	△	鎌倉前期	口絵2の10と同一個体
3	1	古瀬戸灰釉皿	口縁部	4	△	鎌倉後期	
		古瀬戸灰釉皿	△	△	△	△	
3	2	中國白磁	△	△	△	元	
		古瀬戸大形四耳壺	△	9	△	鎌倉前期	
		古瀬戸灰釉皿	△	4	△	鎌倉後期	
3	3	中國白磁	胴部	3	△	元	

口絵	番号	名称・器型	部分	厚さ (mm)	出土場所	製作時代	備 考
3	4	古瀬戸天目茶碗	胴部	5	第1号竪穴	室町中期	
4	5	古瀬戸灰釉香炉	底部	7	◆	◆	
4	6	古瀬戸天目茶碗	口縁部	5	◆	◆	
4	7	古瀬戸灰釉三足盤	◆	6	◆	◆	
4	8	古瀬戸灰釉三足盤	胴部	8	◆	◆	
4	9	常滑大甕	◆	11	第2号竪穴	◆	
4	10	古瀬戸灰釉四耳壺	◆	9	◆	◆	
4	11	古瀬戸灰釉尊式仏花瓶	口縁部	5	◆	◆	
4	12	古瀬戸灰釉平碗	◆	6	◆	◆	
4	1	古瀬戸灰釉皿	◆	5	◆	◆	
4	2	古瀬戸灰釉合子	◆	4	◆	鎌倉後期	
4	3	古瀬戸灰釉平茶碗	◆	5	◆	◆	
4	4	古瀬戸灰釉四耳壺	胴部	10	◆	◆	
4	5	古瀬戸灰釉小皿	底部	6	◆	◆	
		古瀬戸灰釉小皿	口縁部	5	◆	◆	
		内耳鍋	胴部	9	◆		
4	6	古瀬戸鉄釉瓶子	底部	12	◆	鎌倉後期	
4	7	古瀬戸灰釉平茶碗	胴部	6	◆	◆	
4	8	古瀬戸灰釉片口盤	口縁部	5	第4号竪穴	◆	
4	9	中国青磁	胴部	5	第6号竪穴	宋	
		古瀬戸灰釉皿	口縁部	5	第7号竪穴	室町後期	
4	10	瀬戸	胴部	3	◆	江戸器形不明	
4	11	中国白磁碗	口縁部	6	第12号竪穴	元	
4	12	古瀬戸天目茶碗	底部	◆	◆	室町中期	
5	1	中国白磁碗	胴部	5	第13号竪穴	元	
4	2	古瀬戸灰釉こね鉢	◆	6	◆	室町中期	
4	3	常滑甕	◆	7	◆	室町後期	
4	4	中国青磁碗	◆	5	◆	宋	
4	5	古瀬戸灰釉平茶碗	口縁部	◆	第14号竪穴	室町後期	
4	6	古瀬戸天目茶碗	底部	7	◆	◆	
4	7	古瀬戸灰釉平茶碗	胴部	5	◆	◆	
4	8	古瀬戸灰釉平茶碗	底部	7	◆	◆	
		内耳鍋	口縁部	6	◆		
5	9	瀬戸鉄釉筒形容器	◆	5	◆	江戸	

口絵	番号	名称・器型	部分	厚さ (mm)	出土場所	製作時代	備 考
5	10	古瀬戸灰釉おろし皿	口縁部	5	第3号土塙	室町前期	口絵5の11と同一個体
◆	11	古瀬戸灰釉おろし皿	底部	6	第1号窖址	◆	
◆	12	古瀬戸灰釉大形四耳壺	口縁部	7~12	第1号井筋	鎌倉後期	
6	1	古瀬戸灰釉皿	◆	3~6	◆	室町前期	
◆	2	古瀬戸灰釉大形こね鉢	◆	5	◆	◆	
◆	3	古瀬戸灰釉盤	底部	8	◆	◆	
		古瀬戸灰釉鉢	口縁部	5	◆	鎌倉前期	口絵6の5と8と同一個体
6	4	常滑大甕	胴部	9	◆	◆	
◆	5	古瀬戸灰釉鉢	◆	6	◆	◆	
◆	6	古瀬戸灰釉大形四耳壺	◆	11	◆	◆	
1	1	古瀬戸灰釉皿	口縁部	3	◆	室町中期	
◆	2	古瀬戸灰釉皿	◆	4	◆	◆	
6	7	古瀬戸灰釉平茶碗	底部	9	◆	◆	
	8	古瀬戸灰釉鉢	◆	6	◆	鎌倉前期	
◆	9	古瀬戸灰釉平茶碗	口縁部	5	◆	室町中期	
◆	10	古瀬戸灰釉こね鉢	底部	9	◆	鎌倉前期	
		内耳鍋	胴部	12	◆		
6	11	古瀬戸灰釉鉢	底部	7	◆	鎌倉前期	
		古瀬戸灰釉片口鉢	口縁部	7	◆	◆	口絵6の12と同一個体
6	12	古瀬戸灰釉片口鉢	底部	8	◆	◆	
		内耳鍋	口縁部	8	第1号溝状追構		
7	1	古瀬戸灰釉壺	底部	9	◆	鎌倉前期	口絵7の4と同一個体
◆	2	古瀬戸灰釉四耳壺	胴部	8	◆	鎌倉後期	
◆	3	古瀬戸灰釉四耳壺	◆	9	◆	◆	
◆	4	古瀬戸灰釉壺	◆	8	◆	鎌倉前期	
◆	5	古瀬戸大形こね鉢	口縁部	11	◆	鎌倉後期	
◆	6	常滑甕	底部	12	◆	室町後期	
		瀬戸小鉢	胴部	3	◆	江戸	
7	7	古瀬戸灰釉三足盤	◆	5	◆	室町前期	
◆	8	古瀬戸灰釉平茶碗	口縁部	◆	◆	◆	
◆	9	古瀬戸灰釉鉢	◆	◆	◆	◆	
◆	10	瀬戸	底部	4	中堀	江戸	器形不明
		古瀬戸系山茶碗	口縁部	◆	◆	鎌倉前期	
		古瀬戸灰釉小壺	胴部	◆	◆	◆	
8	1	古瀬戸片口鉢	口縁部	7	外堀	◆	
◆	2	古瀬戸灰釉大壺	胴部	11	井戸址	◆	

図版	番号	名称・器型	部分	厚さ (mm)	出土場所	製作時代	備考
8	3	瀬戸無釉行平	底部	4	井戸址	江戸	
		内耳鍋	◆	7~14	◆		
8	4	常滑甕	胴部	8	第1号墓石	鎌倉中期	
		古瀬戸天目茶碗	口縁部	5	表採	室町後期	
		中国青磁碗	底部	11	◆	宋	
8	5	古瀬戸鉄釉四耳壺	胴部	9	◆	鎌倉後期	
◆	6	中国白磁碗	底部	5	◆	元	
◆	7	美濃灰釉皿	◆	10	◆	室町末期~戦国	
◆	8	瀬戸灰釉鉢	◆	4	◆	江戸	
◆	9	古瀬戸無釉小皿	口縁	3~7	◆	鎌倉前期	
◆	10	古瀬戸灰釉四耳壺	胴部	7	◆	鎌倉中期	
		古瀬戸灰釉平茶碗	底部	8	◆	室町中期	
		古瀬戸灰釉四耳壺	◆	◆	◆	鎌倉中期	口縁8の10と同一個体
		古瀬戸鉄釉壺	胴部	7	◆	室町中期	
8	11	古瀬戸こね鉢	底部	9	◆	鎌倉前期	
		古瀬戸系山茶碗	胴部	6	◆	◆	
		古瀬戸灰釉平茶碗	底部	6~9	◆	室町前期	
8	12	古瀬戸灰釉四耳壺	胴部	7	◆	鎌倉前期	
		古瀬戸灰釉こね鉢	口縁部	4	◆	室町中期	
		古瀬戸灰釉こね鉢	底部	6	◆	◆	

第4節 砥石

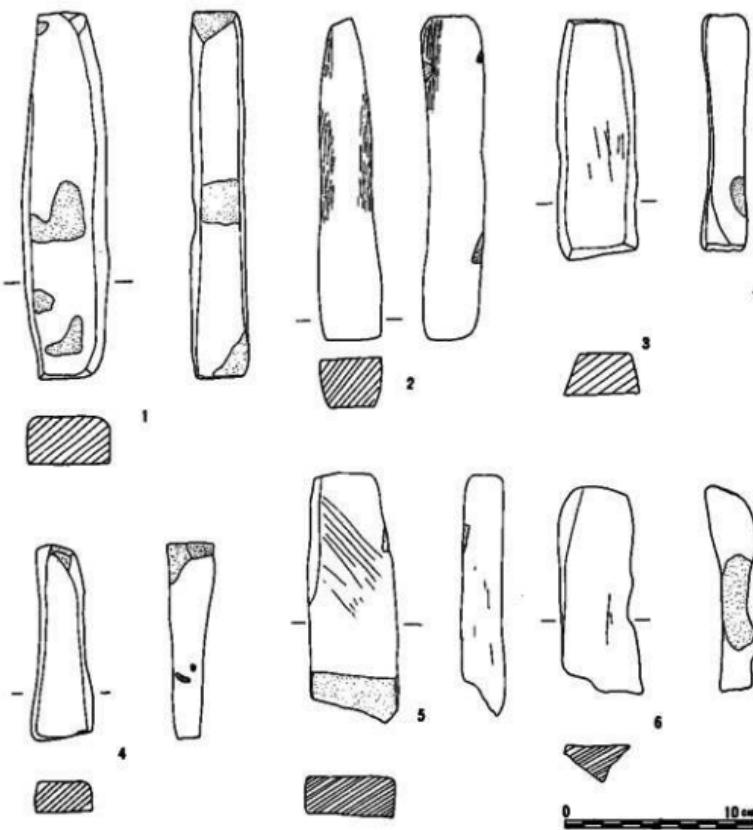
砥石は総数で7点出土したが、そのうち主だったもの6点を記載した。第53図(1~6)で、1~4、6)は井筋、2は溝状造構、5は第1号窖址より、それぞれ出土している。砥石の使用過程からして(1, 5~6)は荒研、(2~4)は中研に属すると思われる。石質は、(1~4)は茶色を呈した油性の強い頁岩系、(5~6)は緑色を呈する綠泥岩か蛇紋岩系類のものと思われる。との思われる。

(2~3, 5~6)のように表面に使用した痕跡認められるものもあった。6のようにプロペラ状の磨滅の仕方は現在、使用している砥石と相通じるものがあると思われる。

砥石は磨く過程において、荒研・中研・仕上研の3種類に大別できる。荒研はきめて大きは金属器を磨くためのものである。

今回出土した砥石の種類からして、武具、刀剣を磨いたものと思われる。伊那地方では全般的に三河地方のものを使用したケースが多いように思われる。

(飯塚政美)

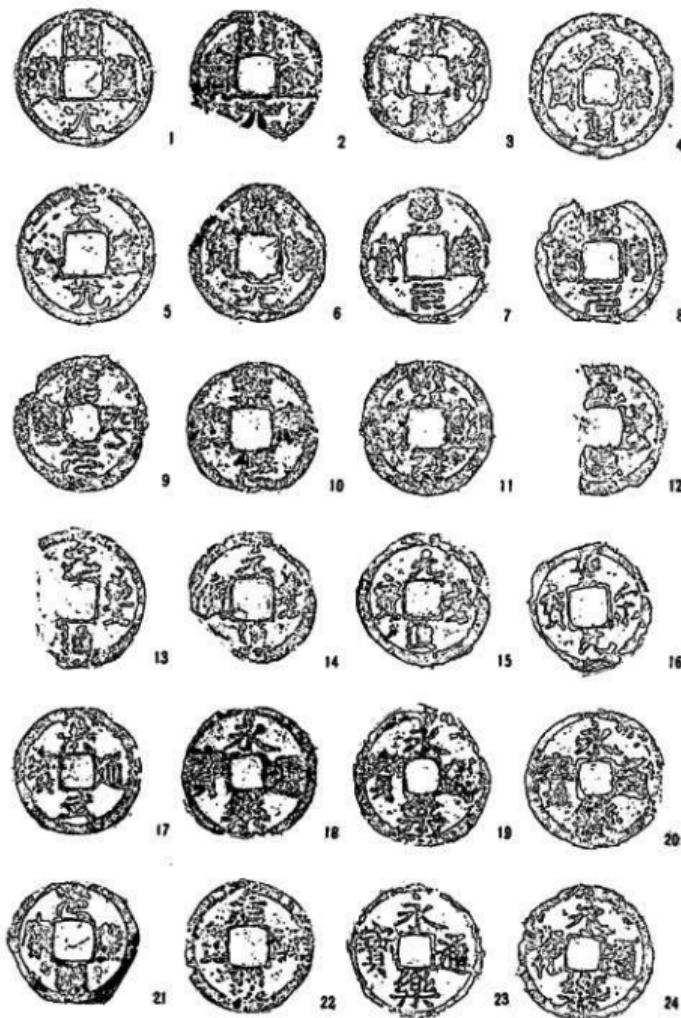


第52図 砥石実測図

第5節 古 錢

欠損品も含めて44点出土した。第54図（1～20）は第1号竪穴出土、（21～24）は第2号竪穴出土である。（1～2）は開元通宝（唐621年）、3は祥符通宝（北宋1008年）、4は天禧通宝（北宋1017～1021年）、5は天聖通宝（北宋1023年）、（6～11）は熙寧元宝（北宋1068年）、（12～15、21～22）は元豐通宝（北宋1078年）、聖宋元宝（北宋1101年）、17は洪武通宝（明1368年）、（18～20、23～24）は永樂通宝（明1411年）である。これらの輸入形態は北宋錢では平清盛の日宋貿易、明錢は足利義満の対明貿易（勘合符貿易）によるところが大部分であると思われる。いずれにしろ、これらの古錢は一般に流通したビタ錢である。

(飯塚政美)



第53図 古銭拓影 (1:1)

第6節 金属製品

金属製品は数点の出土があったが、そのうちで極だった4点をここに記載した。第54図の2)は第5号住居址、(3)は第6号住居址、(4)は第15号竪穴より出土したものである。

(1) は鉄製筒形状工具で、上面は破損している。上部附近は内面で方形の筒状を成している。保存状態は割合に良好であるが、用途は判然としない。(2) は棒状工具で、ほぼ完全な形であり、保存状態は良好。(3) は鉄鎌であり、鎌先と柄の部分は欠損しているが、残った部分からして、なぎ形の鎌と思われる。(4) は火打ち金で、割合に保存状態は良好である。
(飯塚政美)



第54図 金属製品実測図

第7節 自然遺物（出土穀類）

カンバ垣外、1号窯址の井戸内の泥土中から炭化した穀類が出土し、実体顕微鏡下で検索した結果、米粒と小型の豆類及び不明の小穀類と判明された。他の窯址からは全く検出されず、井戸内の保存条件が良好であったものと思われる。これらの出土穀粒は炭化がかなり進み、脆弱となっていたので、泥土との分離には注意を要した。また、出土粒数が少なかったので、形状の計測及び数値の統計的な取扱いはできなかった。

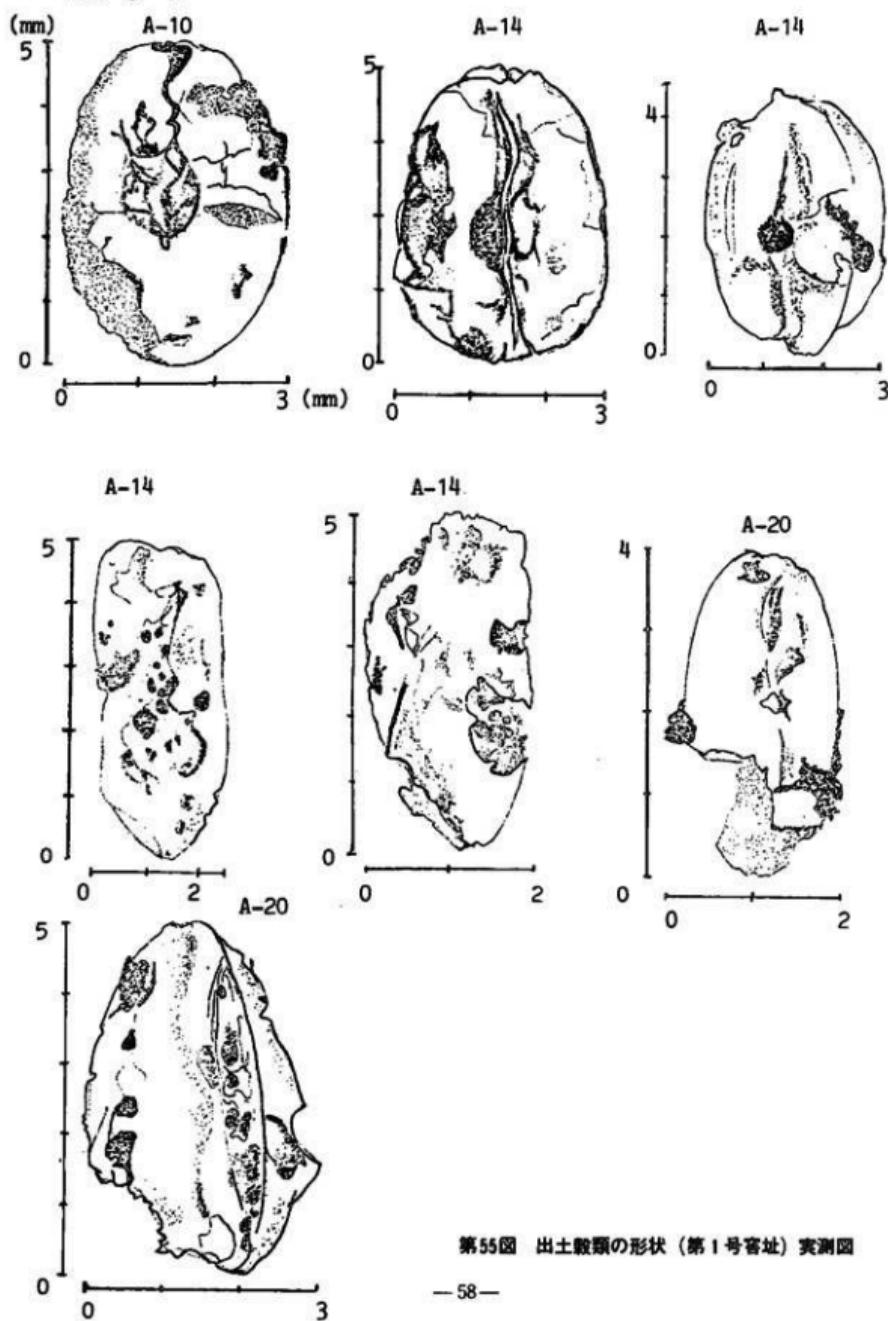
(1) 米粒

形状は第55図のA-14にみられるように相当破損しているが、胚の部分が欠落していることから玄米ではなく精米状のものと思われる。形は現在の精米より若干小型であり、参考までに比較の図版28に示した。

(2) 小形豆類

第55図A-10及びA-14にみられるように、中心部が陥没している。拡大観察の結果明らかに豆類であることが確認され、陥没部分は胚に相当するところと思われる。現在の小豆（あずき）の小形のものと類似している。参考までに比較を図版28に示しておく。

出土穀類の分離及び判定は信州大学農学部作物・育種学研究室が分担し、主に三久保裕子、大森智代によって行われたものである。
(氏原暉男)



第55図 出土穀類の形状 (第1号客室) 実測図

第V章 所 見

昭和53年度西部開発事業（畠地帯総合土地改良事業）が西春近南小出地区で実施されるに当たり、当地区内に存在するカンバ垣外遺跡（地元の人は当地を内城（うちじよう）と呼んでいる）の緊急発掘調査が実施されたわけであるが、縄文、奈良、中世の遺構、遺物の検出が多く、整理に時間を費やし、また、研究を要する問題が極めて困難な点が多く含まれているので、発掘調査より知り得た所見と文献との両面から問題点を記し、論を進めていきたいと思う。

本遺跡の立地と規模

内城と名の付く小字名の占める範囲は凡そ10,000m²程を成し、南小出部落の南東端に位置し、下島部落と境を接して位置している。微地形は北側は小戸沢川の右岸段丘面、東側は天竜川右岸第二段丘面、南側は山麓より流れを集めて流れ出す沢さらに、その南側には細窪と称する洞が発達した自然地形の最も複雑多岐な地点に位置している。

今回の発掘調査は土地改良事業のために、遺跡地全般にわたって調査が行なわれ、その結果は縄文早期末葉から縄文前期初頭の竪穴住居址2軒、縄文時代の土塙6基、縄文中期の竪穴住居址2軒、奈良時代の竪穴住居址1軒、中世の竪穴住居址2軒、中世の竪穴22基、中世の柱穴群4個所、中世の窖址2基、井筋1個所、溝状遺構1基、堀址（内堀、中堀、外堀）、井戸址1個所、集石1基と多くの遺構の検出をみた。

縄文時代の遺構

縄文早期末葉から縄文前期初頭の住居址は第2号住居址と第7号住居址であり、前住居址は後住居址を切っている。プランは円形状で、炉の存在はなかった。これは時代的な特徴と思われる。ピットは数多くみられたが、主柱穴となりうるものは確実に把握できなかった。縄文中期の住居址は第4号住居址であり、プランの実体は切り合い関係、あるいは他の条件より確認できなかった。

炉は埋甕炉の形態を有し、甕は正位の状態で、下部は欠損していた。柱穴の存在もはっきりとはしなかった。

土塙は6基発見された。本遺構の時代決定は（遺物の出土は1例だけであったが）一般的にみられる形状及び諸要素より縄文時代のものと考えたわけである。平面プランは楕円状のもの2、ひようたん形状のもの1、円形状のもの2、長円形状のもの1であった。規模は全般的にみて、1m～2m前後のごくありふれた程度のものと思われる。

縄文時代の遺物

縄文時代の土器の出土した遺構は第1号住居址、第2号住居址、第4号住居址、第3号土塙、井筋であった。井筋内の出土は後世の流れ込みの可能性が強いように思われた。

第50図の土器拓影のなかでみられるように、おせんべい式土器のうちでも器面に隆帯を貼り付けたのは、近年脚光を浴び出した東海地方の塙屋式の系派。無文を成しているものは木島式の系派と思われる。沈線文を細く、あるいは太く、不規則に配してあるのは縄文中期初頭に諏訪地方を中心にして盛えた梨久保文化圏を代表する土器であろう。

抽象文；隆帯、爪形文、櫛形文のみられる土器は勝坂式に類似すると思われる。

奈良時代の遺構

奈良時代の遺構は第3号住居址で、北西で第1号住居址（縄文中期）を切っている。平面プランは隅丸方形、主柱穴は構築時には4本あったと思われたが、現存は3本だけしか認められなかった。カマドは東壁中央部に発見され、石組粘土カマドであったと思われるが、現存は大部分こわされてしまって、そのみる影をわずかに留めている程度であった。

奈良時代の遺物

井筋内出土の土師器は第3号住居址と接しているので、後世の流入かと思われる。井筋、第3号住居址出土の土師器はカキ目痕が明瞭であり、時代的には奈良時代後期、国分I式に類似するものと思われる。

中世の遺構

中世の詳細な時代的なとらえかたは、今回の場合、一般的に考えられているように鎌倉時代から戦国時代とする。今回の発掘でこの時期の遺構としては前にも触れた様に竪穴住居址、竪穴、柱穴群、窓址、井筋、溝状遺構、壠址（内堀、中堀、外堀）、井戸址、集石の検出をみた。これから、これらの遺構を1つ、1つ取りあげて諸特徴、あるいは気づいた点を簡潔に述べてみたいと思う。

A 竪穴住居址

今回の発掘では2個所検出されている。プランは第5号住居址では隅丸方形、第6号住居址では不正円形を成していた。特徴として、第5号住居址はピットの配列からして部屋と部屋との間仕切り的な跡がみられた。第6号住居址では多量の焼土や木炭の出土より何か工房的な臭いがするようと思われる。前住居址は鎌倉後期から南北朝、後のは鎌倉後期と思われる。

B 竪 穴

22個所の発見があった。検出された位置によって四つのグルーピング的な大別が可能である。それは第1号竪穴と第22号竪穴、第2号竪穴から第13号竪穴まで、第14号竪穴から第20号竪穴まで、第21号竪穴である。平面プランは方形状、長方形状、隅丸方形状、円形状、橢円形状の五種類がある。方形状のものとしては第1号竪穴、第3～7号竪穴、長方形状のものとしては第2号竪穴、隅丸方形状のものとしては第8～12号竪穴、第14～18号竪穴、第20～22号竪穴、円形状のものとしては第19号竪穴である。

規模では不明の場合は大部分が切り合い関係にあって、その数値をつかめない。この関係のうちでも、第7号竪穴のように南北、東西ともに不明のようなケースはこの1例に過ぎない。南北が不

明なのは第3・4号竪穴、東西が不明なのは第6～7号竪穴である。辺は大小雜々であるが、全体的にみて、大きい一邊だけをとりあげて列記してみると次のようになる。1mから1m50cmのは第3号竪穴、第4号竪穴、第5号竪穴、第9号竪穴、第15号竪穴、第21号竪穴、第22号竪穴、1m50cmから2mの範囲内に含まれるのは第6号竪穴、第8号竪穴、第9号竪穴、第10号竪穴、第11号竪穴、第16号竪穴、第17号竪穴、第18号竪穴、2m50cmから3mに入るには第1号竪穴、第12号竪穴、第13号竪穴、第14号竪穴、第19号竪穴、3mを越すのとしては第20号竪穴、4m50cmをはるかに越えるのとしては第2号竪穴がある。深さとしては数cmが1例、10cm前後が8例、15～20cm前後が5例、25cm前後が1例、30cm前後が4例、50cm前後が2例、第2号竪穴のように1mを越える深いものも特殊なケースとしてみられた。諸特徴としてはピットの有るものは16例、切り合い関係のものは8例、覆土中に炭化物や焼土の検出があったもの14例、石が配列してあったもの5例、中段があり入口的な用途が考えられるもの2例であった。

遺物の出土したのは8例あり、主として、瀬戸や常滑を産地とする陶器片、中国の宋、元時代の白磁、青磁に代表される磁器片の出土をみた。これらに混じって、第1号竪穴、第2号竪穴のように古錢の出土例もあった。

時代は切り合い関係からして、おうよそ、その時代決定はできるが、遺物の出土した竪穴だけに限ってみると、鎌倉後期1、室町中期3、室町後期4である。

C 柱穴群

本造構は4個所発見され、存在面は四つともローム層上面に掘られていた。ピット数は第1号柱穴群では60に近い数、第2号柱穴群では50、第3号柱穴群では40、第4号柱穴群では31である。広がる範囲は第2号柱穴群では南北10m、東西9m、第4号柱穴群では南北6m、東西5mであった。4柱穴群では遺物の発見は何もなかったが、中世には間違いないものと思われる。第3号柱穴群に至っては、その配列状態が整然としており、南北の間隔は1間、東西のそれは4尺5寸、全体的な規模は南北5間、東西22尺5寸の建造物の存在性が考えられる。このような配列状態を成しているものはいままでに上伊那では類例を見ないものと思われる。

D 寄 址

本造構は2カ所検出され、掘り込み面はローム層中に設けられ、双方とも上面ではプランが円形状を成していた。第1号寄址では断面が典型的な袋状を呈し、覆土は人為的な埋没の仕方をしていた。室町前期の造構と考えられ、貯蔵的な用途が考えられる。周囲にピットの存在はなく、屋根の様な構築物はなかったように思われる。

E 井 筋

本造構は西から東へ、わずかな傾斜をもって流れしており、ところどころで蛇行状になっていた。内部には無数の大小さまざまな石と、その下に多量の砂の堆積がみられ、長きに亘って利用された事実がうかがえられる。この続きは現在も西に存在し、水田の引水筋として利用されている。現在は汚れてしまって飲料水にはならないが、城郭構築時には水も澄みきっていたので、それに利用されたものと思われる。時代的な推移は出土遺物より鎌倉前期から室町中期までの約250年間にわたって使用されたものと思われる。おそらく、この事実は本城郭の成立時期から滅亡時期までの長き

に亘って存在した可能性が強い。

F 溝状遺構

本遺構は発掘地区の最北端部の位置に検出され、土地改良事業の都合で、全面発掘は不可能となり、発掘した部分より、その状況について述べてみようと思う。掘り込み面はソフトローム層で、下部及び床面はハードローム層になっていた。覆土中には井筋と同様に拳大程から一抱え大程の石が無数に配列されていた。時代は鎌倉前期から室町後期の中世全般にわたっており、これは城郭成立時から滅亡時までの時代的変遷とともに続いた遺構ではないか。

G 堀 壇

堀は内堀、中堀、外堀の3本があり、内堀は発掘以前より地表に出ていたので、はっきりとした確認ができる。今回の発掘では圃場整備地区外だったので、調査不可能で、その規模は確認できたが、詳細なる点は把握できなかった。

中堀の北側の一帯の現況は前述した西側の井筋最末端となっており、最北端では小戸沢川の段丘崖へと抜け出していた。抜け口は当然のように広く、また、深くなっていた。今回の発掘調査は中堀の南側の重点を置いて調査した。この一帯は明治後半頃埋められて水田化してしまったと言い伝えられていた。実際に南側一帯を調査してみると、堀は鍵の手に東へ曲がっていた。曲がっている附近での規模は上面幅約6.2m、底面幅1.5m、深さ2.7m、東側の段丘崖へ抜け出る附近の規模は上面幅8.5m、底面幅1m、深さ3.9m程であった。さらに中堀の南側の方で、この堀と関連のある堀がみられ、これは南側の外堀へと抜け出していた。この附近での規模は上面幅5.4m、底面幅0.5m、深さ3.2m程を測る。

外堀の存在は発掘当初では全くわからなかったが、内堀、中堀の存在位置より、外堀の可能性が濃厚となってきたので、段丘崖に掘られた跡を根拠に調査を進めていくと、南北に走る外堀が発見された。この堀は北側では残存していたが、南側の方は以前はあったと思われるが、水田造成の折りに破壊されたとみて、わずかに面影をとどめていた。幅は一般的にみられるのと同様に、北側へ向けて幅広く、また、深くなっていた。南側の結果は中央部で弧状に曲がり、一部分にわたって切れていた。これが、いわゆる大手と称する場所で、大手門跡と考えられるピットが存在していた。

H 井 戸 址

本遺構は発掘地区の北東の一角に検出されたもので、ソフトローム層面を掘り込んでつくられ、南北93cm、東西95cmの規模であった。この遺構の発見は上伊那では今回が初めてである。なかなかの出土遺物は水をくみにくるときに何かの調子に偶然落ち込んだものであろうか。発見された遺物によると鎌倉前期頃と考えられる。井戸としては割合に浅く、以前は水脈がかなり上層面にあったものと思われる。この井戸は前述したように井筋との関連性を強く考えておかなければならない。つまり、戦時になり、井筋の上流を止められてしまった場合に、この井戸水を利用したものではなかろうか。

I 集 石

本遺構は黒土層の上面に南北1.4m、東西2.7m位の範囲内に広がり、出土遺物より鎌倉中期頃と考えられるが、用途は不明である。

中世の遺物

中世の遺物としては石器（ノミ状工具）、陶磁器、内耳土器類、砥石、古銭、金属製品、自然遺物等であるが、1つ、1つを取りあげて、簡潔に述べてみようと思う。

A 石器（ノミ状工具）

第51図に記載されたノミ状工具は井戸址内にみられたノミの跡と一致するものと思われ、かたいところを掘る際に、鉄器の替りとして利用されたのであろう。出土の類例がなく、今後の研究に依存するところが多く、また、民俗学的な面からの研究も必要となってくる。

B 陶磁器及び内耳土器

本文の中で詳細に述べてあるので、それを参照してもらいたい。産地は瀬戸系78%、常滑系7%、美濃系1%、青磁、白磁に代表される中国系8%，内耳土器類6%であった。時代的には鎌倉前期から南北朝にかけて全体の50%強を占めていた。

C 砥石

7点出土し、全て中研で、石質は油性頁岩、縁泥岩、蛇紋岩系統のものであった。

D 古銭

欠損品を含めて全部で44点出土し、全てビタ銭である。内訳は開元通宝、祥符元宝、天禧通宝、天聖通宝、熙寧元宝、元豐通宝、聖宋元宝、洪武通宝、永樂通宝であった。日本への輸入経路は、日宋、日明貿易によるところが90%がたであったと思われる。

E 金属製品

出土数が割合に少なく、その器種は筒形状工具、棒状工具、鎌、火打金である。筒形状工具は明確ではないが、刀剣類の一部に附着するものではないかと思われる。いずれにしろ有職故実の方面からも検討を加えてみる必要性を感じる。

F 自然遺物

出土例はほんの数例にすぎなかったが、焼米、小豆の農耕作物がみられた。これは城に立てこもる際の食料として保存がきき、また日常生活の主食と考えられていたものと思われる。

内城附近の城館址について

この説明を述べるにあたり、前で述べた第I章環境、第2節歴史的環境、第2図伊那市内の城塞址分布図を見、較べながら述べていきたいと思う。

① 城平（デンジョウとも言う）

山本部落の南、諏訪神社の北側、白山社と呼ばれている社の裏山にあり、壠が現存している。昭和47年度中央道発掘調査の折りに、この近くを掘ったところ、遺構としては地下倉址3、窓址2、遺物としては内耳土器片、黄瀬戸系陶器片、北宋銭、南宋銭、明銭の出土があった。

② 小出城（本城とも言う）

城部落の南、戸沢川の右岸段丘面にある。現在は壠、土塁が残っている。小出氏の居城と伝えられている。昭和49年度大規模農道開通の折りに、城の西側の郭のはずれ一帯を発掘調査するとほぼ完型に近い内耳土器出土、この状態はどうも妻かぶり幕法に近いものと思われた。

③ 荒城（新城とも書く）（報告書では村岡南遺跡）

戸沢川の左岸段丘面、天竜川の右岸段丘面の合わさった地点にある。西春近北小学校のすぐ東側の位置にあたる。東側に土壘が残っていた。昭和49年度西部開発事業の一環として発掘調査をする。遺構としては外堀、内堀、柱穴群2、地下倉2、遺物としては中世陶器片（古瀬戸鉄釉、黄瀬戸菊皿）の出土があった。

④ 唐木弥七氏宅の東側（報告書では村岡北遺跡）

当館址は発掘されるまで不明であった。天竜川の右岸段丘面、荒城のすぐ北側に位置し、唐木弥七氏宅の敷地内にあった。昭和49年度西部開発事業の一環として発掘調査をした。遺構としては堀址、遺物としては、内耳土器片、中世陶器片の出土があった。この近くの場所より明治10年頃の開田の折りに古銭3,300枚程が出土した。開元通宝から朝鮮通宝まで各種にわたっていた。古銭は桃山時代美濃産の鉄釉壺のなかに入っていた。

⑤ フブキ垣外の城（報告書では中村遺跡）

北は戸沢川の右岸段丘、南は小戸沢川の左岸段丘、東側は天竜川右岸段丘の合わさった地点にある。下島部落の西側段丘面が城である。昭和52年度西部開発事業の一環として発掘調査を実施し、堀を発見する。

⑥ 内 城

カンバ垣外遺跡内に含まれ、この報告書が該当する。従って、遺構、遺物等詳細な点については本報告書を見ていただくこととする。

⑦ 丸 山（地元の人は中山城と呼んでいる）

南小出部落の東端、北側は細窪と呼ばれている洞のすぐ近くにあり、内城のすぐ南側に位置し、外堀、内堀、帯郭がみられる。昭和54年度中に発掘調査をする予定である。

⑧ 細 窪

南小出部落の東端、丸山のすぐ南東に位置し、地形的にみてみると、南側は犬田切川左岸段丘面北側は細窪と呼ばれている洞、東側は天竜川右岸第二段丘面の合わさった地点にある。昭和49年度タカノ株式会社土地造成の折りに発掘調査をした。遺構としては堀址、柱穴群の発見、遺物としては中世陶磁片の出土をみた。

内城の成立時期、存在時期、衰退時期について

これは大変困難な問題であり、確たる論拠は望めないが、出土遺物からして大般の結論は導き出せるのではないか。

出土遺物からして、鎌倉前期に始まり、室町後期に滅亡しているものと思われる。鎌倉前期は工藤氏が最初に小出に居た頃であると、工藤文書、尊卑分脈、吾妻鏡等の古文献に記されている。これを裏付けできるかのように出土陶磁器類の約50%近くが鎌倉から南北朝期に集中していると言ふことに重要な意味をもっている。また、中国の青磁、白磁の優品が全体の10%近くにも達するのは、ここに、政治的、経済的両面にわたって勢力をもっていた支配者が居住していたことが裏付け可能であると思われる。

本城郭が日常生活の場であったか、戦時にたてこもるだけのものであったかについて

瀬戸市民俗資料館長宮石宗広氏の談によると『こね鉢、あるいはすり鉢等の日常雑器の器面が磨滅する程使用してある。このことはある程度、この郭の中で日常生活をしていたのではないか。さらに天目茶碗の概念をあらためなければならない。今回出土した天目茶碗は二流品が多い。この種のものは茶に使用する碗としては不適格である。つまり瀬戸で焼かれたもののなかで一流品は京都や茶人の間、あるいは茶をたしなむ武将の間へ流通してしまって、伊那谷へ入る可能性はまずないと考えられる。しかし、瀬戸の工人達は二流品を売りさばかなくては経済的に成り立っていない。そこで、日常雑器のようなかたちで天目茶碗を瀬戸から近い伊那谷へ売りさばいたものと思われる。従って、伊那谷の中世遺跡から天目茶碗が多量に出土しても別に不思議ではないと考える』

以上、実際に発掘した面からの検討をしてみたが、こんどは古文献からの吟味を若干してみたいと思う。

工藤氏・小出氏について

(1) 犬房丸伝説について

この伝説の大まかななりゆきは第Ⅰ章環境、第2節歴史的環境のところで詳細に触れておいたので、今回は省略することとする。犬房丸が亡った際に常輪寺に葬られた。この寺には「貞永元年六月二十六日、法名大通院殿党翁常輪大居士」の位牌があり、墓地には寛永八未辛年九月建立の卵塔がある。小出区では犬房丸が使ったと言い伝えられている膳、椀などを保管してある。

(2) 小井亘文書

西春近小出地籍に繁栄した工藤氏に関して書かれた文書を工藤文書、または小井亘工藤文書と呼ばれている。その文面の内容は鎌倉時代の譲状や争論に関する幕府の裁許状など5通が、諫訪市矢島彦治氏の所蔵となっている。

工藤氏・小井亘氏の系統を尊卑分脈や工藤系図などから引用してみると、第56図のようになる。同図によれば、犬房丸の父、祐経の従兄弟になる工藤家俊が信濃国に居住して、林二郎と号した。家俊の一族が小井亘二吉郷の地頭職となっている。

小井亘に定住した工藤氏は小井亘氏と名を改め、惣領家を中核として、その分流が繁栄していくと、しだいに、田畠の境界や年貢のことでの争いが起るようになってきた。この時代には所領が譲られるには譲状とそれに対する幕文の下文（くだしぶみ）、安堵状とによってはじめて公の効果をなすものとされていたので、争いも幕府に申し出て、その判決も裁許状によって解決されるようになっていた。小井亘文書は譲状、安堵状、裁許状からなっている。次に小井亘能綱がその子師能、宮熊に与えた譲状をここに記載しておくことにする。

① 小井三能調の図状 建長三年二月五日

(前略) シハラのむろよしに張わたす らうだい相伝の所領にて
ふたよしのし四さかのとへ、宮藤右馬大輔子(そら)の
漁状に見えたり。そのうちの近藤家のほりのうわにへて、
(あだ)限、やま小はらのさわのすへだ、ことうさしけのを
また(後)限、やま小はらのさわのすへだ、ことうさしけのを
たのさわしりを、からも木のものとへ、そのながれをたう
の次郎かみなるさわの末を、大くねきのもとまで、
ひかしへかり、新大夫在室のにしのさかい、たうしけみち
に見えたり、それをみなたうしふうたのみうをくたりに、
大みやまで、大みちをみのみへ、大とさわにうきくへ。
(後) しハ限、やまかはらのくつれのさきをくたりに、ともの木
(後略) はかがるてしろへ、そのながれをくたりに、大明神の森の
にしのみやまをみなへなれをたつねで、大とさわを大通
もじせ(て)ありつくへ」。

(中略)
(前略) みなみへとさわのみそのあわをきだんあしはら池のなかをの
ほりに。ほそ田をくわへて、かみのふるほりを大かわるのす
ゑをくたりに三五郎か田のかしらのきれつゝみまで

(後略)

建長三年二月六日

② 小井三能調の図状 建長三年二月六日

重代相伝の所領、小井三よたよしの室四さかの事へ、宮藤
右馬大輔子忠綱のゆつり状に見えたり。そのうち能調が施行
之分官照わういに課わたす至四さかの事。

(前略) おくる川のものと、さかりおのさき、おきそ、こい
る、こまかたけのどまで、このながれを大道も大道をみな
みさまに、新大夫か在室のみなみのものがしまして。

(後) へかきり、こまかたけのとくまで、そのみねをくたり
に、くわうのいたのひかしきのお大とさわのふかさきりつ
く。そのながれをしぬたきりのとまび、

ひかしきり、ふなどりの田のしりぞ、ひかしきたにき

りつくと、おもだめのよしつなにゆつりわたす証文め

いわくなり、かみに田なきによりて、しもの田をくわう、し

まへざる、みそのもとをはじめとして、みちへをわせ田の

しり、はやしの田のみなみのみちを元三郎か田の

しりへ、そのすゑを三みそをのほりに、よこまくり田のみな

みのそはをくされ、あめみそのたきのもとより、ひかしき

(後) おはんとうたといふらの居たりしところ、

こうすいにおしらしなわれて、今ハたかしまと名づけたり、

しかれはその橋のきわみみなさまに、また水を(後)のあと見

ゆ、それをみなみへふるかわまつたうしの川見すとくへと

も、かわしつほの松と十郎か室のにしのふる川をくた

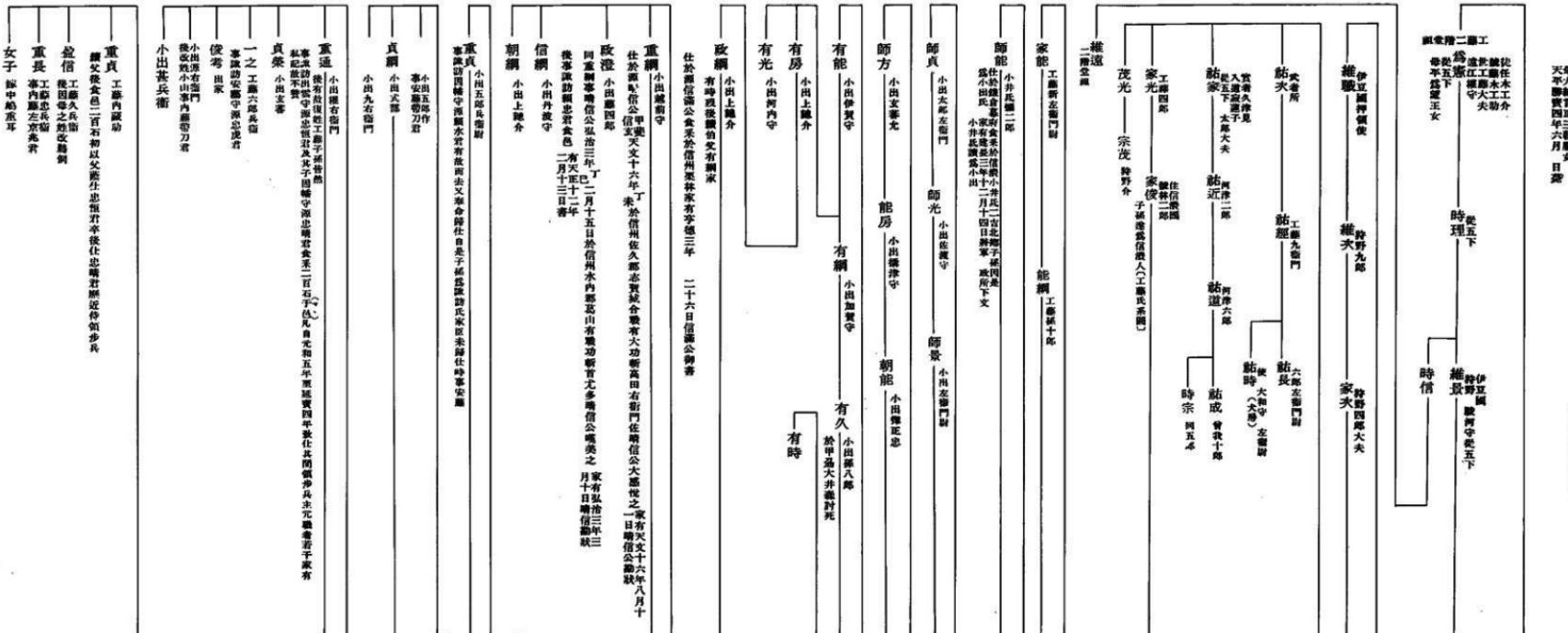
りに行く、大河につき、名へしぬたきりかとに見あてゝさた

すへし

(後略)

③ 小井三能調の図状 建長三年二月六日

御沢の界へ、みの森のはそみち、たかのすを見あつへ、
ひかしへ、よこ道をさか、
みなみへ、藤さわ川をきる水の立とまりまで、
そのうちに御作山本より外に余所ある間敷候



第56図 工藤氏の系図（信濃勤皇史叢より）

先にかかげた譲状に記された小井亘二吉の東西南北の境界は北は小黒川、西は駒ヶ岳の嶺まで、南は藤沢川、井の久保の辺までとなろう。東側は天竜川の流れが移動するのではっきりはしないが現在の行政で考えてみると西春近のはば全域と東春近の西の一部分が該当するものと思われる。

最後に本城郭が誰のものであったかを 実際の発掘によって知り得た知見と文献との両面から判断して総合的な結論を出してみようと思う。前述したように出土陶磁器により鎌倉前期から室町後期にわたって存続した城郭であることはまちがいないだろう。文献、あるいは第56回工藤氏、の系図により、同氏は鎌倉前期に小出に住み着き、室町後期に神氏に従って諫訪へ移住している点からみて、本城郭は工藤氏（小井亘氏）の城郭と考えられる。さらに、詳しくみると工藤氏（小井亘氏）のうちの誰の住んだところであったかについては、惣領家、あるいはその分派のうちのどれかであろう。内城（うちじょう）という地名がついている点から考えると、城郭のうちでも中心的なものであり、したがって、同氏の中心的人物（即ち、惣領家の）な城郭であったと考えられる。

カンパ垣外遺跡報告書作製に当っては、地元の故辰野伝衛氏（生前に多くの資料を筆者に提供してくれた）、瀬戸市立業民俗資料館長宮石宗広氏、常滑市教育委員会社会教育課赤羽一郎氏、信州大学農学部助教授氏原岬男氏、現場に何度も来訪され、適切な助言をして下さった宮田村教育委員長向山雅重氏の各位に対して、心より感謝の意を表するものであります。

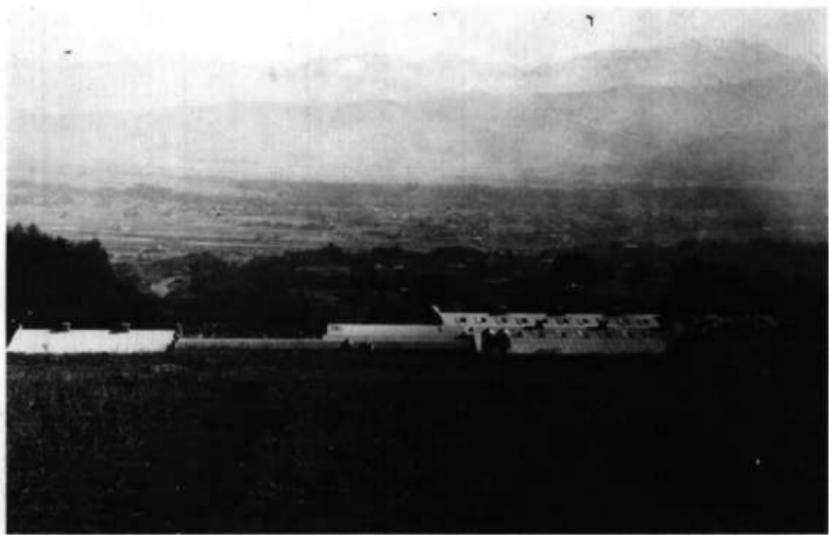
（飯塚政美）

参考文献

- 尊卑分脈 吉川弘文館（国史大系）
- 吾妻鏡 吉川弘文館（。）
- 伊藤富雄 工藤文書の研究 伊那路（4の11~12、5の2・4）
- 篠田徳登 伊那の古城 伊那毎日新聞社
- 市村成人 建武中興を中心とした信濃勤王史叢（上巻・下巻）
- 貨幣手帳 頌文社
- 小室栄一 中世城郭の研究 人物往来社
- 大熊城跡遺跡調査団刊 諫訪市大熊城址遺跡
- 長野県伊那郡飯島町教育委員会刊 唐沢城
- 南信土地改良事務所刊 本郷南羽場陣垣外
- 飯島町教育委員会刊 本郷南羽場陣垣外
- 小井亘文書とその郷土的背景（信濃六卷6号）
- 伊那市教育委員会刊 伊那市寺院誌
- 東春近村誌刊行委員会刊 東春近村誌
- 伊那市教育委員会刊 東方A・村岡北・村岡南・常輪寺下・北条遺跡
- 南信土地改良事務所刊 小出城（城南）・浜射場遺跡

16. 伊那市教育委員会
南信土地改良事務所) 刊 中村遺跡
17. 伊那市教育委員会
タカノ株式会社) 刊 南小出南原遺跡
18. 日本道路公団名古屋支社
長野県教育委員会) 刊 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
—伊那市西春近—昭和47年度

図 版



遺跡地を西側より眺む



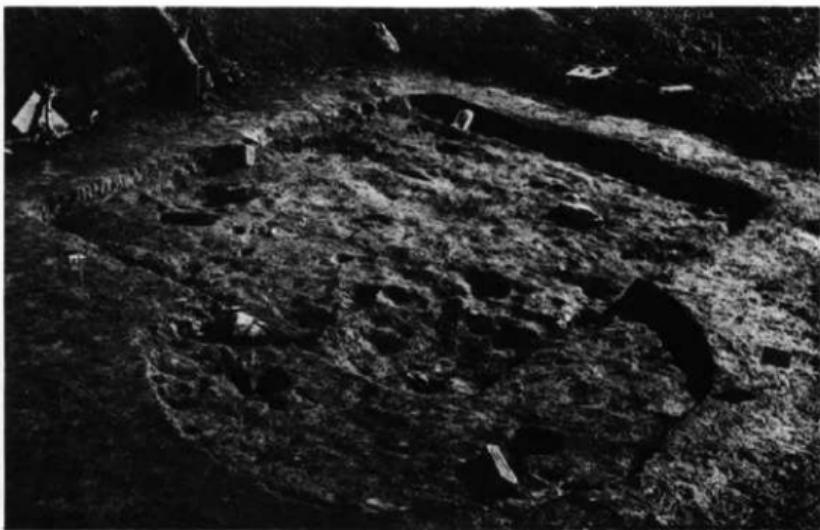
遺跡地を東側より眺む



遺構配置



遺構配置



第1・3号住居址



第2・7号住居址



第5号住居址



第6号住居址



第3号住居址カマド



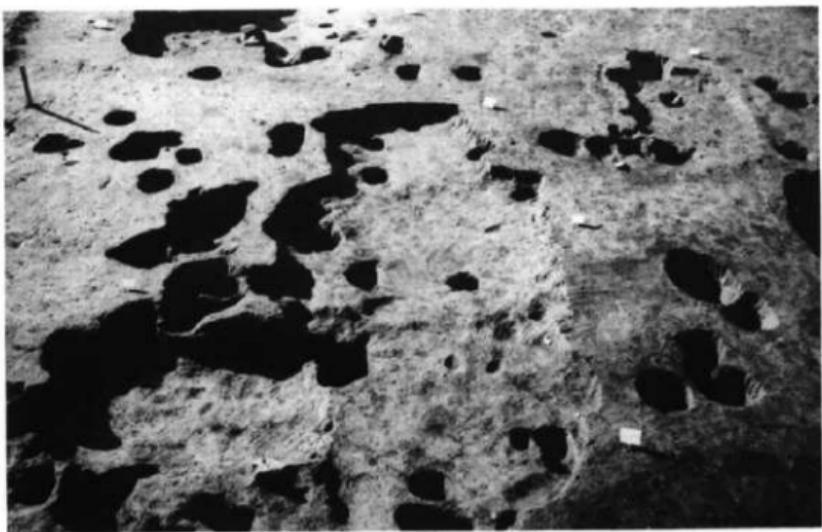
第4号住居址埋葬炉断面



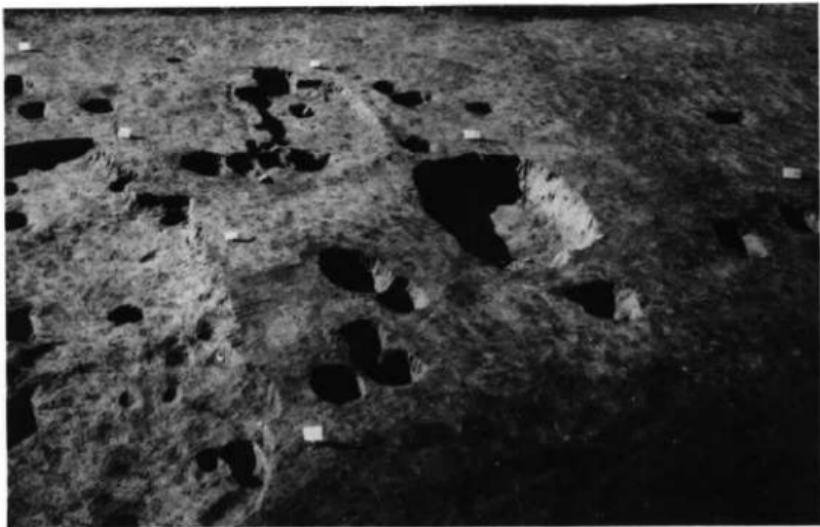
第1・22号竖穴



第2号竖穴



第3・4・5・6・7・8号竪穴



第9・10号竪穴



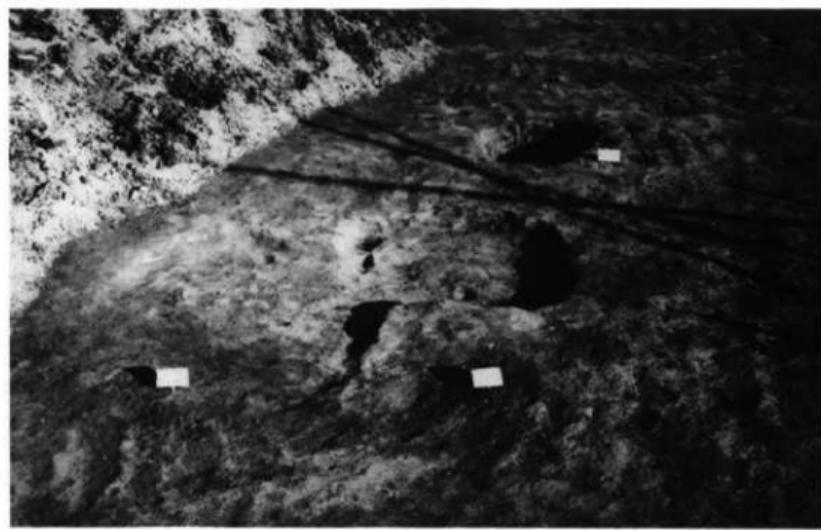
第11号竖穴



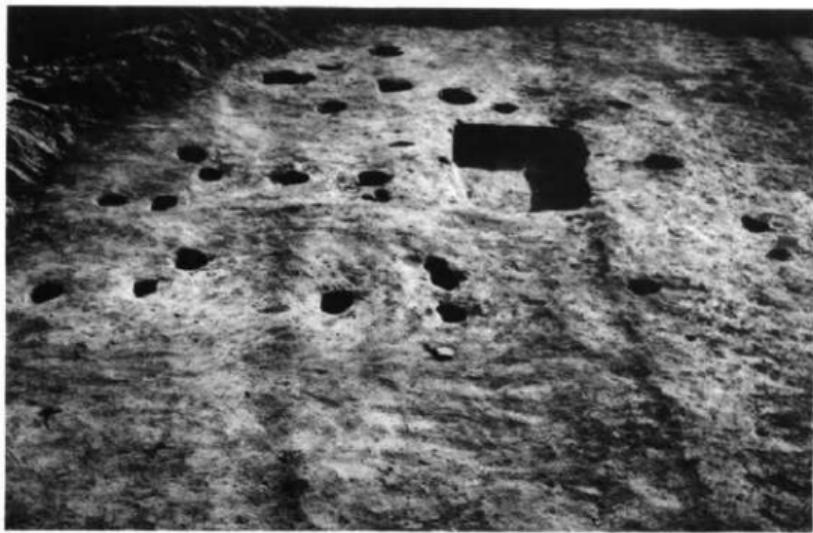
第12・13号竖穴・第1号溝状遺構



第14号竖穴



第15·16号竖穴，第2号窖址



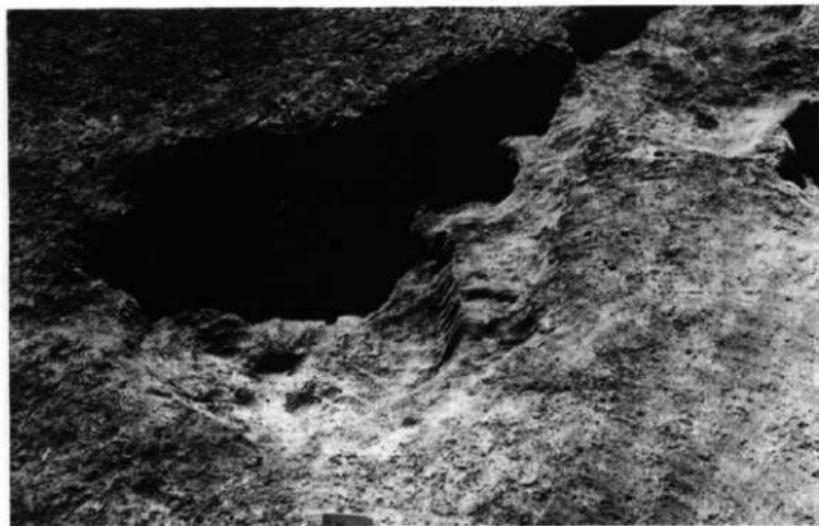
第17号竪穴・第4号柱穴群



第18・19・20号竪穴



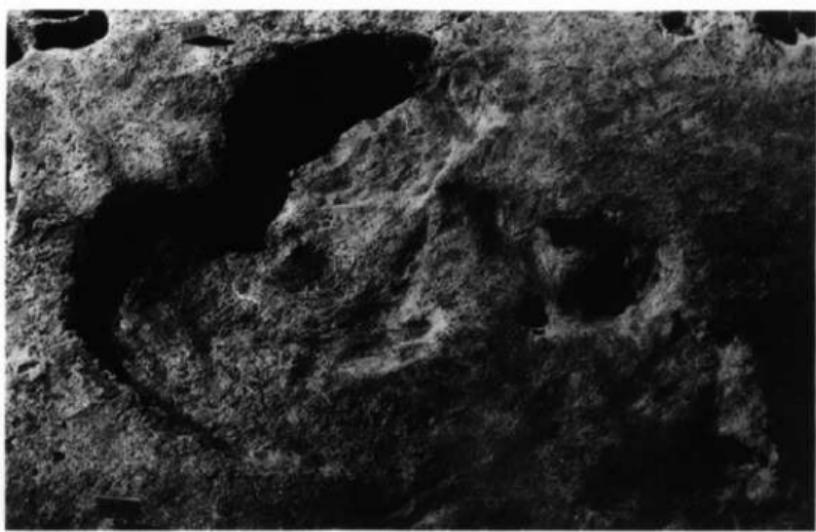
第1号土塗



第2号土塗



第3号土塙



第5・6号土塙



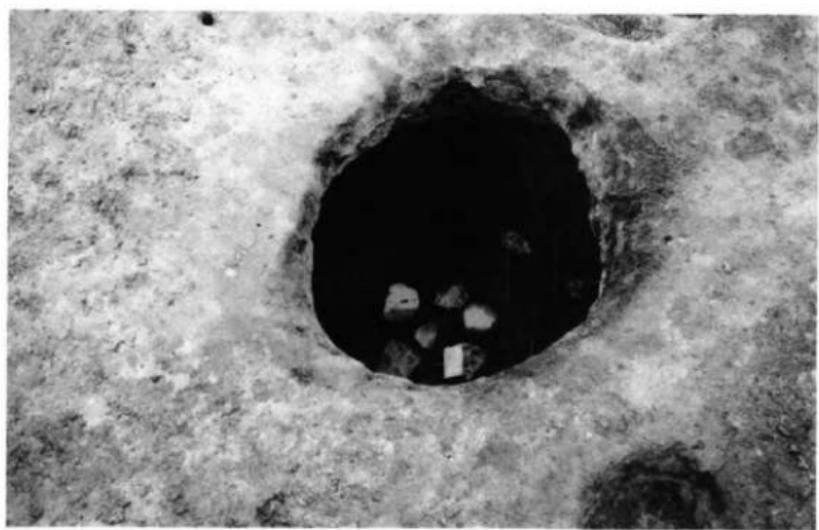
第1号柱穴群



第2号柱穴群



第3号柱穴群



第1号窖址



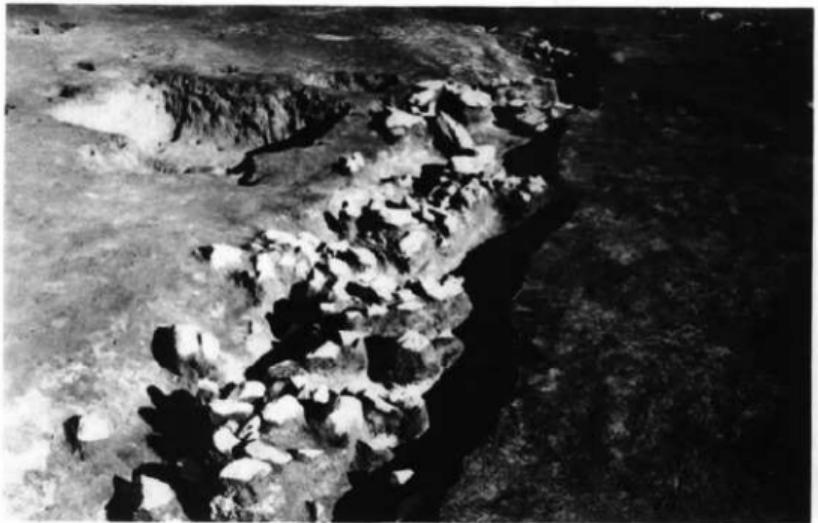
現存する井筋



井筋の近くにある石碑



井 筋



井筋のなかの石



内 塚



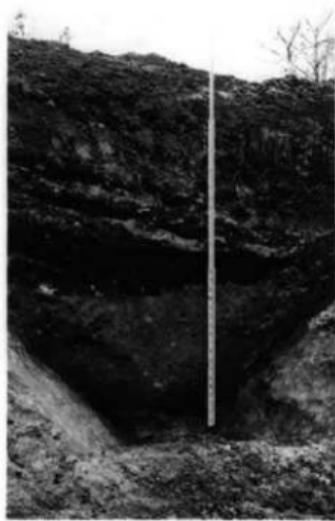
中 塚



中堤北側の段丘崖へ抜ける個所



中堤東側で外堤に抜ける個所



中堀の断面



中堀の南側の堀の断面



外堀の鍵の手に曲がる個所



外堀の鍵の手に曲がる個所



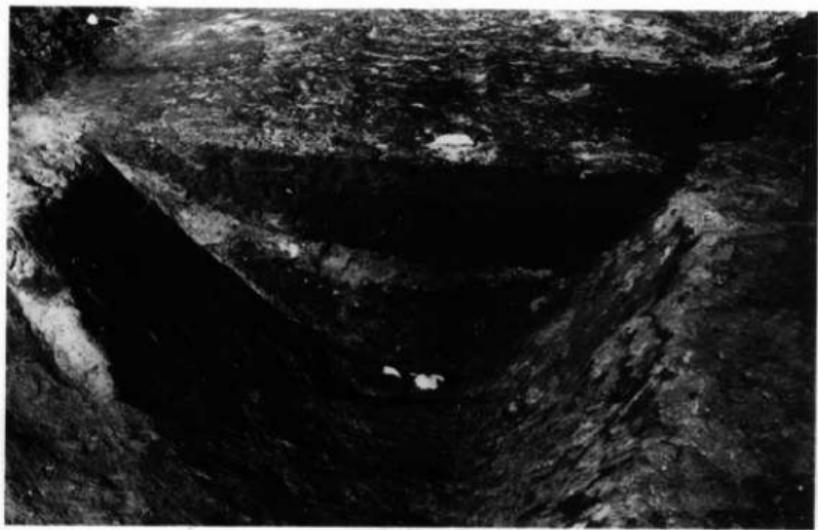
外堀北側段丘崖に抜ける個所



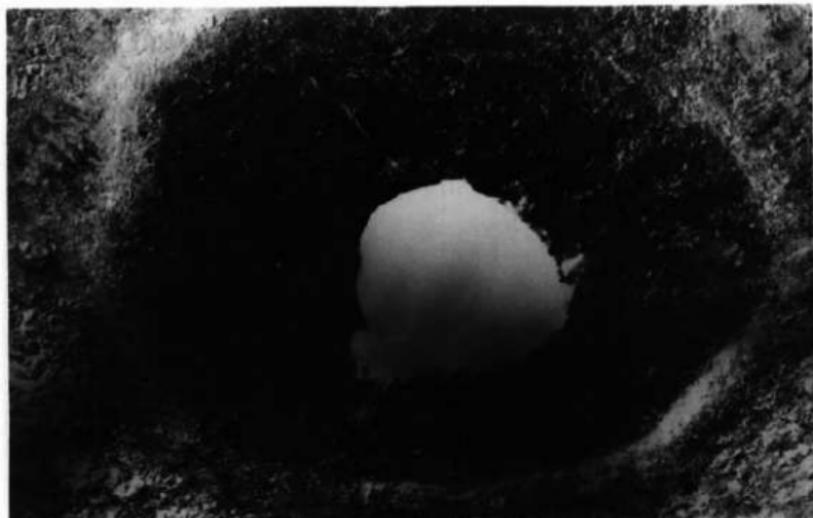
外 堀



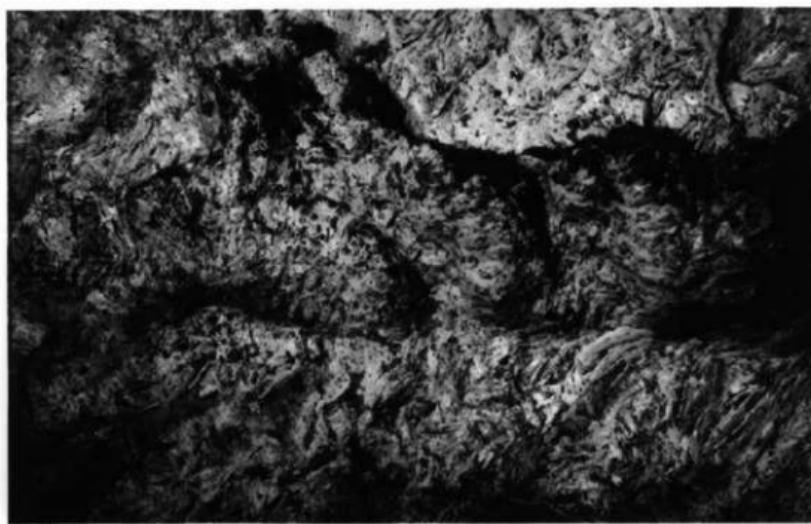
外堀の切れた箇所



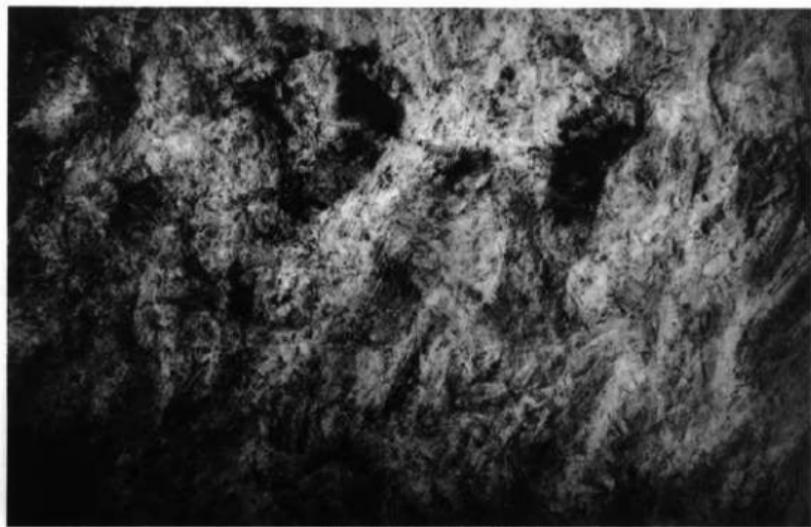
外 堀 の 断 面



井戸址の上面



井戸址の内部（ノミの跡が顯著）



井戸址の内部（ノミの跡が顯著）



第1号集石



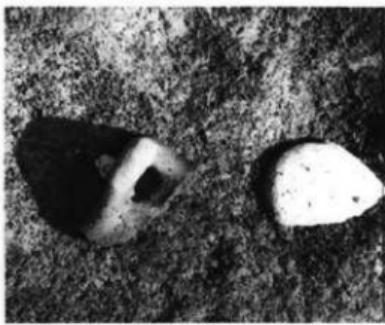
土器出土状况



金属器出土状况



铁器出土状况



内耳土器出土状况



古钱出土状况



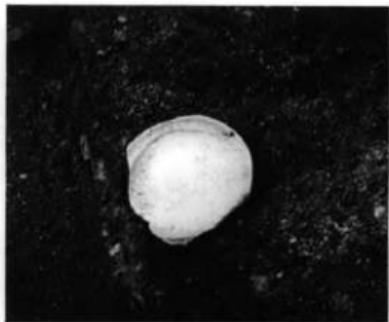
砾石出土状况



研石出土状況



石器(ノミ状工具)出土状況



陶器出土状況



陶器出土状況



陶器出土状況



陶器出土状況



陶器出土状况



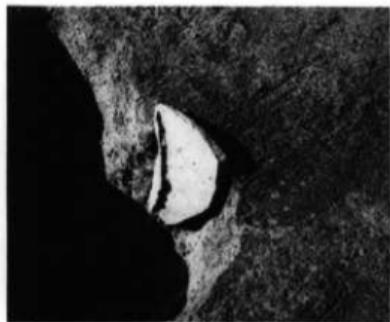
陶器出土状况



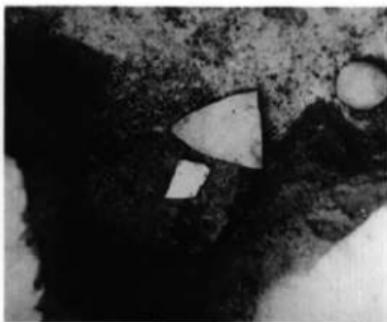
陶器出土状况



陶器出土状况



陶器出土状况



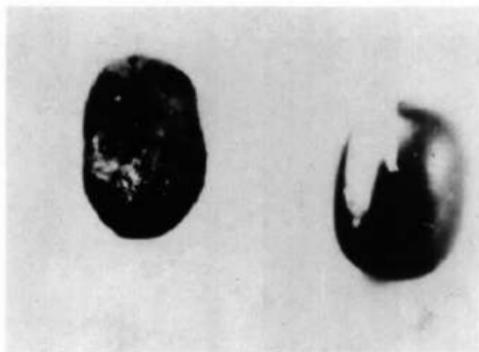
陶器出土状况



炭化米粒 ($\times 6$)



炭化豆粒 ($\times 6$)



現在の小豆(右)との比較 ($\times 6$)



現在の精米(右)との比較 ($\times 6$)

あとがき

昭和53年12月6日、寒風の吹きすきむ日から調査が開始され、12月21日まで霜柱の立つ毎日、そして、吹霜の日にも遺跡の調査に御努力下さいました地元の皆様に対し深甚なる謝意を表する次第であります。遺跡については緊急発掘であるため全面調査が出来えなかつたが、当初の予想通り、貴重な資料が発見された。個々については報文に譲り、ここでは、それぞれの遺構の意義についてあとがきとしたい。

本遺跡で最大な関心時は、小出の地に勢力をもつっていた工藤氏の居館址が何所にあったかと言う点である。私共調査団はこの地方に残る、当時の資料としては唯一の工藤文書の裏付けなる研究になり得るならばと、大きな希望を持って調査を進めて来た結果、そのかいがあつて、工藤文書の持つ歴史性の一角にたどり付くことができたのは、何と言っても大きな収穫と言わなくてはならない。今後は、これ等の事実を基として地方史の解明に向う足掛りとなつたことは本当に喜ばしいことと言わなければならぬ。また、本遺跡からは繩文早期～前期初頭に位置づけられる遺構、遺物の発見、奈良時代末と考えられる住居址などの城郭築造以前の先人達の遺構が調査された事実も注目に値する。そのほか、城郭初期に於ける遺構と、南北朝期、室町中期の遺構が明らかにされたことは、城郭の各時期に於ける機能の分析に大いに役立つこととなつた。今回の調査で特に力をそそいだのは出土した陶磁器の分類であった。記録のない城郭の調査にあつては、こうした資料によらざるを得ないのが現場でもある。その結果、これ等陶磁器の分析は本城の創建から終末の時代決定とその内容を知る上に大きく貢献することとなつた。今回調査されたカンバ垣外遺跡は以上の意味で、この地方に於ける城郭の有り方の研究に大きなプラスとなつたことと思う。

調査団長（友野良一）

カンバ垣外遺跡

緊急発掘調査報告

昭和54年3月15日 印刷

昭和54年3月17日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会
印刷所 下諏訪町広瀬町
オノウエ印刷㈱

